

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

# Kodak Color Control Patches

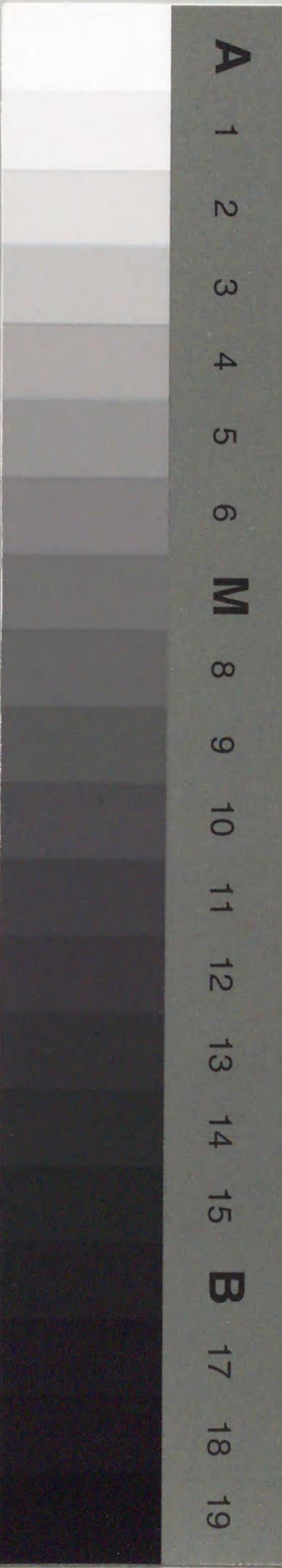
© Kodak, 2007 TM: Kodak



# Kodak Gray Scale



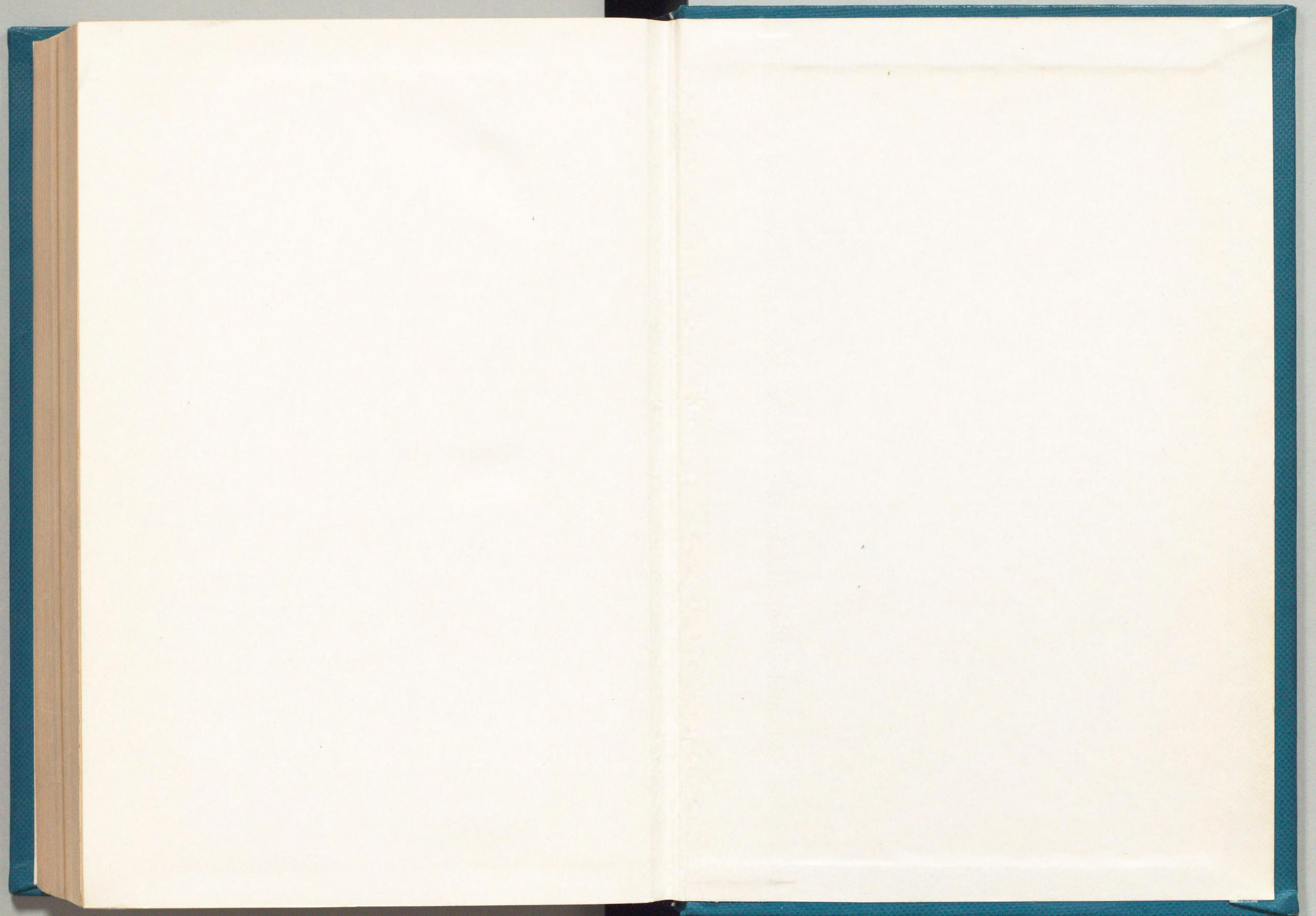
© Kodak, 2007 TM: Kodak



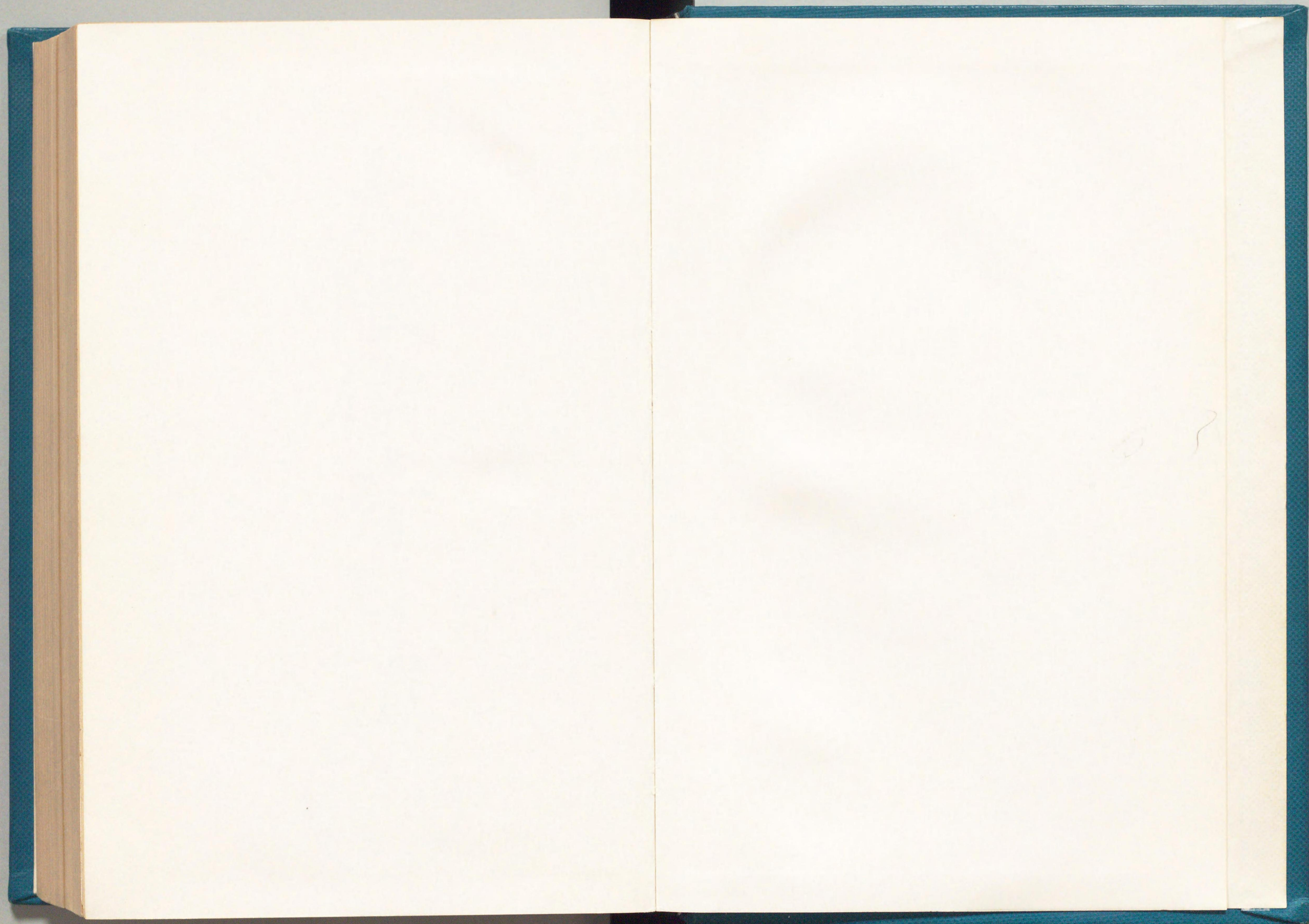
GB421  
23  
00739026

〇  
複写







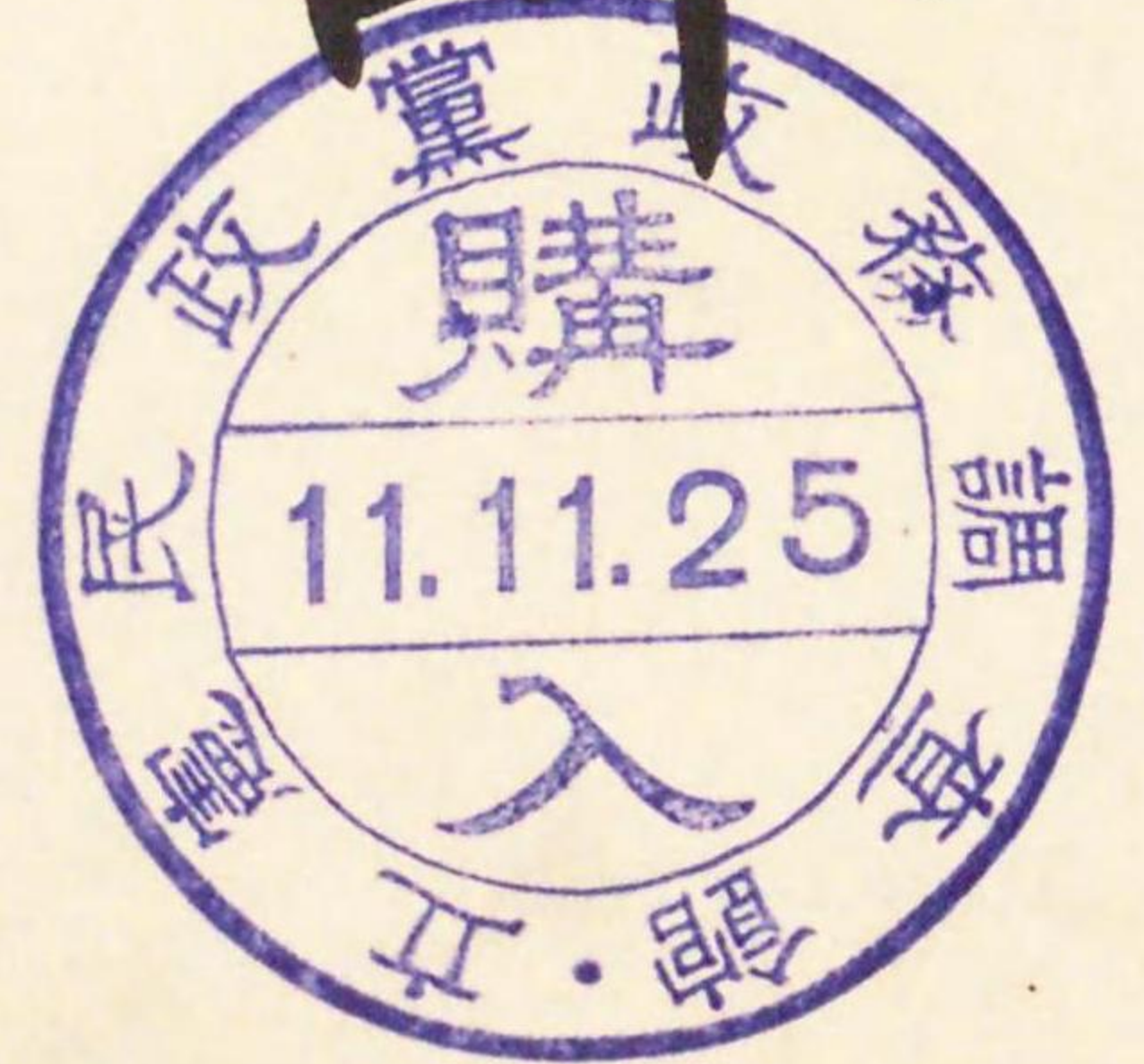




1022

三才切ら

大隈侯昔日譚





GB421  
23



維新當時の大隈伯

本書もと「大隈伯昔日譚」と題せるもの。再刊に際して「侯昔日譚」と改む。今にして「伯」と呼ぶは、讀者或は別人の感あらんを恐るれば也。



739026





伯隈大の時當新維

GB421  
23

本書もと「大隈伯昔日譚」と題せるもの。再刊に際して「侯昔日譚」と改む。今にして「伯」と呼ぶは、讀者或は別人の感あらんを恐るれば也。

東京大学  
42.8.25  
圖書印

739826



## 自序

天下快樂多し、而かも英傑に就きて親しく其平素の言行、從來の經歷を聴くが如きは快樂中の最も快樂なるものならん。

大隈伯は一世の英雄なり、明治の俊傑なり。身は一介の書生を以て王政維新を距る十數年の前に崛起し、爾來數十年間、常に天下の憂を懷き、親しく内外の政務に關繫し、其朝に在ると野に在るとを問はず、必らず國運變遷の一大要素と爲れり。其言行の卓拔なる、其經歷の豊富なる、世間殆んど其儔を見ず。

余幸に伯の知を辱ふす。乃ち日夕其閑を請ふて平素の言行、從來の經歷を聴くことを得之を以て無上の快樂と爲し、且嘗て之を筆録して『郵便報知新聞』に掲げ、以て世に示したる事あり。蓋し、微意、世人と其快樂を分ち、世人をして伯及び當年の事情を知悉せしめんと欲するに在りしなり。

愚衷空しからず、愛讀者日に加りて大に世の喝采を博せしが、昨臘故ありて報知社を退くと同時に、其筆録の掲載を中絶せしたため、頗る同好の士を失望せしめたりと



見え、其續稿の公示を迫ると共に、從來の筆録を輯めて一卷の書と爲し、以て廣く世に頒たんことを勸むるもの尠なからず、即ち舊稿を輯めて伯の補正を請ひ、大に改竄添削を加へて一帙と爲し、新たに梓に上せて以て同好の士の勸奨に應ずることと爲せり、之を名けて『大隈伯昔日譚』と言ふ。録する所は、伯が『少壯時代の經歷及佐賀藩の事情』に始まりて明治六年に於ける『征韓論』に終る。

若し夫れ『征韓論』以後の言行經歷に至りては、行く／＼伯の閑を請ふて之を聴録し、此書の後編として世に公示せんことを期す。只だ、英雄の言行は健筆を以て之を記せざる可からず、俊傑の經歷は名文を以て之を録せざる可からず、然らざれば、其真相を讀者の眼前心裡に躍々たらしめて以て其感激の念を惹起す能はず。余の拙筆にして不文なる、固より以て伯の言行經歷を縦横に描寫する能はず、讀者をして隔靴搔痒の感あらしむるは深く自から之を恥づ、乃ち之を恥づと雖も、その之に依りて一世の英雄、明治の俊傑たる大隈伯を知り、且つ維新前後よりして明治五六年に至るまでの間に於ける大問題大事件に關する伯の意見議論と兼て之に對する運動とを知悉するに足るべきは信じて疑はざるなり。語を換て之を言へば、此書は伯

が前半生の自叙傳として、且つ精竅雄大なる維新改革史、若くは明治當初の活歴史として、國運變遷の上に、歴史攷考の上に、將た個人處世の上に偉大の利益を興ふるに足るべきを信するなり。

惟り、時と事と尙ほ甚だ遠からず、從つて國務の隆替、人物の良否、共に未だ秘密緘黙を保たざる可からざるものなきにあらず。想ふに、是れ世人の最も聞知せんと欲する所なるべしと雖も、漫に之を暴白するが如きは、政治家、君子人の大に戒慎せざる可からざるもの、伯實に之を語るを好まずして、而して余も亦之を筆するを喜ばず。只た、年處漸く遠く、國務の可否、人物の評論、共に緘密忌諱を要せざるを待ち、則ち伯に請ふて審かに其隆替良否を聴き、之を公示して以て世人の欲望を満足せしむるの日あらんことを冀ふ。

同好の諸士中、若し此書に對して異見又は補遺の事證を有するあらば、請ふ其稿を投寄せられよ、則ち此書の再版若くは後編出版の折、其附録として更に之を世に示さん。庶幾くは後の歴史を編纂するものに若干の資益を興ふるを得んか。

因に記す、此書の第一章は齋藤新一郎氏の手に成り、第二章より第六章までの五章



は故矢部新作氏の執筆に係る。輯めて一卷の書と爲すに當り、大に改竄添削を加へたりと雖も、尙ほ用辭筆調に多少の差異あるを免かれず。且つ通じて一たび久米邦武氏の批閱を経たりと雖も、上梓豫約の期已に迫りたるを以て、十分に其是正を得る能はず。是れ久米氏の遺憾とする所なるのみならず、余も亦切に之を遺憾とす。幸に再版三版を期して更に久米氏に請ひ、以て此遺憾を除くを得ん。今は唯特に之を掲げて其勞を謝すと云爾。

東京牛込の僑居に於て

天山 圓城寺 清識

### 再版に當りて著者に代り

著者逝いて五年、『大隈伯昔日譚』も亦絶版の止む無きを思ひしに、圖らずも佐藤義亮君の好意に依りて、今其の再版を見る。苔石の下、著者の喜び、如何ばかり大なるものあらんかを察して、深く出版者に感謝の意を表す。

『大隈伯昔日譚』は、著者學校を出て間も無く筆録にかゝりしもの也。従つて、著者自身も言へる如く、不文或は一代の英雄を寫すに足らざるものありしならん。殊に、當時にありて言議を憚りし事實に對しては、著者が絶対に遺憾を感じし所也。乃ち、『大隈伯昔日譚』の再版は、著者が深く責任を感じて、世間にも公約し、且つ自からも樂みとして、其の必成を期せしもの也。

然るに、著者不幸にして、終に其の機會の到るを俟つ能はずして早世す。人の齡に限りは無けれど、切めては生ける常ならんには著者の望みの、決して空しからざりしを思ふ。然れども、今は何事もいふて詮無し。

此の再版固より著者の期せしものには非ず。然れども、事實は不文の故を以つて違はず、當時言議を憚りし事亦多くは依然として今猶ほ忌諱の圈内を脱せざるを思へば、今日此の再版必らずしも無理と謂ふ可からず。唯斯くの如き次第なるを以つて、初版



の缺所は其の儘に此の再版にも免かれず、著者と共に大に遺憾無きを得ざるも幸に世の寛大なる諸士萬事を諒察して、切に愛讀の榮を垂れ賜はん事を冀ふ。

大正二年十二月

著者の實弟 圓城寺 良

## 大隈侯昔日譚目次

第一章	少壯時代の經歷及佐賀藩の事情	一
第二章	幕府列藩の形勢及維新改革の原動力	一一九
第三章	維新前後の外交事情	一九八
第四章	大政返上の真相	二〇五
第五章	外交の初陣	二一一
第六章	宗教問題	二三五
第七章	蝦夷問題	二四五
第八章	徳川家處分問題	二四九
第九章	遷都問題	二五二
第十章	横須賀恢復、軍艦兵器買入、江戸平定等の諸問題	二六四
第十一章	鎮將府	二八〇
第十二章	英人暗殺事件	二八八

目次



第十三章 財政に關する外交……………二九七

第十四章 藩 籍 奉 還……………三一五

第十五章 封 建 と 憲 法……………三三四

第十六章 進歩主義と保守主義の消長……………三五三

第十七章 廢 藩 置 縣……………四三三

第十八章 廢藩置縣後の改革……………四四五

第十九章 使節派遣中の政事……………四六〇

第二十章 征 韓 論……………五一三

# 大隈侯昔日譚

圓城寺 清 編

## 第一章 少壯時代の經歷及佐賀藩の事情 (上)

人生の歴  
史は功過  
相半す

凡そ、人間一生の歴史は、功過相半するものなり。輒もすれば功過相償ふ能はずして、過誤失敗のみを遺すもの多し。余が如きも、過去三四十年の事迹を回顧すれば、實に慚然たらざるを得ず。微功の録すべきものなきにあらずとするも、亦以て特に掲げて世に稱道するには足らず。然りと雖も、數十年の久しき、種々なる經歷の中には、或は世人の未だ聞知せざる事迹もありて、今更に耳新らしき思ひを爲すもの少なからずと思へば、姑らく少年粗暴の當時より近時に至るまでの經歷の概略を語りて、世に示さん。

夫れ人生の行爲を支配し、精神を修養するは、多くは、少年時代の教育、及び其境遇の如何に在り。余が今日までの公私の經歷を詳かにせんには、先づ余が一介の書生たりし當時の事情を知るを要す。

小壯時代の經歷及佐賀藩の事情



余が郷里たる佐賀藩には、弘道館てふ一大藩黌ありて其の生徒を内生、外生の二校舎に分ち、今の小中學の如く、一定の課程を設けて嚴重に之を督責したり。藩士の子弟にして六七才になれば、皆外生として小學に入らしめ、十六七歳に至れば中學に進みて内生となり、二十五六歳に至りて卒業せしむる程度なり。若し其適齡に及ぶも、猶學業を成就する能はざるものは、其罰として家祿の十分八を扣除し、且つ藩の役人と爲るを許さぬ法なりき。(是を課業法といひ嘉永三年に施行したり)然るに其教授法は、先づ四書五經の素讀を爲さしめ、次に會讀を爲さしむるものにして、其學派は専ら頑固窮屈なる朱子學を奉ぜしめ、痛く他の學派を擯斥したり。斯くの如き學制なりしを以て、闔藩の少年子弟は、皆、弘道館に入りて、其の規定通りに朱子學を修め、試験に及第して家祿を全收する志を起さざるを得ざらしめたり。偶々、高材逸足の士あるとも、此の方途を踐まざれば其の驥足を伸ばす能はざるが故に、一藩の人物を悉く同一の模型に入れ、爲めに倜儻不羈の氣象を亡失せしめたり。藩黌に入りて制科に及第せざれば、家祿を減ぜらるのみならず、亦仕途に就く能はずと爲すは、是れ明清の登科及第法よりも嚴酷なるものなり。明成祖が對偶聲律を以て人を探れるさへ、猶後人に秦皇の焚書愚人法よりも有害なりしとて非議せられたり。佐賀藩の學制は、豈に餘多の俊英を驅りて凡庸たらしめし結果なしとせんや。

余が始めて學に就きたる時代に於ける佐賀藩の學制は此の如くなるが上に、又其窮屈に加味する

に佐賀藩特有の國是とも謂ふべき一種の武士道を以てしたり。謂ゆる一種の武士道とは、今より凡そ二百年前に作られたる實に奇異なるものにして、而して其武士道は一卷の書に綴り成したるものにして其書名を『葉蔭』(葉がくれ)と稱す。其の要旨は、武士なるものは惟一死を以て佐賀藩の爲めに盡すべしと謂ふにあり。天地の廣き、藩土の多きも、佐賀藩より貴且つ重なるものあらざるが如くに教へたるものなり。此の奇異なる書は一藩の士の悉く遵奉せざる可からざるものとして實に神聖侵す可からざる經典なりき。其開卷には「釋迦も、孔子も、楠も、信玄も、曾て鍋島家に奉公したる事なき人々なれば崇敬するに足らざる」旨を記したる一章あり、以て該書の性質を窺ふに足る。且信玄を以て釋迦孔子に配したるは、當時信玄が如何に武人の間に尊敬せられたるかを徴すべきなり。

佐賀藩は實に斯の如き經典と朱子學とを調和して教育主義となし、之を實行せしむるに、陰に陽に種々の制裁ありて、一步も其範圍外に出る能はざらしめんと務めたりき。是を以て、私學、私塾の如きは之を賤斥して士林に齒ひせられず。他に新奇なる學說意見を立るものあれば、悉く目するに異端邪説を以てし、痛く之を排斥したり。故に、一藩の年少子弟は皆此の嚴格なる制裁の下に束縛せられ、日夜孜孜として只管に文武の課業を勵むの外は、毫も游刀の地はなかりしなり。當時、余も亦た其の束縛を免るゝ能はざりしが、後漸く長するに及んで、其形勢次第に陵夷し、



窮屈なる學制の束縛は頽然として壞敗するに至りぬ。而して余は實に其束縛に反抗し、學制の改革を促がしたるもの、一人なりし。然れども其の改革に至りたる遠因を尋ねれば、之を時勢の變遷に歸せざる可からず。

海外の形勢事情を知る便利

顧みるに、徳川幕府は嚴に鎖國の主義を執り、海外の交通を全く杜絶したるも、唯り長崎の一港のみは、荷蘭人及び支那人等の爲めに開かれたれば、我國と外國との交通は、單に此の一港に由りて行はれたり。然るに長崎は、實に佐賀藩の封境内にありて、其國防警固は福岡藩と隔年交代に司ることに定りしを以て、佐賀藩は、海外の形勢事情を知る上に於て、他に比すれば甚だ便利を有したりき。何となれば、藩主を始め、藩士の長崎に往來する者は、時に或は外國の船將、又は領事等と交際するともあり、従つて其船艦の構造、兵制の組織より百般の事物に至るまで、親しく目撃耳聞する所ありて、自然と其事情を窺ひ知るを得たればなり。

蘭學寮を設く

既に外國の事情を窺ひ知ると同時に、人々の頭腦に起りたる思想は、西洋諸國は兵備、戰法、器械、化學等の點に於て、大に我より優る所ありと信じたる事、是れなり。藩主鍋島閑叟は、夙に此の思想を懷き、彼の長を採て我の短を補はんと志し、他藩に率先して蘭學寮を設け、有才の士をして蘭學を講究せしむる便を與へたりき。是に因りて只さへ、學制の束縛に不平を懷きたる人々が、蘭學を修め、歐米の地理、形勢、及び學藝の一斑を窺ひたれば、愈々嚴酷なる教則の下に、

窮屈なる朱子派の學問を修むるを不可とし、學制に反抗するの意念を増長せり。

新思想の注入發達

佐賀藩は斯の如き事情より封建鎖國の時代に於て、已に泰西の新思想を潛養し來れり。而して此の新思想は、彼米使ベルリの渡來に因りて急に其發達を爲し、其極は竟に藩學の軋轢を來たし、容易ならざる事件を惹起すに至れり。此の新思想の注入發達こそ、實に佐賀藩が多少の人物を出して維新の際に其名を知らるゝに至りたる原因なりしなれ。

奇傑枝吉奎助

余が一生の精神行爲を養成せし第一着歩

此の時に當り、余が先輩に一人物あり。容貌魁梧にして、才學共に秀で、夙に學派の範圍を超脱し、又國學に通じて、尊王の論、國體の説等、皆其の要を發見せり。然れども藩の俗儒俗吏と相容れず、自ら家に居て樂めり。其名を枝吉奎助と云ふ、實に副島伯の舍兄なり。余は十六七歳の頃まで餘念なく、藩學の教育を受け居たりしに、彼米艦、入港してより、天下の人心に非常の激動を與へ、爲めに種々の紛擾を醸して、形勢の次第に變遷するを見て、始めて頑固窮屈なる藩學よりは、寧ろ泰西の學を修むるの必要を感じたり。但し、當時までは、猶蘭學を目するに夷狄の學を以てし、之を擯斥排除するの氣風甚だ盛なりき。然れども、余は斷然之を修むるに決し、同時に、枝吉氏に就て國典を修め、大寶令、古事記等の解説を習ひ初めたり。是れ乃ち余が一生の精神行爲を養成せし第一着歩なりとす。

想ふに、時勢の變遷に際して進歩と保守との兩思想の衝突するは、免かる可からざるの數なり。

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



佐賀藩に於ても此の形勢變遷に際して忽ち其衝突を惹起し、而も其衝突は、弘道館の學生間に於て最も激烈を極めたり。

水戸派の學說輸入せらる

余は熱心に新學派を主張せるもの、一人にして、彼江藤新平の如き大木喬任の如きは、皆余と其說を同うする者なりき。而して此際、更に水戸派の學說を輸入せられたり。水戸派の學說とは、勤王の大義を明かにするを以て其主旨と爲すものにして、彼會澤正志が新論の如きは佐賀藩の一部の人士が最も貴重する所と爲りたり。事情斯くなりては、如何ぞ新舊兩派の學說互に軋轢せざるを得んや。果して、兩派の學生及び教官の間に於て激烈なる抗爭を醸すに至れり。

新舊兩學派の抗爭

藩主閑叟は、此の情勢を視て兩派の斯くの如く軋轢するは、畢竟、蘭學寮と本校即ち弘道館と其所在地を異にし、學生互に其思想意見を交換融和する能はずして交情の親密ならぬに因れりとなし、蘭學寮を弘道館内に移し、而して其學官には多く左右の近臣を任じ、専ら其軋轢を融和せんことを圖りたり。余が年少の後進生を以て、蘭學寮の教官に任せられたるは此時に在り。然るに、其結果は希望と背馳し、新舊兩學派の抗爭軋轢は、却て益激烈なるに至れり。

學生を長崎に派遣す

是より以來は、一般世間の形勢日一日に轉變し、閑叟の議論益喧囂に赴き、海内騒然として衆庶其塔に安んせざるの形勢を現はせり。然るに閑叟は、夙に彼の長を採て我の短を補ふの必要を覺りたるを以て、蘭學を修むる者をば暗に獎勵して種々の特待を與へたれども、因襲の久しき、一藩の人士、容易に其の頑固なる迷夢を打破する能はず。多くは無用の抗爭を事として深く天下の趨勢を慮かるものは少れなりき。但だ、時勢の進運は駭々として其歩を息めず、泰西の新知識を輸入するの必要は、日に益々其多きを加ふ。是に於て終に一は以て新舊兩學派の軋轢を緩和し、一は以て新知識輸入の便利を増益せんが爲めに、蘭學寮中より一部の學生を長崎に派遣し、外人を備うて親しく泰西の文物制度を研究せしむることとなりぬ。

外人に對する感情

此時に當り、我國民の外人に對する感情は、舊に依りて異なるなし。以爲らく「外人は皆夷狄のみ、殆んど獸類に近きものなり、元より神州男兒の共に齒す可きものにあらず。而して彼の我より強き所以は、只だ兵制の整備せると、器械の巧妙なるとに因れるのみ。されば、斥攘の實功を擧げんには、先づ彼の長所を取り、理化學を修め大砲を鑄造し、堅艦を製作するを以て急務となすのみ」といへり。是を以て、佐賀藩に於ても、其圖書館には専ら是等の學術に必要な書籍を備へて、之を研究せしめたりき。

然るに、親しく外人に親炙し、地理、制度、歴史及び其他の事物に關する種々の書籍を輸入し、是を讀むに及んで、始めて彼國にも亦君臣あり、政府あり、其制度、法律、秩然として備はり、其宗教、文物まで亦取るに足るものあるを覺れり。是に於て舊來の想像は全く破れ、外人の長所は單に器械兵制のみにあらざるを知れり。夫れのみならず、其比幕府より米國に派遣したる使節に



英學を講究するの必要

従つて、外國に渡航せし人々の歸朝するに及んで、蘭學よりは寧ろ英學を講究するの必要にして、且利益あるを覺りたれば、俄かに其講習に従事するに至れり。使節に従つて渡航したる人々の中には、余の友人もこれありし。

少年時代に於て意を致したる學術

當時、余は専ら泰西實用の學藝を研究せしが、中に就きて最も意を致したるは、大砲術、築城學等の如き總て軍事に關する者に在りし。有體に云へば、余は今日まで特に専門の學業を修めたることなく、只種々雜駁なる多少の智識を得たるのみにて、一も取るに足るものなし。然れども大砲、築城等の事に至りては、稍々知る所なきにあらず。是余が少年時代に於て最も意を致したる所なれば也。特に大砲てふ思想は、最も強く余の腦漿に印影せり。蓋し、余の嚴君は長崎砲臺の指令長官たりしを以て、余は幼少の頃よりして砲術に關する談話を聞きたればなり。藩主閑叟は曾て余に諭すに航海術を學ぶべしとのことを以てしたれども、余は當時、航海術をば如何にも卑賤なる船乘業の如く思ひたるを以て、「父の後を繼ぎて砲術を修業し、長崎砲臺の指令長官たらん志し」なる旨を陳べて辭謝したることありき。

初め、蘭學寮の學生を長崎に派遣し、外人を備うて親しく泰西の文物制度を研究せしめんと議、余等同志の間に起るや、藩の執權者は多く之を危ぶみて、斯くの如き人物を長崎に出し、是に自由に運動する便を得せしむるは、猶虎を野に放つが如し、如何なる事變を惹起さんも測る可から

致遠館の設立

すこと容易に之を許容すべくも見えざりし。幸に藩主閑叟の英明なる獨以爲らく「如何に少壯客氣の書生なりとも、郷の不名譽を來たすが如き言動は斷じて之を爲さざる可し」と。遂に余等三十餘人を選抜して長崎に遊ばしめ、致遠館てふ一學舎を設立し、英人を備うて専ら英學を講習せしむること、爲せり。爾後、數年間。余等が内外に向つて種々の運動を爲すの根據と爲せし所は、實に此の學舎にてありしなり。

翻つて更に佐賀藩當時の形勢を察するに、彼窮屈なる朱子學と、奇妙なる經典とに依りて養成せられたる『葉蔭』的武士猶其權威を逞うし、因循姑息の弊風深く上下を浸漬せしかば、嘗に余等同志の士が主張する新智識新思想を採用する能はざるのみならず、却て之を排斥批難するもの滔々として皆然りき。

藩政改革の議を唱ふ

是に於て、余は大に同志の士と謀り、藩政改革の議を唱へ、俗吏の跋扈を攻撃せり。其改革の主旨は、先づ軍政を改良し、財政を整理し、人材を登用し、冗員を省き、一藩の内政を革新し、而して後に進んで外人の跋扈を制し、文武の大權を皇室に歸せしむる運動を爲さんとするにありき。而して之を爲すには必ず之に伴ふの資財を得ざる可らず。是に於て、藩の有力者に説くに富國策を以てし、漸次に閩藩の氣運を鼓舞するに従事したり。謂ゆる富國策とは、是より先き、佐賀藩に代品方と稱する貿易官の如きものあり、其職とする所は、大阪に出張して専ら藩の物産を

富國策



販賣するに在り。其由來を尋ねれば、外國人より軍器船舶其他の物品を買入るゝには、巨多の代價を支拂はざる可からざるに、當時藩の財政にては之を爲すと容易ならざりしを以て、物産を販賣したる價を以て之に充てんために設けたるものなり。余は因つてこの代品方の規模を擴張し、長崎と大阪とに商館を設け、之に投するに三四十萬圓の資本を以てし、材幹ある官吏と商人とを以て之が事務を擔當せしめ、以て通商貿易の便を開き、一方には國用の充實を圖り、他方には之によりて中原に向つて運動するの計を立てんとの企畫を爲したりき。意外にも此の企畫の一半は因循頑固なる藩吏の容るゝ所となり、商館の設立を實際に見るに至れり。然れども、余の志は固より此に止まらざる也。乃ち之を根據として着々其歩を進め、各藩の志士と氣脈を通じ、大に爲す所あらんと欲したるなり。

藩の軍政改革  
余は又た更に意を軍政の改革に注ぎたり。何となれば其比の時勢は、不幸にして内亂の起るか、或は外國と干戈を交ふるに至るか、到底一戦争の避く可からざるを知りたればなり。然るに、佐賀藩の軍制は、古昔、大阪陣若くは天草戦争に用ゐたる軍法兵制を其まゝに踏襲したるものにして、畢竟、今日の實用に適すべくもあらず。左れば速かに之を改革し、泰西の制度を取捨し、精選し、且紀律ある兵制を組織し、以て一旦の緩急に備へざる可らず。其上封建時代の通弊として數百年前より侍大將の家に生れたるものは、侍大將となり、足輕の家に生れたるものは、足輕と

なり、如何に高才逸足の士ありとも、容易に斑を越えて進むとを得ず。只、門閥の高下をのみ論じて人物の賢愚を察せざりき。此の如くにして革むる所なくば、いかで能く兵氣を振作することを得べきと。因て、余は同志と共に自ら火術を習ひ、陣法を講じ、率先して之が改革を爲さんと企てたれども、惜しむらくは、頑固因循なる俗吏の排斥する所となりて、其説は用ゐられざりしが、後に關東奥羽の戦争起るに及んで、當局者初めて其非を知り、遽に之が改革を爲したりき。兎にも角にも、内外の形勢は日に月に益々非なるを察したるにより、余等の同志は、日夜經營、以て其間に一大運動を試みんとしたれども、如何せん、身は眇然たる一介の書生に過ぎされは、世人多くは之を冷視して、幾多の奮慨、幾多の畫策も殆んど徒爲に歸し去らんとしたり。殊に、佐賀藩當時の状態は、前に述べたる如く、頑固因循の弊風深く上下を浸漬せしを以て、余等の運動は之が爲めに障礙を與へられたることは枚擧に遑あらず。

此時に當り、藩の有力者にして職を側年寄に奉じたる原田小四郎といふものあり。其資性頑硬にして論す可らずと雖も、亦巍然として動かす可からざる氣節を有したり。此人、上下の間に立ちて種々の計策を以て余等同志の運動を妨害せしこと實に尠しとせず。故に當時、余等は之を目前に奸臣、俗物、小人を以てし相呼號して熱心に之を攻撃したりき。

困難に遭  
うて意氣  
益々揚る

『自喜豪氣猶未摧、毎經一難一倍來』。年少氣鋭なる余等の當時は實に斯くの如くなりしなり。



中野數馬  
伊藤外記  
藩政多少  
の活氣を  
帯ぶ

障害、困難、踵ね至れば意氣は益々激揚し、奮然身を挺して心力を國事に致さんことを計りたり。然れども國事を改革せんには、先づ一藩の政畧を動かして氣運を變じ、其の持説を以て有力なる有志を感化し、藩の代表者と爲り、藩の勢力を後援として運動すれば其功を成し易し。又頑固の俗吏を動かすには、説くに天下の大計を以てするより、寧ろ一藩の富國策を以てするの效能あるを見る。是に於て、余は泰西の新學術より得たる種々の經濟談を以て其啓發誘導を試みたりしに、幸に多少藩吏の容るゝ所と爲り、其結果は前に言へる、大阪及び長崎に商館を設立するに至りたり。是時、藩の參政に中野數馬、伊東外記といふものあり。伊東は稍進歩主義を執り、謂ゆる西洋最負の人なりしも、却つて之が爲めに其の勢力を失墜せり。中野は之に反して強情窮屈にして容易に移す可からざる『葉蔭』主義の人にて痛く新知識新思想を排斥したり。然れども余は循々として諭すに事の條理を以てし、説くに時の趨勢を以てし、漸く之を動かして歩一步と其の誘導を務めしかば、遂に中野も少しは其迷夢を覺し、伊藤も亦た之と同時に次第に其勢力を恢復し、藩政も茲に始めて多少の活氣を帯ぶるに至りたり。致遠館を長崎に設立したるが如きは、實に余が此の運動方略の一端にてありき。

副島と携  
へて附藩  
す

みれば、佐幕の論、開港の説、勤王の議、攘夷の談等囂々として四方に起り、海内宛がら鼎の沸くが如く、紛々として亂麻の如きを見る。是に於て余は窃かに以爲らく「内外の形勢既に斯の如し、苟も今日にして早く之が計を爲さずんば、神州の存亡は測り知る可からず。是志士仁人の身を殺して國に報ずる秋なり。然るに徒に因循姑息なる俗吏を相手にして、碌々と歲月を送るは言甲斐なきの限りなり。所詮發難に際しては身を挺して京師に入り、時の將軍一橋慶喜に見えて説くに大政返上の大策を以てせんのみ。此策さへ一たび行はるれば、佐賀藩の頑固も、勞せずして自ら動くに至らん」と。直ちに副島と謀り、斷然藩禁を犯し、萬死を賭して脱藩するに決し、相携へて孤劍飄然として郷土を出で、辛くして、大阪に入りたり。

余等の内  
外政策



忽ち有司に捕はる

藩を代表して運動する能はざりしは千載の憾事

余の學問教育

一身の智略に過ぎざりしを以て、之を遂げんこと固より容易にあらず。京阪の間を奔走する二三月まだ慶喜に見えて胸臆を披くに至らざるに早くも有司の捕ふる所と爲り、空しく郷土に追ひ返され、雄圖こゝに蹉跌せり。後聞けば、余の獻策に因りて先きに大阪に設立せられたる商館の主任者某の如きも亦此際に余の事業を妨害したるもの、一人なりしとぞ。余の脱藩に先だつ數年に、大木喬任は長藩の木戸孝允等と謀りて共に爲す所あらんとして成らず。江藤新平も憤慨の餘りに、亦脱走して忽ち捕はれ、何れも其家に禁錮せられたり。嗚呼、既往は追ふ可からず、悔恨幾番するも亦詮なしと雖も、余等をして當初の意見の如く、佐賀藩を代表して天下に運動すること、猶彼の後藤が土佐に於けるが如く、西郷が薩摩に於けるが如くなるを得ざらしめしは實に千載の憾事なり。今にして之を思ふも、猶無限の感慨の懷に往來するを禁ずる能はず。

翻つて之を思ふに、余がかゝる政策意見を懷抱するに至りたる原因は、實に當時の學問教育に在り。初め余は弘道館に學ぶや、夙に窮屈なる學制に反對して改革論の主動者と爲りし程なれば、朱子派の順序を踐みて深く四書五經を研究する事を爲さず、却て諸子百家の書を涉獵し、好んで經世濟民の方法を攻究したる中にも其最も愛讀したるは管子及び白石、徂徠の著書にてありき。斯く一方には和漢の雜書を研究すると同時に、他の一方に於ては、蘭書に就きて地理、兵制、物

立憲的思想を起せし濫觴

理等泰西實用の學を修めたるが、よし是等は簡易なる書冊なりしにもせよ、其の當時に在て、啓發の功は實に少なからず。之に因て始めて歐米諸國の貧富、強弱、土地の肥瘠、物産の豊乏、及び制度文物等の一斑を窺ふことを得たり。而して當時最も深く余の腦漿を刺激せしは、荷蘭の建國法なりき。余は非常の苦心を以て漸く之を讀みしに、其の記する所、着々經國の要領を得たるを以て、余は夷狄の國にも亦かゝる良制度ある乎と感嘆措く能はざりし。嗚呼、是れこそ實に余が立憲的思想を起したる濫觴にして、是まで多年立憲政體の設立に苦心焦慮したるは、全く此の思想の發達したる結果なりとす。加之ならず、余は北米合衆國が英に叛いて獨立したる往時の宣言文を讀んで、始めて泰西人の謂ゆる自由權利てふもの、眞意を解し、彼の文物制度、頗る我れに優過する所あるを覺り、竊かに之を移植せんとの志望を懷きたり。之を要するに、余の自由思想、立憲主義は、蘭學寮在學の日に於て其萌芽既に發生したりしなり。斯くの如く、余は和漢の智識と泰西の思想とを調和し、且つ之を實地に施さんとせしを以て、其論策は幸に空漠に流れず、而して財政の整理、國憲の確立と云へるが如き、國民の一日も等閑に附し去るを得ざる實地の政策主義を胸裡に畫定したるは、自ら以て一朝一夕の故にあらずと信ず。



第二章 少壯時代の經歷及佐賀藩の事情 (下)

家族及び  
金錢上の  
關係

母の資質

余をして更に少年立志の當時を回想せしめよ。余は其當時、家族の關係并に金錢上に於ては、比較的自由的な身體と幸福なる境遇とを有したり。但し一大不幸と謂ふべきは、幼少の時に於て父を喪ひしこと是なり。然る故を以て、余は母の柔婉なる手腕の下に處理せられたり。余に二人の姉あれど、共に齡嫁期に達し、縁を得て他に嫁したるを以て今はたゞ一人の弟と共に慈愛深き母の養育の下に成長することゝ爲りぬ。母は自ら家政を處斷するにも似ず、余等に對しては敢て干渉を爲すを好まざりし。かゝる氣質なるを以て、余が自ら適當と信じ、必要と認め、其理由を具して請求する所あれば、苟くも贅費濫消の類にあらざる以上は、常に之を容れて拒むことなかりき。當時、同志の集會を爲すに當ては、概ね其同志中の便宜の家を假りて之に集ることゝ爲せしに、余等の間に在りては、いつも余が家を以て其集會所と定めたり。青年輩の事なれば、酒も多からざる可からず、肴も豊かならざる可からず。酒酣に興熟すれば、或は放歌高吟し、或は紛論激争し、時には一日を徹し、時に鷄鳴に至りて纔かに散會することも少なからざりしかど、母は毫も之を厭ふの色なく、却つて怡々然として其間に處し、好んで周旋配意の勞を執りたりし。斯くの如くなりしを以て、余にして朋友間の困難災厄を救はんと欲し、之を母に計るれば、母は常

同志は大  
概先輩な  
り

年長者を  
交友とす

に及ぶべきだけの力を余に假し、爲めに余をして中心の愉快を感せしめ、且能く朋友間に幾分の地歩を占むることを得せしめたり。左れば余の家は素と豪富といふ程にはあらざりしも、此點に於て余は多少幸福の地に立ちたりしなり。當時、余が同志として交りし朋友は、余の爲めには多くは先輩なりき。年齢を以て之を言へば、余よりは五六歳若くは十歳以上の年長者も少なからざりし。余が斯く多くの年長者と交際せし所以は、他に原因なきにあらずと雖も、一は余が好んで之を求めたるに因れり。余は外に於ては師よりして、内に於ては母よりして、朋友を選ぶの大切なることを教へられ、而して余自らも將來世に立ちて事を爲さんとすれば、必ず朋友の力に倚らざる可からざることを信じたるを以て、其之を選ぶに、固より強ひて其範圍を限りたるにあらざれども、自然に經驗に富み、學識に豊かなる年長者を交友とすることの傾きに趨りしなり。されど余は今日よりして此事を是認す、何となれば、比較的爲し難き方をば選びたればなり。即ち年長者と交際を遂げんには、多少の障壁を越え、謂ゆる氣兼と遠慮とを拂うて然る後に其傍に達するを得。而して其實際の上に於ては、所謂大人氣を養ひ且つ謹慎を旨とすべきものなればなり。是世の父母等が共に其兒童に向つて希望する所なるに、余の自ら進みて之を爲したるは、疑ひなく母の満足を買ひたるべしと思ふなり。同年以下の朋友に至りては、假令、左程に意を注がずとも得難しとせず。されば又幸に余は此種

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



良好の友  
を多く有す

余が世に  
立ち事な  
爲すの一  
階梯

義祭同盟

の朋友にも乏しからざりき。學術、武藝に關しては同窓同庭の友あり、且遊戯の友あり、談論の友ありて、余は其當時に於て、實に良好の友を多く有したるもの、一人にてありしなり。若し人あり、余に向つて「汝は如何なる場合に志を立てしや」と問ふとも、余は之に對して「斯る機會に際會して確然志を決し、爾後之を守り改々として變せざりし」といふが如き畫一の返答を與ふる能はず。否、其何時、如何なる場合のありしやを明示する能はず。然りと雖も、左の一事の如きは、余が世に立ち事を爲すの一階梯と爲りしものなりと思ふ。

聞く、佐賀藩の先君は尊王忠誠の志厚く、彼忠臣楠公の像を作り、年々之を祭祀して以て士氣の涵養に資する所ありしと。爾後星霜移り、藩情の漸く變ずるに従うて、遂に其古典を忽かせにし、今は祭祀を廢して、其像を或る寺の一隅に放置し、知るものさへなきに至りしを。或る二三の志士相謀り、其寺に就てこれを祭ることを始めたり。然るに閑叟の庶兄鍋島安房なるもの、閑叟の家を繼ぎし後に、出で、家老の家を相續し、執政となりてありしが、此人深く楠公の像に留心する所ありて、其祭りに加入し、遂に之を寺の一隅より取出し、藩の鎮守寺八幡社内の末社を取り拂ひ、之を楠公社と爲して此に其像を安置せり。此舉に與りたる同志を名づけて義祭同盟と稱したり。

彼副島の兄、枝吉李助の如きは此事に關して最初より力を盡し、實際には此同盟の牛耳を執りたりし。

同盟に加入す

同盟加入  
は立志の  
端緒

楠公の像を遷して祭る程の事は、今日思想に於ては誠に易々たる業なるのみ、何ぞ同盟を企て、其運動を爲すを要せん。されど、當時に於ては則ち然らず。苟くも事物の變更存廢を爲さんには、必らず全藩の異議を排するの必要あり、従つて、強固なる團體と有力なる運動家とを要せしを以て、乃ち彼の同盟を組織するに至りしなり。

其時、余は年甫めて十六七にて、中學に在て此事あるを聴き、喜んで枝吉の下に就きたり。枝吉は余が平素より尊信したる人なれば、直接に其薫陶を受けんことを望みしに、幸にして彼れと交を訂せしより、余は義祭同盟の人々と往復するの便を得て、其結果は多くの年長者を交友と爲すを得るに至れり。後に至りて此同盟者の中には、政治界に立ちて其頭角を見はしたるもの少なからず。されば、余の之に加盟したるは即ち余が世に出て志を立つるの端緒と謂うて可なり。

然れども、直接の結果より謂へば、此同盟は幸運なる者にあらざりしなり。同盟の起りし後、間もなく米使ペルリの來るに逢うて、外交問題は日本全國に一大電感を與へ、國情紛々として其定まる所を知らざる勢なりしを以て、此同盟の士は奮うて其間に投じ、大に斡旋の力を盡すべき時機に到着したるに拘はらず、却つて氣息奄々として今にも消えんとする狀を呈したり。是れ一は藩政の方針一變したるに由り、一は同盟者に有爲の士少なからざりしと雖も、或る部分の人は全

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



く之に雷同したるものなるに由るなり。

元來藩主閑叟は、活潑有爲の人にして其繼職の始に於ては謂ゆる急激主義を執り、當時に在ては頗る目覺ましき改革を爲したり。即ち舊來の吏員を廢黜して、書生を拔擢し其任に當らしめ、又之を左右に親近せしめて其議を取り、其意見に聽從して藩政を處理したるが如きは、大に人の耳目を驚かしたり。鍋島安房これを佐け、藩内に於ける書生の面目遽に改まり、諸事皆活氣を帶ぶるに至れり。彼義祭同盟の士の起りしも、實に此際に養成せられしものにして、一時書生の力は總ての事物を動かすを得て、勢威頗ぶる隆々たるべしと信せしに、免がれ難きは盛衰榮枯の理勢にて、自然の反動は忽ち茲に起り來りて、遂に急激主義をして一頓挫を爲さしめたり。

書生は、概して氣鋭にして策粗に、志大にして術少く、往々に正當の理に據りて大膽なる舉動を爲すと雖も、其之を持続し之を完成するの道は措て問はざるを通過とす。故に是等の書生は種々の失策を爲したり。多數の中には或は醜體を露はすに至りし者もなきに非ず。之を統るに、急激手段の爲めに導かれたる弊害は、漸く世上に暴白せられ、藩内の守舊家をして益々守舊の安全なるを信せしむるに至れり。さるが上に、最早三十年の經過に閑叟も年老けたり、書生等も亦多少の失敗の爲めに昔日の勇氣を失ひたり。斯くて時と事とを同うして等進したる、總ての藩政に任じ來りし人々は、今は多くは漸進説に趨りて、何事も急進的の事業を避くるの傾向を生じたり。

余は深く閑叟の人と爲りを喜び、殊に其温厚の雅量は君子の風あるを欣羨せり。若し之に加るに剛毅の精神に富ましむならば、彼は疑もなく維新の功臣中に於て第一流の地位を占むる人物なるべしと信ず。彼其敏眼は能く時運の向ふ所を察して改革の種子を播きたりと雖も、惜むらくは半途より之れを荒蕪に委して良好なる結果を收むる能はざりしが爲めに、維新の中原に逐鹿奔走するに際して、一着を薩長二藩に輸せざるを得ざるに至らしめたり。元來改革最初の結果は何れの場合に於ても、必ず多少異様の障害を現出するものなり、是は他の積弊を除くに當りて、必定免れざる數なるに、若し夫れ此の障害に驚き、改革事業を中止するあらば、其目的を達するの期は到底なかるべし。閑叟が急激なる手段は、疑もなく幾多の障害を生じたり一時保守的極端の弊に代ふるに、急進的極端の弊を以てしたり。其間に、新舊兩學派の衝突は起りしならん、従つて藩政に紊亂を加へしものあらん。然れども、其は是れ一時の現象にして、尙ほ之を繼續するに着々改革的の精神を鼓して、以て事を處理せば其の現象は遠からずして形跡を斂むるに至るべきなり。但し、當時、此の如き事は他に模範の比例すべきことなかりしを以て、かゝる道理を究め得るを得ず、遂に其最初の方針を轉ずるに至りしは無理ならぬ事なれども、抑も彼が一生の事業のために痛惜すべきの事と言はざるを得ず。

又我義祭同盟の上に就て考ふるに、吏員の多分はこの書生團體より拔擢せられし者なるを以て、

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



始めの程は、能く活潑奮進の氣力を保ち、一方に藩政を改革し一方に士氣を鼓舞し、大義名分の説を講じ、楠公の所爲に倣うて、皇室に忠義を致さんとを説きたれど、吏員の地位に在るの久しきに從つて、謂ゆる俗務に俗化せらるゝもの多く、漸々に職務外の事に集會するを怠るに至り、遂に義祭同盟は有力の門閥家なく、吏員なく、唯純然たる書生の集合體と爲り終れり。

事態此の如くなり行きたれば、反動の勢力と共に非難攻撃の聲は四方に起り、甚しきは此同盟を目して封建の制度に抵觸し、藩制に不利を醸すべきものなりと言ふものあるに至れり。是を以て、此同盟は方に其力を伸ばすべき時機に及んで其力を伸ばす能はず、空しく佐賀藩史上に其名を止むるのみにして熄みたりき。

余は想ふ、彼のペルリが渡來したる後に於て、若し此同盟が以前の體面を保持し居たらんには、維新改革の率先者は佐賀藩なりしやも料り知るべからずと。

斯くて、一般の書生は世の風潮を趁うて續々同盟を脱せるにも拘はらず、余は我信認したる所の先輩と共に此中に留れり。此時よりして余は多く同年輩の朋友を失ひ、重に年長者の間に奔走するに至れり。

又其比、同窓中に學制改革の議を起す者あり、朱子學派に對して反對の運動を爲さんとを計れり。余は年漸く十七歳、固より一定の思慮見識を有せるにあらざりしも、頻りに反對派の運動を助け

義祭同盟  
の末路

余は同盟  
内に留る

て其氣焰を煽り謂ゆる南北兩派の争ひなるものを生じ(南北とは内生寮は南廨北廨相對し、廊を隔て兩校舍をなしたるより互に相競争を生じたるなり)漸次激烈に涉り、其結果にて或は相毆打するに至りしことあるに及び、藩に於て夫れく處分することゝ爲り、余は反對派首謀者の一人として遂に學校を放逐せられたり。

此一時の不幸こそ、余が爲めに將來の幸福とは爲れり。余の苟くも此學校に在る間は、假令學制に反對して朱子學の薰陶を受けざらんとするも、到底支那流の教育を脱するを得ず。一時の異議を唱ふるも必ず水泡に歸して、竟に大勢の壓する所となり、碌々と吳下の舊阿蒙と伍を同うし、百事革新の社會に空しく邯鄲の夢を樂しむに終りしならん。幸にして然らざるを得たるは、全く余が此時の放逐の禍に罹りしに由るなり。人間萬事塞翁が馬と雖も、蓋し亦余が一方に獨立して其見る所を守りて動かざりしの結果と言うて可なるべし。余は放逐せらるゝに及びて愈々心を奮へり、愈々意を決したり、因て愈々反對の氣焰を煽揚したり。是に因て余は茲に洋學を學ぶの便を得、又國學を學ぶことを勉むるを得て、實地に漢學排斥の運動を爲したり。

當時、余が同志と頼みたる先輩には、固より洋學を修めたるものなし。然れども、其中には深く西洋の事情を知るの必要を感じ、而して之れを知るには必ず洋學の修めざるべからざることを瞭悉し、余の此舉を賛するものも少なからざりし。又他の一部の人々は無論甚だ反對したれども、余が洋學

漢學排斥  
の運動



余は逆流に立てり

を修むると同時に國學を學ぶを見て、少しは其意を安んせしもの、如くなりし。何れにもせよ、余は一般の風潮に對して逆流の地に立ちしなり。友人等に多く風潮に従ひ、是まで多少動搖し居りたる心を沈めて、専心に校則を重んずるに至り、無事に課業の科目を卒りて相當の地位を獲んとを望みたり。因て余と共に一時學校を退きたるものも、或は父兄の訓誡に順ひ、或は親戚の忠告を受け、因て自己の不利と思ひしや、自ら改悛したりと稱して學校に復籍し、尋常一様の道を進むこととはなれり。

此際に於ける家母

余も同様の訓誡忠告を受けざりしにはあらず。家に父なきも尊屬の親あり、叔父、叔母、姉等よりして數々鄭重なる訓誡を蒙り、遂には是等の人々、母に向つて強迫らしきにも及びたりしも、母は余が既に意を決せしの有様を見て、敢て余に向つて之れを強ふるとは爲さざりし。是余が爲には大なる幸福にてありしなり。此時、若し母にして非常の譴責を加へたらんには、余は爲めに家庭の快樂を破るに至りしやも知るべからず。

之を要するに、余は其時一定の見識を有して此事を舉行したるなりとは言はず。又洋學を爲すの果して漢學に勝るものあるを豫知したるなりとも言はず。先輩の啓誘に出でしにもあらず、又他の目的を有せしにもあらず。乃ち多少の考慮なきにしもあざりしと雖も、寧ろ余の感情が余の境遇に従つて此事を爲さしめたりと言ふを允當とすべし。然るに此事は、假令、余をして一時、

藩の信用を失ひ、親戚の感情を害し、友人の多數を失はしめたるに相違なきも、余の爲めには一生の好時機として記憶に存すべきものにして、其將來に利益を與へたることは實に、少小にあらざるなり。

藩内の非難を聚め難友を失ひ舊友を得る

さりながら、余が當時の舉動は、正しく藩内の非難を集めしなり。偏頗の様なれども師弟の關係と長幼の順序とは尤も神聖なるが如きの感情を人心に與へたる社會に於て、子弟の身を以て、少年の身を以て、敢て學制を非議し、教師を非難するは容易ならざるの舉動なりしなり。其上、他の子弟等は一旦不良の舉動を爲し、も、父母親戚の訓誡に遵うて漸く學校に復籍し、師命に従うて斯道を學ぶといふに至りしに、余のみ獨り凡ての忠告を謝絶し、益々方向を彼等の甚だ好まざる點に轉じて、洋學を修るに至りたれば、彼等は余を糞土朽木何ともなすべからざるものなりと謂ひしやも知るべからず。是に因て、余は前に述べたる如く、幾多の朋友を失ひ、余と共に提携し、又余に向つて望を屬するものは殆どなきが如き境界に至れり。誠に悲しむべしと雖も、亦萬萬已むを得ざるのことにありし也。然れども余は之れが爲めに他の一方に於て新たに朋友を得たり。其新たに得たるものは失ひしものに比較すれば少數なりしも、少數者の力は彼多數者の力に勝る所のものなりし。蓋し、是等の人々は、何れも當時の時勢に對して一種の意見を懷きたるものにして、或は藩政に反對し、或は學制に反對し、風潮の爲に容れられずして、寧ろ失意の地



位に立てるものなり。思ふに、人の志操は失意の時に眞にして、人の情好は失意のときに密なるものなり。況んや彼等は其見識の是非に拘はらず、一個獨立の地歩を占むるもの、多數の藩吏に對して其の是非を較せんとの意氣を有するもの、所謂稜々たる氣骨を有する男子を包含するものなりければ、余は彼多數者を失うて此少數者を得たれば、必ずしも損失を爲したるに非らず。否、却つて利益を得たるなり。但し余は兩つながら之れを全うするを得ざりしを遺憾とするのみ。

告朔の餼

義祭同盟は依然として存在せしには相違なきも、只だ告朔の餼羊と爲りて其形を存するに過ぎざりし。楠公の大義を表彰し、互に之に倣うて 皇室の爲めに、國家の爲めに盡さんとするの精神は、僅に一部の人士間に止りて、已に此義祭同盟なる全體の上には屬せざりしなり。其同盟者は、定まりたる集會日には、猶何れも一所に集れり。書生は云ふ迄もなく、吏員も來り、門閥家も集れりと雖も、最早是等の人々は同臭味の團體を以て稱すべからず。其心は二様に分裂して、將さに軋轢をも生せんとするの傾向を呈せり。是を以て、其集會は只一片の儀式に止りて何の効用をも爲さざりし。既に、自他の間に暗に障壁を設けたり、其胸襟を披きて國事を談するが如きは到底其中に爲し得べきに非らず。是に於て、同盟中の一派は別に集會を爲すの必要を感じたれば、佐賀に於ける幽邃の一寺院を以て其集會所に充て、以て同志等が國家の大勢に關し、藩政并に教育の方針等に關し、自由に其意見を吐露するの所と爲せり。蓋余の尊信する先輩の多くは、此派の

義祭同盟  
中一派の  
別集會

人なりし故に、余も亦た之れに従つて終始其集會に列するを怠らざりき。

かゝる間に、天下の形勢は變一變し益々多事に赴き、今は人々自ら動かざるを得ざるに至るに至り。佐賀藩に於ては、封建的極端の鎖國主義を執り、容易に藩士の外地旅行を許さざりしも、此に至りて是非なく之を派出せざるを得ざること、なれり。其は他の故にあらず、米國の使節ペルリが、浦賀よりして神奈川に進み、其談判の益々急なるがために、江戸城は上下を擧つて驚愕狼狽し、さながら鼎の沸くが如く、殆ど其底止する所を知らざるの情勢と爲れり。而して其急報の相踵きて藩に傳へられしを以て、藩に於ても俄に藩士を出して、先づ江戸なる藩邸を守護させ、次に諸藩の形勢を視察せしめざる可からざる必要に到着したるなり。

藩士の派  
出

左はなくとも、是まで幕府及び藩々の事情を視察せしめんがため、武術修行若しくは遊學の名の下に特に藩士を撰みて派出せしとありしに、斯る必要に際會したるにより、更に多數の藩士を此點に向つて派出するに至りたり。

晉に是のみならず、當時の蝦夷、即ち北海道の問題は當時に於て已に藩士の注意する所と爲りて、北門の鎖鑰は寸時も忽にすべからず、殊に外國人が頻に覬覦を逞うせんとする現形ある今日、我先づ其地の事情を詳悉して之に備ふる所なかる可からずとの事より、其探檢隊を派出するに決し、余の同志、島義勇、犬塚與七等も其選に當りて探檢の途に上れり。犬塚は非常の才學者にして、

蝦夷探檢  
隊を派出  
す

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



嘗て水戸に遊び、藤田東湖と相識り、佐久間象山とも淺からざる交誼ある人なるが、奮うて探檢に従事するに至れり。

外地旅行  
者之氣脈  
を通ず

島、犬塚等は姑く之を措き、其他派出せられし幾多の人々は、必ずしも一藩の大勢に着目し、十分の見識を備へて事物を視察するの明あるものに非ず、寧ろ藩吏の意を迎へて唯々諾々を旨とするものに非れば、可もなく、不可もなく、順從朴直を以て立つものなり。余等の同志は其選に與るもの甚だ少なりしが、次第に多人數を要するに及んで、其勢ひ余等の同志をも用ゐざるを得ざるに至り、是に因て他郷に出るの便を得たるものも亦之れなきにあらざりし。夫れ此の如くなるを以て、余は是等の人と氣脈を通じ、因て多少天下の趨勢各藩の事情を知るを得たり。

改革の端

殊に、熊本と鹿兒島とは我藩士の數々往復せし處也。熊本と佐賀とは從來親密の關係を有したる藩なれど、鹿兒島は其習慣として容易に他藩の人を容れざるの風なりしに、當時閑叟と齊彬とは尤も意氣相投じて提携したる事實は餘多の藩士をして藩用を帯びて彼地に往來せしめ、從つて自他の人士間に知遇を求むるを得せしめ、又藩内の模様をも伺ひ知るを得せしめたり。此往復交通に由て得たる利益は、實に彼輩が數十年間藩内に坐して夢想したる所に勝れり。此事や、佐賀藩の改革、否、寧ろ維新改革の端緒とも稱すべきものならん。彼歐洲にて文明の原因を論ずるもの或は宗教の力なりと言ひ、或は科學進歩の結果なりと言ふの間に、各國の交通、競

往復交通  
の利益

争、軋轢よりして實地に探長補短の効を奏するを得て始めて此に至れりとの説が頗る勢力を得たるが如く、直接に人心を指揮し、刺衝し、考慮せしめ、企畫せしむること、恐らくは交通の利益に勝るものなかるべし。是まで彼輩が如何に狭小偏屈の範圍内に其身と思想とを拘束せられしかを顧れば、今始めて遠く江戸に行き、京攝に旅するを得、近く鹿兒島に使し、熊本に遊ぶも、宛も井中の蛙が江湖の廣きに出でたるに異ならず。當時に在て、隣藩も猶雲山萬里を隔てたる外國と一般なりし異様の制度、法律、風俗、習慣を目睹して、如何に彼等の腦漿を刺衝激動せしやを推察するに餘りあるなり。想ふに其これに依て得たる所の智識は、現今の諸外國を通じて旅行したる者に比するよりも尙ほ勝りしなるべし。彼等は是まで智識の價値を一向に知らざりしなり。多くは佐賀藩の人なることを知て日本國の人なることを知らざりし。況んや其世界の人たるべきの理に於ては影だにもなかりしなり。然るに今や機を得て、自ら江戸に到り、且諸藩の形勢を耳目したるに及で、事物に大に異同あるを知りたり。是こそ智識と判定とを生せしむる所の基礎なれば、即ち彼輩は多少の智識と判定なるものを得て、而して其實地に經歷し來りたる事實をば口より口に傳へたり。天下の形勢に關する有名なる識者の見解、各藩を代表する個々の議論、或は學制、或は兵制に關して、各藩が實施し、或は將に實施せんとする所を詳悉して之を報告することを得たり。



藩士の報  
告改革の  
偉大の利  
益を興

藤田東湖  
と佐久間  
象山との  
言

大隈伯昔日譚

是等の事實は、保守的冥頑主義を執るものに向つては半文錢の價值だになかりしと雖も、義祭同盟中の改革派に向つては、誠に偉大なる参考たりしなり。彼等は因て以て天下の大勢の早晩に必ず大に變すべきを察知し、學制、兵制、國防等の術策を講じ、又同時に外國の事情を知るの法を求めざるべからざることを解知したりき。

當時、藤田東湖と佐久間象山とは、殆んど天下一般に承認せられたる有識家なりし。二人の所説は固より同一ならざりしと雖も、之れを尊信する青年書生の身に取りては、其一言一句みな闇夜の光明の如くなりし。其姿容と議論とは、聴くものをして覺えず飛躍扑舞せしむるものに足るものありし。

元來、少壯時の腦は感じ易くして又移り易し。今や時勢は斷えず彼等の心を刺衝して腦裏常に感情の激波を漲らすに際し、藤田、佐久間が喝破したる豪放にして壯快なる言は、實に渴者の美酒、飢者の膏粱として接受せられたり。且夫れ、青年は一たび自ら感動したる事は、直に之を實行して、其成果を收めんと欲するものなり。非は非として直に之を追ひ、是は是として強て之を求めんと欲するなり。まして、余が如くに學校を放逐せられて、封建の弊習、束縛、壓制を見る蛇蝎よりも甚だしく、身は逆境に住して心は不平に堪へず、片時も速に此境域を脱却せん企圖するものに向つて藤田佐久間等の言は、誠に天國の福音の如くにありしなり。

米國の派遣  
使節の隨  
行に同志

余等は外  
出の望み  
を得ざる

繼で安政の末に至り、幕府より米國へ使節を派遣するに當り、佐賀藩よりは之に五人隨行せしむることゝ爲りしに、其中の二人は余が同志中の先輩を以て充つることゝ爲りたり。僅五人に二人までを出し、は、頗る訝かる程なるも、思ふに外國に使用する事なれば已むを得ず余が同志の中に求めたるならん。

余等も固り藩外に出でんことを望む切なれど、容易に其選に當る能はざれば、窮屈なる藩内に依然として居たり、獨力にて旅行の途に上るとは甚だ難し。故を以て、苟も其望を達せんとすれば、藩吏の力を頼まざる可からず。然るに、藩吏と余等とは、諸事の上に反對の意見を懷き、余等固より彼等を喜ばざれば、彼等も亦た余等を喜ばざるなり。而して天下の形勢いよゝ變動し、尊王攘夷の論ますます、其歩を進むるに及んで、藩論と改革派の意見とは益々背戻して、氷炭相容れざるの狀を呈するに至れり。壯志蹉跎し易く、人生意の如くならざる十に八九、此時に當りて勃たる熱心を懷き、江戸若くは他郷に出で、天下の形勢を視察して、奮うて運動をなさんと志すものは、却て藩内に桎梏せられ、空しく不平の歲月を送り、而して可もなく不可もなく、出づるも好し出でざるも好し、何くにても忠義になるとならば申付られし事だけは務むべしと言ふ如き徒は容易に撰に當りて諸所に旅行し若くは滞在するを得たり、實に痛恨に堪へざる事ならずや。然るに、櫻田の變起れり。藩の政府は其報を聞いて大に震駭せり。櫻田の變は此に論するの要な

佐賀藩の  
櫻田變に  
震駭せし  
事情

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



し、藩吏の震駭は抑も何に因る所ぞとは、是れも一考を費すの價値ある問題なるべし。然れどもかゝる事に關しては、いつも秘密を尙びたる當時のことなれば、其事實を詳にするものは至つて少なし。余は之を古老に問ひ、又た之を書類に求むるも、未だ全く其要領を得る能はず。只余が知悉し得たる事實に基き、當時の形勢と事情とに照らして、之が判断を下す時は、**閑叟が水戸烈公と井伊とに對する地位は畢竟左の如きものありしならん。**

閑叟と烈公との關係

閑叟は少時に於て烈公を尊信せり。即ち深く烈公の人と爲りを喜び、其感化を受けたることも少からざりし。是を以て、閑叟の初年に於ては水戸との往復頗る頻繁となり、其側に親近したる侍員及び學者は、曾て水戸に往て藤田等の教誘を受けたる人物も多かりき。當時、水戸は天下の望を繋ぎたる藩にして、**烈公は一代の名君と稱せられ、三百諸侯の泰斗と仰がれたり。**是固より烈公自己の實力に由て然るには非らず、藤田其他二三有力の士が心力を致して輔翼したる結果なり。されど封建時代の習ひにて、表面より烈公を望み、斯くまでの名聲を博し、光榮を發するに至りしなり。果して其如く、安政二年の大地震に、藤田が非命に死せし後は、水戸の勢力稍々挫け、其社會に對する方針も、亦昔日の如く確一なる能はずとの評あるに至れり。さる故にや、其頃に於て、閑叟も烈公の人と爲りを最初の如くには喜ばずして、天下の爲めに深く望を屬するに足らずと看破したるに似たり。余が斯く揣摩するは烈公を謗るにはあらず。烈公の活潑にして磊落な

閑叟烈公の眞價値を看破す

る、固より一個の偉人なるに相違なし。されど活潑にして磊落なり、因て、單に其點のみより觀察すれば、誠に愉然として相親むべきのみならず、凡そ此種の人が無責任の地位に立ちて、白眼に天下を睥睨する時は、眞個の英雄豪傑として世に迎へらるゝものなり。然れども久しきに渉るまで其名聲を維持する能はず、必ず漸々に世人の爲めに其眞價値を看出さるゝに至るは、免れざることにて是非もなきものなるぞかし。

閑叟が烈公に望む事由

見よ烈公の主唱に係る尊王攘夷の論は、一時、非常の勢を以て天下を震動し、人心を風靡せしめたりと雖も、時勢の變遷は次第に其言論に反對したる事實を呈し、今は世の具眼者をして其主唱風靡したる言論にては、實際に於て家國の大事を處斷する能はずとの考慮を懐かしむるに至りたり。蓋し閑叟が烈公に望を屬するに足らずと爲せしは、職として之に由る。獨り閑叟のみならず、當時最も聰明の聞え高かりし**島津齊彬**も、亦此情實を發覺したるが如し。烈公は宇内の大勢に對して自ら其目を蔽ひしと謂ふべし。其初めに於て、攘夷を主張せしは、あながち尤むべきに非らず、是は外國の事情を知らざるに際して我國民一般の感情とも言ふべき事なればなり。然しながら時務を知るは俊傑の事なり、能く時勢と推移するは君子の行のみならず、殊に政治家の主要として爲す所なるに、烈公の終始、絶對的の攘夷を主張せしは閑叟、齊彬等の永く彼と相合ふこと能はざるも、固より其所なりと謂ふべし。さればこそ開港より數年を経る間に、少しく内外の事情に

烈公は終始絶對の攘夷主張者

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



通ずるものは、誰も烈公の迷誤を覺らぬものはなきに至りたり。

さりさて一概には烈公を非議す可からず、彼は少しも外國に縁なき地に立てり。佐賀と薩州とは實際に他に先ちて外交上の經驗を有せしを以て、其鎖國攘夷の頑夢を覺したることも、亦他に比して敏速なるを得るものありたればなり。此に少しく其事を語らん。

薩州は我國の全體が未だ夢にも外交の事を見ざりし時に於て、早く琉球に就て經驗する所ありたり。ペルリが渡來より凡そ六七年前の事なりき、佛國人は琉球に來りて國王との間に條約を結び次で英國よりの使臣等も亦同様の事を爲し、琉球は一の歐洲互市場となりて薩州は之れに向つて貿易品を輸送したり。此事は、幕府も已に知了して默許せり。曾て其藩主齊彬が暇を告げて國に歸らんとするや、時の將軍は特に之れを承認し、且外人をして内地に來らざらしむる様に盡力すべしとの囑託をなせりと云ふ。ペルリの來るにも亦先づ琉球に立ち寄りたる後に浦賀に向ひしとなり。

思ふに彼外人が琉球に來りて暫く此に止まりしは、因て以て我國の形勢を視察せんがためなるべし。當時『日本』てふ問題は、已に歐米諸國の注目する所なりし。其初めて浦賀に來りて開港を促せしは米國なれども、佛、英諸國も亦た夙に同一の企畫を爲し居たりしなり。其暫く足を琉球に止めて、容易に内地に進ませざりしは、蓋し我國を以て非常の尙武國なりと畏れしに因るならん。

薩州の外  
交事情經

佛英人琉  
球に止り  
内地に進  
まざるは  
我が武國  
なるを畏  
るに出づ

豐臣氏征  
韓の効力

大抵東洋に來り事業を營まんとする外人は、必ず先づ東洋の歴史を學ぶなり。然るに遠くは北條氏が十萬の元寇を塵殺せし事、近くは豐臣氏が懸軍千里破竹の勢にて明韓の大兵を擊破せし事、みな夙に彼等が稔知する所となりたらん。故を以て頗る我を畏れ、日本は、猛勇なる人民を以て充さるゝと想像したりしなり。且佛英人は、米國の如く十分の準備を爲して來りしに非ざれば、一步内地に進む能はず、僅に琉球に寄りて貿易を爲すに止まりしのみ。ペルリの琉球に立ち寄りたる、萬一不虞の事あらば此地を足場として、以て我國に當らんとの意志を有せしなり。

之を要するに、是等の諸國が先づ足を琉球に留めしは其順路に當る要地なるを以て、先づ此に據りて遙かに我國の形勢を視察せんと欲せしこと、固より其一因なる可しと雖も、抑も亦彼等が我國を非常の尙武國と爲し深く恐怖を懷きしも、其重因ならずんばあらず。豐臣氏が兵を朝鮮に觀したる、道理を以て律すれば價值なき所爲ならんと雖も、不發達なる社會の實勢に向つては、我國の爲めに大に國威を輝かしたり。其效しは維新の始めに於て、外人が漫に我を一の野蠻國を以て目せず、比較的に鄭重の方法と相當の注意とを以て、我を待ちしは、職として太閤の征韓史に因由せり。嗚呼、今も豐臣氏あるならば、余は何時にても外國征伐を拒まざるなり、談や、旁岐に走れば且これを舍かん。

薩藩主齊  
彬の所見  
は閑叟と  
符合す

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情

却説も、薩州はかゝる關係よりして他に先ちて外人に關する事情を知るを得しなり。殊に、藩主



齊彬は封建の末葉に於ける名君にして、非常の人物とは稱すべからずとも、時勢の變遷を未然に察するの眼識は慥かに具有したる人なり。彼が當時、閑叟に與へたる書翰に就て察するに、彼は攘夷は到底行はるべからざる事と信じたるもの、如く、貿易は經驗に由て自他を利益するものなりと認めたるもの、如く、但し、此際の急務は、外人をして侮慢の念を起さざらしむる爲めに、嚴に國防策を實施するを必要となすもの、如し。閑叟の所見は全く齊彬に符合したるものなり。乃ち彼は從來、長崎の地を管理せるの故を以て同じく外人の事情を知るを得、且つ貿易は相互の合意を以て自由に成立するものにして、其結果は確かに自他を利益するものなることを知りしなり。

烈公は之れに反して絶對的に攘夷論を主張したるを以て、閑叟齊彬は感情の上に於ても意見の上に於ても、漸く互に乖戾し、復昔日の如く相提携するを欲せざるに至りぬ。

然るに水戸と幕府との軋轢は愈々激切に赴き、將軍繼嗣の議に就き、且密勅の件に關し、大老井伊と烈公との間に生じたる劇烈なる論争は、攘夷開港の問題と葛藤を相纏繞して、將に天下の一大事變を惹起さんとするの情勢を呈し、水戸派も閣老派も互に有力の黨與を求むること益々急なり。閑叟は曾て烈公との交誼あり、且長女を烈公の子に娶はせられたれば、已に姻戚の關繫もあり、加ふるに、彼の頭角は自ら列藩諸侯の上に嶄然と見はれ、頗る世望を負ひしを以て、水戸は援て

水戸と幕府との軋轢に閑叟は黨に傾せず

其黨與と爲さんと圖れり。交誼、姻戚は當時の習慣に於て彼を水戸の側に立しむるに強き情實なりしに拘はらず、斷乎として其誘導に應せざりしは、是實に其所見を異にしたると、烈公の人と爲りを瞭知したるとに由るなり。夫れ此の如く閑叟は烈公の剛愎自ら用ゐる時に従つて移るを知らず、漫に粗大の見解を抱きて精密の思慮を缺き、徒に舟を刻して劍を求むるの言動に出づれば、其内外多難の時に際して、共に天下の大事を圖るに足らざることを看破したりしなり。

左れば閑叟は水戸と幕府との軋轢に關して、表面は局外中立を爲せしが如くなるも、其實は寧ろ井伊に心を傾けしやも知るべからず。是は只余が一己の臆測たるに過ぎざれども、井伊が大老の身を以て數々佐賀邸に來遊し、齊彬も亦同席したることありと言へば、必ず推料に違はざるべき歟。當時閑叟は何事も自己の考を以て之を獨斷して吩咐したるを以て、其全體の眞意を審かにしたるものは殆んどあるなし。蓋し、餘多の藩士中に、學問に於ても、才畧に於ても、辯論に於ても、一人も彼に匹敵するものなく、因て彼は自然に何事も獨斷するの習慣をなし、藩中は唯命に之れ従ふの狀態となり、機械的傀儡的に運動をなしたるに過ぎず。故に井伊と齊彬と藩邸に來りて、如何なる協議を爲し、又如何なる談論を試みしや、固り秘密を旨としたる事なるべければ、今は之れを審かにする由なれども、當時彼の往復は水戸に於けるよりも、井伊に對して頻繁なりしは固より外表に於て疑ふべくもあらず。

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情

閑叟は寧ろ心を井伊に傾く



井伊を斃したる浪士は閑叟の頭を獲

又其結果に就きて之を見るに、井伊が櫻田門外に於て水戸浪士の毒手に斃るゝや、閑叟は痛く驚きたり。佐賀藩は猶更大に驚きたり。井伊を斃したる浪士等は、轉じて閑叟の頭を獲んと企畫すとの風説さへ傳はりければ、藩廳に於ては遽に其不虞に備へんがため、先づ軍艦を品川に廻し、且公然兵を出す能はざる法制なるを以て、武勇の壯士を選び、選用を帯びたるの外見をなして、晝夜兼行して江戸に上らしむることゝ爲したり。

閑叟を水戸に與せしめんと奔走す

余は後に是等の事情を審かにするに及んで、始めて閑叟が水戸と結托せざりしは結托すべからざる理由のありて存せし事を知りたり。當時に於ては然らず、余等の同志(佐賀藩の改革派)は閑叟が水戸と結托せざりしを知らぬのみか、相率ゐて水戸に左袒したりし。蓋し、余等の同志は、烈公の言行を聞て、漫に其人と爲りを慕ひ、且多く藤田、會澤等に親接して其所説を聽いて語りたる者もあれば、爲めに感激する所ありしを以て、此際に至りても、猶水戸を喜びて幕府を嫌ひ、因て水戸の敵手たる井伊を惡むの情は甚だ深かりけり。然る中に、藩主閑叟は幕府を助けて水戸に抗するの傾向あるが爲に、水戸人士の憤怒に觸れしを聽き、如何で愕然として其不可思議の現象に惶惑せざらん。皆謂らく、是一日も緩うす可からずと。即ち各自に奮うて江戸に赴き、先づ閑叟の心を翻へして水戸派たらしめ、然る後に徐に天下の大事を謀らんとを期し、頻りに諸所に奔走して江戸派遣の選に當らんとを企畫したり。左れど兼てさへ其選を得がたきの事情ある上に、殊

に今回は武人を要することなれば、余等の如き白面の書生にて其意を達せんことは、最も至難の望にてありしなり。余等は事の必ず俎豆の間に平和の結局を見るに至るべきを説き、萬々一、不幸にして腕力を要する事あるも、余等も亦一個の丈夫を以て自ら任ずる者、必らず身命を抛ちて主君を擁護すべきことを述べ、以て藩吏の心を動かさんとしたれども、如何せん事の匆卒に起り、至急に派遣を要する場合なりしかば、余等が晝夜を通じてなしたる必死の運動も、左したる効果なくして、三四十人の派遣員中に僅に四五人の同志を加へ得たるに過ぎざりし。

余等は之れを聞て無限の恨事と爲したり。何となれば、一藩の浮沈は此時に在りと思ひつめしを以てなり。左れば猶も如何にもして、挺身し江戸に出て、藩主の爲めに圖る所あらんと心は矢竹なるも、他に其方途もなし、さりて手を束ねて此機を空うすれば、大事一たび去て復た回すべからず。因て、自費を以て江戸に赴くことを請願せんとの議起りたれど、かゝる場合に於ける改革派の常態として、余等の同志は孰れも其旅費滞在費等に缺乏したるものゝみなり。是に於て余は母と相談して窃に決心する所あり、例に依りて同志の集會を余の家を開き、多數の事は及び難きも五六人の費用は余が辨すべきを告げたり。且余の齡は猶僅に二十三に過ぎざる黃吻兒なれども、必ず其一行中に加はるべきことを約し、因つて江戸に赴くの自由を許されんとを藩廳に請願したり。同志中島義勇の如きは、君側の藩吏に知人少なからざりしを以て、其間に奔走して許容を

自費にて東上を謀る



得んことを勉めたれども、是も亦遂に其目的を達すること能はずして止みたりき。

嗚呼、不運は余等の同志を掩へり、萬已を得ざるの場合には、萬已を得ずとして他日を待つより外はなし。但し余等の同志五六人は幸に選ばれて已に江戸に赴きしを以て、是等の人々と自由に書信の交通をなし、因りて以て大勢の變動、諸藩の方向等の概略を窺ひ知るを得。且其大勢に對して輿論の存する所、并に諸般の出來事に對する有力者の見解等を審らかにすることを得るに至り、余等同志の團結は之れが爲めに煽動せられ、刺戟せられて益々其強固を加へたり。

余等は先づ尊王の大義を明にし、進んでは全國の爲めに正當の方針を見出さんことを期し、退きでは郷國の爲めに藩政の改革を遂行せんとを期し、かくて同志の熱心なる運動は、是よりして益々其氣焰を高め、其勢力を増進せしめたるを以て、藩吏等は愈々其心に快しとせず。曰く「是君主を後にして 皇室の爲めに盡すものなり」と。又曰く「藩士たるの務めを守らざるべからず、我藩を外にして漫に國家の爲めと揚言し、恣に狂奔するは非理の甚だしき者なり」と憎嫉するに至れり。余等は因て之を辨解するに「忠臣は孝子の門に出づ。皇室に忠なる者にして何ぞ藩主に忠ならざらん。藩主に不忠にして 皇室に忠なるものあるを聴かず。余等の心は他なし、唯誠心に藩主を推して 皇室の爲に盡力せん」と欲するのみとの大意を以てせり。

兎角に、余等が滿腔の企望を達せんには、成るべく藩吏の妨害を避くるの利なるを察し、其心を

融和せんことを勉めたれど、如何にせん、彼等は皆な機械的の人物に過ぎざれば、諸般の事物に對して毫も自己の意見を畫することなく、唯々として藩主の命に順從して一意に其事を務むるに過ぎず。時勢の愈々切迫するに従ひ、彼等も益々繁忙を加ふれば、益々余等の言に耳を傾くるの暇あるなく、余等が刻下の急務と信じて謀らんとすれば、彼等は唯、無造作に「其は藩主の喜ばざる所なり、是も藩主の好まざる所なり」と答へ去るのみ。實に此機械的の人に對する術には困しみ果たり。斯くの如き事態なるを以て、余等は自己の意見を藩主に通致する能はず、又藩主に於ても同志の所見を聞くこと能はず。されば藩主は果して藩吏等の言ふが如き意見を有せるにや、將た余等に對して如何なる見解を懷かるゝか、すこしも明かにする能はず。蔽障の外より藩主の行爲を観察すれば舊に依て寛裕なり。同志中より禁を犯して藩を脱し、大事を圖らんとして破れ、捕はれて死刑に處せらるべき者も、猶ほ之を宥免して其側に近侍せしめたる事もあれば、其眞意は必ず余等を棄てざることを證するに足る。是を以て、余等は藩吏を惡くむの情を漸くに増長したりと雖も、藩主に對しては少しも怨を含むに至らず。猶偏に望みを屬したる故を以て、敢て倉忽の暴舉に出でず。姑く躍如たる意氣と鬱乎たる憤慨とを抑へて時の至るを待たんと欲したり。嗚呼斯くの如き異分子を藩内に貯へつゝ、彼長州の如く、水戸の如く、血を以て血を洗ふの分裂衝突を見るとなく、版籍奉還の時に至るまで能く平和を保全したるは、全く閑叟の力にして、佐



閑叟の寛厚は中原の運動に失

賀藩の幸福とする所なりと雖も、亦之が爲に中原に一步先着を失せしを観あるは、切に憾むべしと爲す所なり。實に閑叟は寛厚雅量の君子なりしなり、之れをして無事構成的の時代に處せしめば、其施設は大に佐賀藩の改良進歩を促がすを得たりしならんも、時勢恰も雜亂紛糾し快刀亂麻を斷ち、百難を排して猛進するの言動を要したりしを如何にせん。閑叟にして早く之を明察して此方途に出で快斷を以て其意志の在る所を明言し、藩吏等をして其の向ふ所を知らしめたらんには彼糶糊中にありし異分は分裂し、同氣相求めて個々に結晶し、礫々落落快活の運動を爲すを得たりしやも料り知る可からず。

有望無二の地位を空うす

然るに、彼は只寛厚の雅量を以て獨裁したるを以て、余等の同志は進んでは全藩一致の大運動を試むる能はず。退いては異分子を分裂せしめて、己が智能を發揮し壯快なる活劇を演せしむる能はず。謂ゆる、即かず、離れずの間に、孤拳を振つて逆浪を凌ぎたるを以て、其心身の辛酸は、寧ろ他に倍蓰したるに拘らず、比較的其効果を奏する能はざりしは、誠に是非なき事にてありけり。回顧すれば天下に改革の風雲動きしより以來、櫻田の變を見るに至るまで、佐賀藩は有望無二の地位に立ちたりしに、其風雲漸く熟したる時に至りては如何、改革已に完成したるの時に於ては如何、噫嘻、復た問ふを休めよ。

當時、我國の情勢を天候に譬ふれば、一部は晴れ、一部は陰りたるに比すべし。其始めは全國を

國情衆論の陰晴變化

通じて陰りたる部分のみ多かりしも、時の移るに従うて漸々と晴れ渡りて、終には全く晴天白日を見るに至りたるなり。若し又一個人に就きて之を見れば、始よりして晴れたるあり、中頃に至りて晴れたるあり、終りに至ては猶晴れざるものも亦少なからざりしなり。其の晴と不晴との遅速差異は、必ずしも其人の賢不賢に因りたるにあらず。寧ろ其地位之れをして然らしめしもの多きが如し。現に、余等の同志は素とは熱心なる攘夷家の團體なりしに、其長崎に往來し、蘭學を修め、或は兵制を調査したる結果として、自ら外人に對する感情を和ぐるに至り此に於て初志は一轉して遂に閑叟の行爲を是認し、彼水戸派が主張したるが如き無法の攘夷は到底實行し得べからざるものなることを醒覺したりしなり。思ふに閑叟はかゝる機能の運移を知るを得ざりしならん、噫嘻是も誰の咎ぞ。

米國より歸朝の同志の事情を聞く

此に少しく其機能の運移を説かん。曩に幕府の使節に従つて米國に赴きたる余等の同志二人は新に歸朝せしに、恰も藩内に於ける開港攘夷の議論正に其極度に達したる時なりしかば、藩士は交々就きて彼國の事情を質問したり。二人は一々これに答辯し、其制度、文物、鐵道、軍艦、兵器、彈藥及び商工業等の事に就て、或る一部の人士の耳朶には、寧ろ誇大の言辭として聞かるゝまで、盛んに其盛大を稱揚して説明したり。彼等は二ヶ月以上も米國軍艦の中に起臥し、其士官等と相語りて、クリミヤ戦争及び英佛聯合軍の支那征伐等に關する實況を聞くことを得、稍々各國の勢力



を知了したるを以て、亦其等の事を舉げて問ふものに答へ、東亞の形勢容易に歐米と競ふ能はざるの事實を語れり。

攘夷家は  
歸朝者の  
言を喜ば  
ず

然れども攘夷家は雷に之れを信せざるのみならず、亦之れを聞くを喜ばざりし。其意に謂へらく「彼等は元來弱膽の士なり、徒に其外形を觀て、獨り其富強に驚けるのみ。彼外人は底物ぞ、萬能足りて一心足らざる夷狄禽獸のみ。假令、種々の機械等工藝上に於て、我に勝る所ありとするも人倫の大本、國家の基礎、丈夫の精神に至りては、固よりいかで我に比較するを得べき。真正の志士は必ずしも美服を纏はず、一國の元氣は固より兵器の巧にあらず。然るに、彼等弱膽の士は輕忽にも其外形に迷はされて敢て此の如き言を爲す、是我國體を顧みざるの甚しきものに非ずや」と。

開港派は  
歸朝者の  
説を領す

之れに反し、同志中の開港派と稱すべきものは、彼等の所説を聽きて、愈々其意見の非ならざるを覺り「交際は自他互に誘益するもの、他山の石を以て玉を磨くべし。今、歐米の書に就て之れを研究し、且之れを同志の實驗談に聽くに、文物典章より、種々の商工業の上に於て、其整理の狀は感歎すべきもの多し。我國民は宜しく虚心平氣にして以て採長補短の方法を講せざる可からず。如何んぞ一概に夷狄禽獸視して排斥すべけん。まして不法の言動を以て之に對せんとするは非理の甚しき者なり」といひ、因て兩々相對して、非議論難の聲は其激高を加へたり。

支藩の書  
生外國人  
と紛争を  
生ず

此時に當り、不幸にも一珍事こそ起りたれ。佐賀の支藩蓮池は、五萬石を領せり。其書生某長崎に至り、外國人居留地の形勢を視察し居りしに、不斗外人に遭遇して舉止の甚だ傲慢なる所ありしとて一場の紛争を惹き起し、遂に某は幕吏の拘留する所となりしを、其後、藩廳は幕吏の手より引取ることなれり。

外人との  
小故は一  
藩の大問  
題となる

某の所爲は一時の細故に過ぎず、固より外人に危害を加ふる意思ありしにも非ず、今日ならば違警罪にて罰するにも足らぬ程の事なりしなり。然れども當時の人心には非常なる刺衝を與へて、忽ち一藩の大問題と爲りたり。就中同志中の攘夷家は、之を天下の大事なるが如くに言ひ觸らし、謂ゆる武士道に由て某の所行を律し、「彼は何んぞ外人を殺さるや、双刀を腰に帶しながら斯く無上の耻辱を受く、我武士道を汚したり、必らず、死に處せざるべからず」と極論して少も假さざりし。當時、純粹なる慷慨家の口吻は常に此の如し、藩吏等は之に反對し、固よりさまでの罪に非ざれば宥恕すべしと論ずるものあれども、攘夷家の氣焰は甚だ熾んに、神州の耻辱なり、武士道の蠱なり、決して再び天日を見せしむべからずと口を極めて攻撃したるにより、藩廳にても已むを得ず其論に従ひ、遂に某を死罪に處するに至りき。是已に過酷なるもの、然れども激烈なる攘夷家は尙ほ之れに甘心せざりけり。

激烈攘夷  
家の激昂

彼等は私に蓮池に赴き、其有司を煽動し、蓮池は帝國の爲め、武士道の爲めに、彼外人に對し、



其藩の書生某横死の復讐を爲さざる可らずと論じたり。是更に何たる奇怪の論ぞ。強ひて某を死に致したるは畢竟彼等の自らに非ずや、其死の復讐といはゞ彼等自らこそ之れを受くべきものならずや。然るを却て外人に其罪責を歸せしめんとするは奇怪の至りなれども、當時に在ては一向に無理とは思はざりしなり。蓋し、彼等は久しく一種感情的の武士道中に生息したり。武士道はもと害悪ある教とは言はず、然れども、彼等が頑狭の心より、之を極端に解釋し、遂には斯る不合理の斷定を爲して、毫も怪しまざりしのみならず、却て正當なる道理と信せられしなり。之に加ふるに、彼等は是に權謀を交へて、閑叟の内意に出でたるが如く勸勵したるを以て、蓮池の有志は直に進んで之に應じたり。是に於て其同志は後累を藩に及ぼさざらんことを慮りて一同脱藩するに決し、武器、彈藥等を準備し、先づ居留地を焼却し、外人は勿論、幕吏等に至る迄、當るに任せて殺傷すべき事を約せり。

佐賀より長崎までの距離は凡そ三十里。同志中の一隊は先づ其形情を探らんとす。已に出發し、後隊も亦た繼ぎて發せんとす。偶々藩の監察は之れを探知し、直に同志を拘留し、同時に蓮池に諭して、其事の閑叟の意にあらざるを明かにし、謂ゆる復讐の毫も理由なきことを以てせしかば、彼等も頗る其心を翻へしたりしが如し。

是に於て、同志等は甚だ危険なる地位に陥れり。之れを藩律に照せば其主唱者煽動者は死を免か

れず、寛なるも流刑若しくは追放に處せらるべきなり。藩吏等は固より彼等を嚴刑に處せんと欲したり。獨閑叟の寛容なる、復之れを拒みて「是少壯者血氣の常のみ、深く咎むるに足らず。彼等漸く經驗を積み、事理に明かなるに至らば、必ず其非を覺りて戒慎し、竟に有爲の材たることを得ん。但し典刑は寛弛に失すべからず、若し彼等の放縱を再びするあらば寸毫も假すべからず、今回は姑らく寛恕すべし」といひしにより、事なくして止むを得たり。

然るに、亦余等同志の爲めには最も悲しむべき一事件の出來たりけり。余の先輩中に於て實に第一流の人士なりしならん。若し生存しなば疑ひもなく明治の政界に顯著の地位を占めて國家の爲めに偉大の事業を經營したるべし。其は大木江藤等の親友にして年齒は江藤よりも少なかりしと覺ゆ。學問あり、見識あり、資性敏活にして儕輩に數歩を抜く。萬延の比より江戸に留學し、籍を昌平黌に掛けしも、常に志士の間に奔走して尊王攘夷の論を主張し、其名聲は已に四方に轟けり。其勢に乗じて幕府の權威を抑制して 皇室の尊榮を發揚せんと欲するに際し、幕府議議の獄に連累されて其捕縛する所と爲り、不測の厄に陥りたり。

同志は此事を聞て大に激昂し、即ち藩廳に迫り、藩力を以て彼を幕府より引取んとを要求し「幕府は不法なり、安政の大獄以來、讜議の志士を殺す幾許なるを知らず。今回の事は、一の嫌疑に過ぎざれば、嚴刑に致さるゝ慮りはなきも、幕府の近事は決して通常の情理を以て推すべからず。



中野方藏  
遂に幕府  
の獄に斃  
る

不幸にして若し死に處せらるゝことあらば、佐賀藩の面目を辱しめん。夫れ幕府は好んで天下の名士を殺さんと欲するもの、已に寸毫の理由なくして長藩の名士吉田寅次郎を殺せり。今又た一嫌疑を以て肥藩の義士を戮せんと欲するやも測り知るべからず。此事甚だ危し、藩に於て、急に之を救ふの處置を執らざるべからず」この意を述べて、藩吏に説き力を極めて實行せしめんとすれども、全く徒勞に屬し、彼は遂に幕府の爲めに獄中に斃れたり。藩吏等は全く之れを顧みることなかりしや、或は幕府に一應は掛合ひたるも救ふ能はざりしや、其消息は知るに由なければども、佐賀藩當時の勢威を以てして、苟も力を極めて斡旋したらんには、彼を救ひ出す能はざるの理由なきに其然らざりしを見れば等閑に附し去りしものならんと思はる。如何に其忌嫌ふ人なればとて、斯る場合に傍觀して救はず、空しく大材の萌芽を滅絶せしは、實に遺憾至極の事なりき。彼れとは誰ぞ、中野方藏といふものなり。

枝吉空閑  
の名士類  
々斃る

此頃は又、枝吉奎助コレラ病の爲めに斃れ、空閑次郎八も亦麻疹に罹りて死したり。枝吉の事は已に之を説けり。空閑は枝吉に次で人望ありし人にして、才識は卓越なりと言ふにあらざるも、資性忠實にして剛勇の人なれば、一旦事あるに臨みては必ず有用の材力を顯はすべきなり。曾て熊本に留學し、同學書生等と會談して酒を呼びし際、一人あり横臥して閑叟の詩を吟咏せりとして、直ちに之を詰責し、因て一場の紛争を惹起したる事ありき。彼は羈旅の身なり、天涯の孤客なり、

空閑某の  
剛勇

熊本の士は蝟悍なり、尋常の士人ならんには、よも斯る大膽の舉動をなすを得ざりしならんに、彼は單身異郷に在て其稠人の中に論争し、飽迄も其無禮を責めて、一座を困屈せしめたるは不敵と云ふべし。かゝる剛勇の士も疾病には勝つ能はず、空しく同志に惜まれて泉下不歸の客となりしこそ是非なけれ。

當時、全藩一致の運動を爲すことは已に望みなかりしと雖も、是等の數士にして生存しなば、佐賀の人士は一層有望の地位に立つを得たりしならん。不幸にして天は年を彼等に假さず、余等をして互に相援け相補うて明治の新舞臺に活劇を演ずる能はざらしめしは、たゞ余等の不幸に止まらざるなり。

閑叟私か  
に齊彬を  
訪ふ

翻つて説く、彼井伊が水戸浪士の毒手に斃るゝや、閑叟は大に驚きたると同時に、大に失望したるものゝ如し。其時隠居して佐賀に歸り、左右に圖らず、藩吏に告げず、私に軍艦に搭じて鹿兒島に至り、齊彬に會して深く相談する所ありしとも言ふ。其談せしは何事なるやは推測し難けれども、櫻田の變事に引續て兩雄秘密の會合は、よも風流宴安の爲にはあらじ。兩雄の交誼よりして察するに、疑もなく、國家の爲めに將來の方針を定め、相提携して大に爲す所あらんことを計議せしものならん。然るに何の不幸ぞ、間もなく齊彬も亦コレラの侵す所となりて長逝せり。閑叟は之れを聞いて痛く失望せり、落膽せり。蓋し、此失望落膽は單に二人の交誼上よりして刺戟せ



齊彬の死は閑叟の運命を奪ふ

大隈伯昔日譚

られたる感情に止まらず、其國家の爲めに將來計議を共にするものなきを知りしより來りしものならん、實に齊彬の死は閑叟の運命を奪ひたるものと謂べきなり。斯くて二年が程も閑叟は過度の勞苦に痛く其身心を疲勞せし折柄、當時、流行せしチブス熱に侵されて、臥床にある殆ど一百日、病症頗る危殆なりしも、幸に九死の中より一生を求むるを得たり。既に一生を九死の外に繋ぎたるも、之がために全く昔日の形貌を失ひ、強健にして肥滿なりし軀體も今は其形を存するのみ。謂ゆる顔色憔悴、形容枯槁、殆ど白骨に肉したるに等しき容となれり。今の松本順等の舊師なる蘭醫ボンペ等に就て篤き治療を受けたれども、較著たる効驗なく、又温泉浴海水浴を爲して、閑散の郷に心を遣りしも、遂に元氣を回復するに至らず。漸く胃弱の爲に惱まされ、心氣益々衰耗せしを以て、止むを得ず、其政務は概ね嗣子に委ね、其身は眞の隠居となりて閑遊自適を専らにすることになれり。

閑叟の心氣衰耗

然るに余等同志は、此際に於て大に藩政改革の實を擧げんことを企望せり。嗣主新立して職を襲ふの後は改革を行ふ必要ある時期にして、且之を決行するに最も便利あればなり。因て余等は多少奔走する所あり、以て余等の素志を達し、天下に對して全藩一致の運動を爲さんことを望めり。されば實際の表面に於ては、新藩主の年齒は、僅に十六七に過ぎず。是を以て隱居したる閑叟は藩内には依然として藩政を監督し、仍ほ保守の方針を取て有爲の藩士を拘束するが如き傾向を示

閑叟の人となり

したるにより、余等も亦其間に活潑の運動を爲して志望を達することを得ざりし。

請ふ、更に閑叟の人となりを評せしめよ。前にも言ふ如く彼は封建時代の末路にて第一流の人物たりしは疑ひなし。容貌魁偉にして、資性英明、實に古君子の風あり。少壯時代に在りては、英風渾潑して、意氣斗牛を衝き、激進主義を執りて藩政を改革し、勇斷果決は人を驚かしたるの事あり。中年時代に及んで、其改革の急激に過ぎて、往々、失敗に陥りたる經驗よりして、稍々漸進主義の人となり、晩年、重病に悩まされてより、志氣痛く變化し、保守主義に變じ、老衰して別人の如き性行となりしと雖も、要するに一代の名君として天下の囑望を失はざりき。是其教育必ずしも異なりたるにあらず、殆ど其天稟に得たるものと謂べし。初めは江戸邸に成長して、其受けたる教育は、一般に大名の受くる普通の教法に過ぎず。若し少し他に殊なる所を求めば、其母夫人と老女との特に賢女にてありし一事あるのみ。其初めて國に就くに方りて宇和島藩主伊達春山（姑の夫なり）より爲政の大要を受け、併せて佐藤信淵の家著書を傳へられたり。既に藩政を聽くの後、數多の學者を登庸したるを以て、天稟の美質を其啓沃に依て益々發達したるもの、如し。

教育に非ず聰明天稟の美質

長所なるが如き短所

左は言へど又長所なるが如き短所を有したり、是は他なし、晩年に至り何事も獨斷を以て處理したる事はなり。抑獨斷の處理は必ずしも咎むべきにあらず、何事も家老に放任して、世の風波を

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



餘所に見る凡常大名に比すれば、寧ろ甚だ稱揚すべき事とす。但夫れ、獨決自斷の行爲は多くは完全なる能はず、最愚者の爲す所も却つて最賢者の頭腦を支配するあり、かゝる世に於て、天下に棄材のあるべき理なし。殊に政治家として世に立つて事を爲さんと欲するに當り、多數の人士と相提携するは、必要已むべからざるの事たり。人は固より萬能力を有せず、如何に英明の人なりとも、一人の能力以て能く天下の大事を處し得らるゝ者にあらず。然るに閑叟は則ち之をなさんとせしを以て、自身には非常に苦しみ、他には其材を伸しむる能はざらしめたり。

且、閑叟は猶未だ爲すべからざる時に際しては大に其力を用ゐる其方に爲すべきの時に至りて其力を用ゐざりしものなり。是其平生の經歷が彼をかゝる誤謬の點に誘導したるなり。斯の如き事は我國に古來少なからざる事例にして、孔孟、釋迦の教義の其素因を爲すもの少なからず。蓋し彼等は將に一事業を爲さんとして、若し苟も意の如くならざる場合に遭着する時は、或は人生の無常なるに驚き、或は塵事の多端なるを嘆じ、忽ち其志氣を挫折して保守的無爲の人と化す。抑人生の大機能は豈斯の如きものならんや。失敗は元と大成の器を鍛鍊する所にして、困難は其意氣を激揚せしむる興奮劑なるのみ。己れの見識の足らざりしを顧みず、其方法の誤りたる點を問はず、唯失敗の結果をば擧げて運命の罪に歸せんとするは、運命まさに其冤に泣くなるべし。是を以ていへば、閑叟の晩年に於ては、天下の好機を啓きて其敏腕を待ちしに、彼は自から進ん

閑叟は時に可爲の力を爲すに用ゐる時に用ゐる

天下の好機を利用せず

で之を利用する氣力なかりしなり。已に其氣力なくして事業の成立する事あらんや、況んや効果をや。嗚呼、彼は一旦の失敗の爲めに、何事も爲さざる保守的無爲の人となり、「兎角浮世は事なかれ」てふ言を無上の主義と爲したり。是を以て、彼は藩士中に或は脱藩し、或は紛擾を企つるものあるも、唯諄々として之を止め之を制止し、經驗にて自悛するを待つに過ぎずして、其無事を欲するの極は敢て之を罰する事だに爲さざりし、當時は到る處の藩々に、切腹、禁錮或は追放等の慘刑を以て數多の志士を誅罰したれども、佐賀藩に於ては一人もかゝる不幸に遭ひし者なし。

寛容の一例

其寛容の一例を擧ぐれば、現に鍋島家の家令たる深川亮藏は、曾て京都に於て堀田備中守を要撃せんとして成らず、遂に捕はれたる人なり。當時藩の有司は皆な嚴刑に擬せんとせしも、閑叟の寛容なる獨り聽かず、斯の如き少年は他日必ず有爲の人物たるべしとて、乃ち其罪を問はざるのみならず、反て拔擢して嗣子直大の侍臣となしたり。深川は是より深く其恩義に感激し、遂に一身を擲ちて報効を計らんと欲するに至れり。其他江藤の如き、大木の如き、將た副島の如き、何れも皆其寛容に浴して嚴刑を免がるゝを得たり。余が如きも、當時の法律典刑に對しては幾たびか死すべかりしに、能く生存して今日に至るを得たるもの、全く彼の仁惠の賜なりと謂はざるを得ず。

余が今日あるは閑叟の仁惠

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



仁惠寛容は自己の徳義に於て固より間然する所なし。然れども之を施し、之を用ゐるの餘は、萬事柳枝の風に對するが如く、抗せず折れず、嬾々として卓立する所なく、徒に其柔和の政下に志士を羈縻して、殆ど動くを得ざらしめ、震天動地の活劇を演せんとする社會に於て、觀望的、儉安的に歲月を送りしは優柔と言はん乎、將た冷淡と言はん乎、何にしても一大不幸の藩たりしを免かれず。

薩、長、土の如きは之に反して、有爲の士各々其技倆を以て一藩の代表を爲し、以て大機變遷の間に斡旋する事を得たり。薩の小松、西郷、大久保の如き、土の板垣、後藤の如き、長の大村、木戸等の如き、何れも皆其藩力を後援となして諸方に奔走するを得たるを以て、其言動は即ち勢力ある其藩の言動として天下に承認せられたり。故に、彼等の力は能く朝廷を動かし、又能く幕府を動かし、而して各見る所に從つて臨機應變の處置を爲し、他の愚蒙者に先つて着々偉功を露はせしにより、彼等の言動は天下に對して神變不思議の能力を有するかの如くに見えしなり。之れを佐賀藩の士が爲さんと欲して爲す能はず、動かんと欲して動く能はず、一種の牢獄に繋がれて切齒扼腕し、坐して時勢の移るを見たる境遇に比すれば、其難易、幸不幸は果して幾何ぞや。余は敢て告白す、藩主閑叟は單に人物として論ずるときは、薩長土の三藩主を壓するに足るべきも、機勢大變遷の際に於ける藩主として、其藩士に自由を與へ、其俊秀を登庸するの點に於ては、他

薩長土の  
藩士と佐  
賀の藩士

閑叟却て  
一步を薩  
長土の三  
藩に輸す

の三藩主に較べ劣れるものありしと。又た敢て告白す、當時の佐賀藩は實に薩長土の三藩に譲らざる勢望を有し、又中野の如く、枝吉の如く、江藤、副島、大木等の如き、其手腕に於ても、氣膽に於ても、共に薩長土三藩の人士に譲らざりしに拘はらず、其の中原に驅馳する上に於て、其維新の改革を大成する上に於て、外國に對する動力反動力に依りて馴致せられたる明治の文明に先鞭を着る上に於ても、共に一步を薩長土の三藩に輸せざるを得ざるに至りしは、一は運命の然らしむる所なるべしといふも、抑亦、閑叟が無事を目的と爲し、單獨の判定を好みしの結果ならんばあらずと。吁。

余等同志の坎坷不遇はみな斯くの如き中に於て、中野の横死は痛く余等を激動せしめたるのみならず、實に痛く落膽せしめたり。蓋し、余等の多くは前にも述ぶる如く、一種の牢獄中に繋がれたるを以て、唯々中野に向つて一片の希望を屬し、彼苟も江戸に在りて有志間に奔走せば、竟に必らず其目的を貫徹するの期あらんことを信じたるなり。然るに、幕府の爲めに捕はれて非命に死す。同志の激動落膽は豈に甚だしからざるを得んや。江藤が奮然志を決し、脱藩して京師に上りしも、實に之れが爲めに導かれしなり。江藤は夙に藩内の事情を察し、藩の力を擧げて皇室の爲めに盡さんことは、其時に於て頗る爲し難きを知りしを以て、先づ自ら京紳等の心を動かし、内外相應じて以て閑叟の心を動かさんと欲し、蹶然脱藩して京師に入りたり。

江藤脱藩  
して京師  
に入る



天下の望を繋ぐも  
閑叟あるのみ

顧みて當時の形勢を察すれば、殆んど紛亂の極に達したり。井伊斃れて一部の人士を失敗せしめ、慶喜春嶽新たに失敗して他方の人氣を沮喪せしめ、和宮の降嫁、公武合體の名を示めして、其實は擧らず。開國の議は大河の氾濫するが如きの勢を以て激揚すれば、攘夷の論は烈風の吹き荒るゝが如きの力を以て怒號し、薩長相和せず、有志の間には議論百出、手段方法の些末なる所に於ても軋轢抗爭し、輒もすれば貴重の生命を賭するが如きの擧に出で、流言浮説交々起りて人々適從する所をしらず。誠には國家の大變、千歳の危機、而して其運命の決は、殆ど間に髪を容れず。此時に當て、天下の望を繋ぐに足るものは、只一の閑叟あるのみ。春嶽は敗れたり、齊彬は既に死せり。其經歷と技倆とに於て、此紛亂の衝に當るものは、彼を措ては又他にあるなし。是を以て、余等は是非とも之れを動かし、出で、此の大局に當りて偉功を建てんことを企圖したり。然れども閑叟は已に昔日の氣力なく、左右の人は、皆な頑迷にして、謂ゆる天下の大勢、各藩の事情を察するなく、内部より彼を動かすの道は殆んど杜りたり。是江藤が先づ京紳を動かし、然る後に閑叟を動かさんことを計りし所以なり。

而して此時、余等の内に在るものは、更に人材登用問題を提出したり。是内外相應するの一策として必要なるものたり。蓋し京師より内命を閑叟に傳へ、彼愈々起ちて天下の難局に當るに至らば、從來の吏員にては到底其用に適すべからず。即ち其用に適せしめんとすれば、先づ余等同志の士を彼の左右に侍せしめざるべからず。是に於て、余等は閑叟に向ひ、熱心に少壯有爲の士を拔擢せんことを求めたり。

人材登庸の問題は  
意外の方面に  
用ゐらる

幸に其議は採用せられたり、不幸にも意外の方位に向つて採用せられ、其の選抜に中りしものは、多くは余等の同志にあらず、寧ろ反對の地に立つ少壯者にてありしなり。語を換へて言へば、佐賀藩の拘束的教育中に人と爲り、先輩の模型に入りて其形を變せずと言ふべき人々を登用したりき。偶々余等の間より任用せられたるものも、只書記官的の事務を執り、長官の願使に従ふ地位を得たるに過ぎざりし、故を以て、技倆あれども施すに所なく、見識あれども用ゐるに由なかりしなり。蓋し、余等の同志は個々に獨立の地歩を占めたるものにて、一個の屬吏としては格別の價値はなきなり、唯々諸々の處世法に對しては、到底反對の競争者に打ち勝つと能はざるなり。子々たる屬吏等は之を攻撃して曰く、「大言者果して能く爲すなし」と。

余等が人材登用の趣旨は、決して此の如きに止まらず、一藩の政權を握れる重なる人々を交迭せしめんと欲せしなり。然るに執政、參政の如きは依然として交迭する所なく、唯々其命令に従つて運動する機械的の吏員のみを變更したるに過ぎざれば、藩の爲めには、寧ろ其事務に熟練したるもの去りて、不熟練のもの來りたる損失を來し、余等同志の爲めには殆んど寸毫の利益をも與ふること能はざりしなり。されば、余等同志は益々困難の地位に立つに至れり。但し外より閑叟を

建議の採  
用は却て  
不利を來  
たせり



時の勢運は閑叟を擁立せん

動かすことは、必ずしも望みなきに非ず。時勢の運は、漸次に此目的に向つて援助を與ふに似たり。其は當時、公武の間に立て其材力を振ふに足るべきものは、獨り彼一人なる故を以て、幕府も彼に依らんと欲し、朝廷も彼に頼まんと欲す。朝廷に於ては已に仙臺、米澤、備前、因州、藝州并に筑前の如き諸大藩の藩主を上京せしめ、公武合體其他の事に關し、各其力を致さしめんとせられしに、是等の藩主は、概ね斯る難局を料理するに足る技倆を有せざりし。因て朝廷は一層望を閑叟に屬するに至りけり。

閑叟漸く動く

斯くて、其筋よりの内命もあり、且余等同志は日夜之に迫る所ありしを以て、彼も遂に其志を決し、足を舉げて再び京師と關東との間に往來するに至りたり。是に於て余等は時機漸く熟せりと爲し、各々身を挺して公卿并に列藩諸侯の間に遊説し、平生の抱負を吐露して、天下の亂麻を一刀の下に處斷し去らんと欲し、心力を盡して其道を求めしも是も亦遂に失敗に歸したり。蓋し余等は事を斷するに當りて、是を是とし、非を非とし、必ず妖雲を一掃し、然る後其局を結ばんことを期し、之が爲めには勢運の趨く所に従つて如何なる大事をも決行せんと欲し、且之が爲めには共に身命を擲ちて藩主の爲めに盡さんことを希圖せしなり。然るに、閑叟の意は全く之れに異り、寧ろ一時の彌縫策を取りて幕府と朝廷とを調和し、其交渉を圓滑ならしめんことを圖れり。即ち獨斷的の運動を好むと同時に少壯活潑の徒を放ちて京關の間に奔走せしむることは、却て事

余等の企望復た失つ

に害ありと思惟したるもの、ごとし。是に於て余等は又復失望の地位に立つに至れり。

既にして長州征伐の事起りたり。是を聞て余等は熱心に我藩に説きて「長州征伐は是幕府が自ら好んで内亂の端を啓くものなり。今は夫れ如何なる時ぞ、舉國一致の力を以て外難に當るべき時にあらずや、然るに、自己の忿恚を擅まゝにし、長州を征伐して内亂の端を啓かば、是自ら我國を忘るゝを表明する者なり。然らずんば何ぞ姑く其小過失を寛恕して共に天下の大事を經營せざる。察するに、幕府は諸強藩を剪除する内心あり。既に長州を撃ちたる後は、必ず轉じて薩州に向ひ、而して更らに我佐賀に及ばんも料り知るべからず。今は幕府が我藩を優待するが如くなれども、其内心に於ては忘む所なきに非ざればなり。されば今の我藩は、幕府と長州との間に立ちて、此和解を爲すに便利なる地位にあるを以て、宜く幕府に説きて其兵を收めしむべきなり」と説きたり。

長州征伐に對する意見運動

此長州に對する事件については、大木等最も能く力を致せり。是より先き英佛同盟軍の馬關に來らんとするに際し、木戸は佐賀に來り、大木等に會して「長州は愈々外人に向て戰端を開くに決したり。若し事の危急に及ばば君等幸に一臂の力を假す所あれ」と請ひしにより、少壯客氣の士の常として、大木は匆卒に藩力を舉げて助けんとの旨を答へたり。當時佐賀藩の事情は到底其言のごとく履行する能はざりしも、余等は同志の言を水泡に屬せしむるを欲せず、熱心に其實を舉げしめ



んと運動したれども、遂に其意を遂ぐるを得ず、大木は却て其爲めに譴責を蒙れり。斯くの如き事情の末なるを以て今回長州征伐に對する余等の意見も亦彼等の採用する所とならずして止みにき其頃、江藤は京師へ脱走の末に佐賀に歸りたり。彼は京師にて非常に其力を盡したるに相違なきも、畢竟、獨力に過ぎざれば、固より較著たる功を奏する能はず、空しく歸來したるなり。因て藩より嚴刑に處せらるべかりしも、復閑叟の寛容救護に依て、其生命を全うするを得たり。此の如く余等同志は言ふべきことを言ひ、爲すべきことを爲し、時には隱密の運動を爲し、中には多少の權謀術策を弄し、甚だしきは「よし全藩の力を舉げて中原に馳驅を試みん、其事の紛雜を加へて亂世を現出するならば寧ろ之れを幸機として

企畫著々  
失敗に歸す

皇室を擁し奉り、代つて天下に覇たるの目的を達すべし」とまで極論して、藩吏等を煽動する所ありしも、着々失敗に歸して其効果を收むること能はざりき。

かゝる折柄又蝦夷問題は志士の頭腦に上りぬ。是より先きに島、犬塚の二人は蝦夷探檢の爲め相携へて出發せしに、犬塚は途上病に罹りて目的を達する能はず。島一人にて他の同志を率ゐ、彼地に赴くこと爲れり。犬塚は藩中有名の漢學者にして、其見識濶大、些も他の頑狹なる通常の漢學者の氣習なし。水戸學者に數多の知人を有し、又其反對に立てる佐久間等との交際も淺からず。余等の先輩中にて一箇の人傑たるを失はざりし。彼は其頃に至り、洋學をなすの必要を覺り、晩

年ながらも余等の中に交りて共に英書の研究を爲せり。時に余は二十餘にして、年齒に於ては彼の後進者なれども、英學に於ては彼よりも先輩者なるを以て、時々、其求めに従つて之を傳授したることありし。然る故を以て、余は彼より種々實際上の説話を聽て、爲めに自ら利益するを得たること少なからざりし。

却説も島が蝦夷より歸りて、其探檢したる事實を報道し「蝦夷は我北門の鎖鑰にして露西亞の此を窺ふ久し。今の時に及んで、速に其經營を爲すなくんば、遂に千歲回復すべからざる禍を遣さんも知るべからず。故に余等は先づ進んで其開拓を爲すべし。徒らに手を束ねて、露西亞の侵來を待たんよりは、我より奮つてサイベリアに向うて露西亞の羽翼を殺ぐに如かず」との論を熱心に主張せるや、時を得ざる余等同志の心目は、俄に蝦夷の上に注ぐに至れり。或は數十の同志相携へて其開拓に従事せんと請願するものあり、或は佐賀藩は小局地なれば更に大雄飛の地を畫せんと言ふものあり。或は蝦夷を以て直ちに我領土と爲すは稍々不安全の念なきに非ず、先づ南部に換地を爲し是れより徐ろに手を蝦夷に伸ばすべしと獻議するものもあり。閑叟戯にいひしや否やを知らざれども「南部ならば換地爲してもよろし」と言ひしと聞く。

要するに、是等の議論は、當時に在ては一の空論に過ぎず。藩吏等より見る時は、粗暴の議とも、迂遠の論とも稱すべき者なるべし。されど余等同志を驅りて是等の議論を爲す境遇に陥らしめた

余等の心  
目蝦夷の  
上に注ぐ



暇夷問題  
の餘波能  
く藩政の  
病根を治  
す

る其責は藩吏等與り知らずと言ふを得ざるなり。余等同志は凡て意見を述べ盡し、凡て運動を爲し盡し其極遂に茲に至りたるのみ。不平と失意との餘に、心ならずもかゝる度を失ひたる議論を主張するに至りたるのみ。但し是等の議論は格別の價值もなく、又格別の効果もなかりしと雖も、其餘波は藩政の病根を刺衝して治療を與へたる功は鮮少ならずと思ふなり。

余等同志中の一奇を、楠田英世といふ。彼は余の先輩にして、學識あり、才力あり、夙に藩政の非を慨嘆し、屢々執政若くは君側の勢力あるものに向ひ激烈なる建言を爲したれども用ゐられず、其意甚だ快々たり。或る日、侍臣の直大の爲めに經書を講ずる時に、彼も末席に列せしが、講義中に突然質疑を起し、言を其端に托して次第に純然たる時勢論を論陳し、講義所は遽に辯難攻撃の場所に變せんとせしことありし、其結果として彼は君側より却けらるゝに至れり、蓋し彼は初め閑叟に侍し直大に及びたるものなり。閑叟は一旦任用したる者は容易に却くることなかりしに、彼の性質甚だ疎蒙にして、何れの時、何れの場合を問はず、かゝる言動を爲すこと多かりしを以て、閑叟も幼主の爲めに不利ならんと思ひ、斷然と彼を廢黜するに至りしものなるべし。

閑叟敏腕  
を振ふべ  
き一大好  
機

兎も角も長州征伐は、閑叟が天下に對して其敏腕を振ふの一大好機なりし。彼時に於て、内亂の端を開くは、實に國家の存亡を顧みざるの處置にして、幕府も亦甚だ自から危ぶむ所ありしなり。抑幕府覆滅の近因は長州征伐にあり。此舉に因て彼は其暴威を用ゐる力なき事實を天下に表白し

閑叟好機  
會を逸す

閑叟余等  
の勸誘に  
從はざる  
情由

たり。左れば、幕府等も此舉を爲さんとするに當ては甚だ躊躇する所ありしなり。社會の輿論は之れを是認せず、殊に佐賀藩の同志は激しく之に反對し、幕府は國家に對して不誠實なるものなりと爲せり。幕府は英佛等の軍艦を雇うて、長州を討滅せんと圖りしものなりと言ひ、今回の舉は名を不敬の罪を糾すに託すれども、實は私怨に由て長州を亡ぼさんとするに過ぎず、長州の冤は宜しく憐みて救はざる可からず」と絶叫せし等、少しく其事實を誤りたるなきにあらざれども、斯くの如きは、佐賀藩同志の議論に止まらず、當時天下の多數を占めたる攘夷黨の一般に唱道したる所なり。故に苟も閑叟にして起ち其間に和解を試みる所あらしめば、天下の多數は先づ彼の所爲を稱賛したるべし、幕府は固り此舉に躊躇せしことなれば、必ず其説を容れ戦はざるに先だち、長州を寛容するに至りしならん。是に於て其間に一步を進め、志士胸中の一問題たる薩長の軋轢を融和し、相提携して社會改革の途に上りたらば、其成就せし所は頗る多くして、彼の名譽と光榮とは今に比すれば倍蓰したるならん。假令其結果は盡く其目的を達するに至らざるとも、又た一旦の合同を遂げて破裂の不幸を免がれざるとも、彼が天下に向つて信義を發揚したる跡は決して消滅することなく、數多有爲の志士をして彼に向つて更に數層の望を屬せしむるに至りたるや疑ひなし。然るに彼は遂に茲に出でざりけり。

彼は本來、其所見に於て誠實なりし人なり。當時其意見は已に長州と相合はざりし。蓋し長州は

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



絶對的に攘夷を主張せり、而して彼の意見は之れに反對したり。彼は始めより世の謂ゆる頑固なる攘夷家と異なり、事實に従つて判断を爲すの明ありしを以て、今は寧ろ開港説の是なるを承認したり。されど思ふに、彼も少くは時勢の紛亂に惑ひたる所もあらん。彼れ其所見は、實際斯くの如くなるに拘はらず、天下の多數は反對の意見を持し、畢竟行ふべからざる攘夷説を固執して囂々たり。而して此議論、否此感情は勤王黨と佐幕黨との分るゝ重因となりたり。彼既に其所見に誠實なるを以て、己れの所見を曲げて多數の甘心を買ふ所爲はなすを欲せず。さりて又強ひて其多數の所説を排して、己れの意見を決行する機力は已に衰へたり、是彼が余等同志の熱心なる勧誘に従はざりし所以なり。

然りと雖も其は攘夷と開港との議論相乖けるのみ。其見解の點を異にすればとて、天下の一大禍機の現に爆發せんとするに際しながら、猶堅坐して其調和を圖るを欲せざるは、竟に狹隘の考慮といふを免かれず。即ち狹隘の考慮を免かれざるも、諸事、感情に因て離合するの社會なれば、止むを得ざるの事と恕すべきか。

失望の極  
は一轉し  
て英學を  
研究す

嗚呼、余等同志の失望は今や其極に達せり。翻て天下の形勢を察すれば、歳月を紛々擾々の間に送りつゝ、漸次に進歩發達する所あり。益々洋學を研究する必要を感せしを以て、余は此の失望の極より一轉して、専ら英學研究に従事するに至りぬ。志士の境遇よりは實に悲しむべきの至り

なりしも亦是歳月を利用するの一方法にてありしなり。

余等の意見としいへば、盡く排斥さるゝ中にも、長崎遊學、洋學研究の事のみは、幸に藩主の許容する所と爲りたるを以て、余は成るべく多くの同志と共に彼地に至らんことを欲し、種々遊説する所ありしも、愈々志を決して同行を諾せし者は僅々十數名に過ぎず。其中には今現存するものは副島種臣一人のみ、餘は盡く維新の前後に不歸の客と爲りたり。副島は枝吉の弟なれども性質同じからず、此時より既に一種の學者風を備へたり。彼は漢學に於ては、余等の先輩中に在りて夙に頭角を見はせる人にて、而して其説は獨立の判断より出しものと見え、當時の學者間に容れられず、時に異端を以て目せられたることあり。彼は又慎獨の君子にして朋友を求むることを爲さず。藩吏等とは固より相容れず、且江藤等の一派とも相善からず、爲すあらんと欲しても爲す能はざるの地位に立ちたりし。余は枝吉との交誼ありしのみならず、副島とも交際する久し、且彼が如き一方の學識に富みたるものと事を共にするは、多少衆議を排する手段と爲りて、同學生を増加するに至らんと思考したるを以て進んで先づ彼を説きたり。彼の年齢は余に長すること十歳なり、然も既に大成したる漢學者なり、又攘夷の臭味を帯びたる人なり、齡は已に壯年に達して相應の責任を帯ぶべき人なり、尋常の場合ならば必ず黃吻書生の價值なき言説として排斥したるべく、余も亦首肯せしむることは極めて難事ならんと豫測せしに、幸ひなる哉、彼が不遇の

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情

副島の資  
性



地位と其好學の意念とは、遂に驅りて其障礙を排して余の勸誘に従はしめたり。

斯くて、彼は専心に英學の講究を始め、初歩の文典讀本等を學び居たりしが、晚學者の常として漸く時日を経るに従ひ、順序を追ふことを好まず。一日余の寓所に來り、余の讀みつゝありし書籍を取て熟視し居たりしが、稍其大意を解したると見え「這是面白き書籍なり、將帥たらんと欲するものは讀まざるべからざるものなり」とて直ちに之を買ひ求めて、謂ゆる「字引と首引」を始めた。余は多少の廢絶もありたれど、已に三四年來英書を手にしたるを以て、是等の書を讀むに彼よりも容易なれども、彼は就學より僅に五六ヶ月を過したるのみなるに、余と同一に習了せんと存立しことなれば、其困難は實に一方ならざるべし。然れども、彼の堪能と熱心には一向に屈することなく、日々一ページ乃至二ページをば大概盡く字引にて討尋し、漢學者の例を以て朱にて文字の兩側に註釋若くば翻譯をなし、獨りほくく喜び居たる有様は、數十年後の今日まで猶髣髴として余の眼睛に影を消さざるを覺ゆ。

當時は長崎の最も繁榮を極めたる時にて、諸事の便宜に乏しからず。條約に依りて開きたる港は猶他に横濱と函館との二港あれども、横濱は江戸に近き故を以て、其警衛殊に嚴密に、且商人に非ざれば出入することを得ず。函館は蝦夷地なれば内地との關係に甚だ遠ざかりて、容易に往來すべくもあらず。獨長崎は斯くの如き事情なく、且久しき開港地なるを以て、各藩人士の往復頻

繁なるのみならず、外人との交通も亦甚だ便利なりし、是を以て、長崎は京師に次ぎて全國有志の輻湊する所となりたり。舟航の便利も比年に數層の進歩を爲し、各大藩は少くも一二艘の汽船を有し薩州、佐賀の如きは五六艘を有して各々江戸、横濱、大阪等に往復したるを以て、江戸の消息、各藩の事情を審にするを得。其上、各藩より購求する武器、彈藥、船舶等は多くは長崎に於て取引せしを以て、何れの藩は幾許の武器を買ひ込み、何れの藩は如何なる計畫を爲しつゝあるやをも知悉することを得たり。夫れのみならず、當時は已に毎月一回歐洲よりの便船ありしを以て、其便りに就て歐米各國の事情及び世界の大勢をも略ぼ聞知することを得たり。是を以て、余等は益々其の見聞を博くするを得、而して之と同時に佐賀なる同志と互に氣脈を通ずることを怠らざりし。佐賀と長崎との間は其距離三十里計り、船路に依れば一晝夜にして達すべし、故に同志は常に相往來し、且相通信し、事業企畫の上に非常の便利を與へたり。

されば、余等の心中に計畫したる事は頗る多端なりしも、英學研究は亦毫も怠ることなかりしかば、面々歲月と共に進歩して漸く其何物たるを解するに至りぬ。蓋し、學問は一步を進む毎に益々其滋味を解する深きものにて世の好學の徒が書に對すれば疲れを忘るゝも亦故なしとせず。余等も益々英學の滋味を解するに従ひ、愈々其有益なるを感じたり。其記する所は廣く且つ深く多く、實際的にして、殆ど人類の爲すべき事を網羅せざるなし。則ち歷史上、社會上、法律上、經



濟上の事は勿論、兵制、軍術、通商、貿易、航海、築造其他諸般の工藝に至るまで、盡く學理を以て整然たる規定を爲さざるなし。是に於て、余等は始めて曾て忽諾に付し來りしもの、却て人事の上に至大の關係を有したることを知り、以爲らく是れこそ活學なりと。

我國教育に遺憾の念を懐く

余等の此理を知ると同時に、我國現在の教育に對して益々遺憾の念を鬱興せり。以爲らく「漢學は是空理空論を旨とするものにて、固より以て活動社會の人材を養成するに足らず。番に之れを養成するに足らざるのみならず、却て有爲の材を無用の徒に變化せしむるものなり。見よ、現に儒者なるものは人類社會に如何の地歩を占むるものによ、彼等是一種の活字引にして唯不消化なる文學を胸中に貯へ、常に迷妄の夢を見るに過ぎず。政治上、社會上、實業上に於て寸毫の利益を發揮するとなく、又た一個の計畫を爲して其目的を達する方法を講ずるとなく、只迂濶の言辭を並べて自ら得たりと爲すのみ。其言說方針は固より以て人生處世の大道を指示するに足らざるなり。故に目下の急務は、將來爲すあらんとするの青年をして漢學を止めて英學を學ばしむるに在り。偏僻頑迷の思想を打破して天高く地厚きの實相を知らしむるに在り。彼等にして此途に由りて漸く進行せんか、我國の將來は兵事にまれ、政事にまれ、教育にまれ、將た商工業にまれ、必ず能く改革の成果を收むるを得べき也」と。是に於て、余等は曩に長崎に設立したる致遠館てふ英學校の規模を擴張し、佐賀藩の子弟は勿論、他藩の有志をも集めて相共に同窓の交誼を分かち、

目下の急務は漢學を止めて英學を學ばしむるに在り

商人と結託せんことを

將來同一の方針に依りて改革の衝に當らんと欲し、因て數々藩廳に請願する所ありしも、藩吏等は是にも反對の意見を懷きたるを以て、肯て之れに應せず。已むを得ず一時各自の資金を擲ちて其擴張に充てたれども、固より限りある金額なれば余等の志を満たすに足らず。余等は之に向て種々の手段方法を講究したる中に、長崎へは諸藩より有志者、商人等多く出入するを以て、是等の人々を叩きて以て圖る所あらんと存立せり。余等の是まで交際したる人々は其數少なからざりしも、多くは皆學生吏員等に止り、商人の如きは毫も相識る者なかりき。思へば必要は人を意外の方位に導くものにして、何れの處にか資金を得て學校を盛大にせんとの志は、余等をして商人等と交際を結ぶに至らしめたり。是れ實に意外の事と謂はざる可からず。願れば其比、一般の士人は商賣を賤み、金錢を賤しむこと甚だしく、商人と膝を接して事を談ずる事などは夢にだも思想せざりしなり。只、余等が已に英書に熟し、且多少外國の事情を知りたるを以て、此觀念は頗る消散したるも、尋常の場合に於ては、猶依然と習慣の爲めに支配せられ、身を挺して彼等と交を結ぶことを爲し得ざりしならん。然るに能く之を爲すに至りしは、全く志の爲めに驅られたるなり。

斯くて、余等は商人の間に交を容るゝ温かなるに従ひ、漸く商人の氣質を知るを得たり。固より其多數は營利にのみ汲々として、共に國事を談ずるに足らざれども、中には活潑なるものあり、

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



多少の智識を具へて公共的の事業に注目し、且義侠心に富むものなきにあらず。是を以て、余等は彼等の爲に相應の力を致し、且彼等に依て以て學校を擴張し、同志者を養ふの道を講せんと欲したり。然るに彼等の中には、余等の勸誘に應じたるもの亦た少なからず。

余が盛んに富國策を唱道したるは、即ち、此時の事にして、一は以て藩廳を動かし、一は以て是等商人の爲に裨益を圖らんと欲したるなり。富國策に關したる余の所説は、今日よりして之を見れば、三尺の童子も能く知悉する所なりと雖も、當時に在りては卓見として迎へられ、頗る人心を動かすに足るものありしなり。而して一般社會の形勢も漸次に余の説に傾き、人々皆な財貨に乏しきを感じるに至りしかば、流石頑愎の藩吏等も多少余の説を採用して、之を實施すること、爲り、且一方には佐賀に於ける商人の注意を惹き、漸く之と交際の道を開くを得たり。

商人との交際は、其事固より小にして、且維新後の天地に在りては毫も注目するに足らずと雖も、當時社會の階級を嚴存して、士人と平民とは主人と奴隸との如き關係を有し、「武士の面目を立る爲には斬り棄も御免」といふが如き舊弊の未だ除き去られざるの時に際して、士人の家に生れながら自ら奮つて彼等と提携せんと圖りしは、本は必要に迫られしに由るといへども、抑も亦た異常の事として批判せざる可からず。否な、社會變革の上に於て記憶すべき一事件なりと言はざる可からず。這は自賛に似たりと雖も、斯くの如き點には、世人の注意を受くる甚だ冷淡なるを以て、

商人中余  
の勸誘  
に應じし  
ものあり

社會變革  
の上記憶す  
べき事件

敢て自ら點染しおくなり。

余等は商人等と交際する愈々深く且廣きに従つて新知識を得ること少からざりしと同時に、商人等も亦依りて裨益を得たる所の頗る多かりしが如し。是よりして、始めは多少余等の言説に疑惑を懷きて躊躇する所ありし商人等も、漸次に其過大誇張にあらざるを覺り、余等に向つて稍々望を囑するに至れり。殊に其外國商人と交通するに及んでは、心胸頗る濶大に赴き、商機を見ること鋭敏に、物品に處すること活潑に、約束を守ること嚴正にして、時間を貴ぶこと甚しき等は、彼等を感じ刺撃する所ありたるもの、如し。

井中の蛙が漸く江湖の水に游泳するに及んで、彼等は其水の増減は雷に一局部に於てするにあらずして、潮汐の關係、降雨の多少に由て其量を制せらるゝものなるを知れり。故に眞正なる商業家と爲りて巨利を博し、且國家を利益せんには、必ず天下大勢の向ふ所を知らざるべからざるの點に喫着せり。是を以て彼等は余等の言説を以て時宜に適ふものと爲し、其思想は漸く變じて時勢を趁ふの傾を生じたり。其中には、英語を研究するの必要を感じて余等の學校に入らんことを計請ふの青年あり、或は支那人と交際を爲せしにより私かに上海邊に至りて商業を爲さんことを計るものあり、或は外人に對して密賣買を爲し、以て奇利を博せんと企つるものもありき。法律を犯して密賣買を爲さんとするが如きは、不正の所爲たるを免れずと雖も、一利を擧げんと

商人余等  
の言説を  
賛す



商人社會の元氣大に發揚す

すれば一害の伴ふことなきを得ず。特に余等は幕府に反對し、幕府の法令を蔑視するに慣れたるものなれば、夫れ等の事は寧ろ名譽となして稱揚するに至りしなり。幕府の刑律は、密賣買を死罪に處せしにも拘はらず、自ら好んで之れを犯すに至りたるは時運の然らしむる所なりとはいへど、抑亦人情の奇異なるを見るべきにあらずや。或時、薩州の商人、佐賀の商人と連合して共に密賣買を爲したりしに、忽ち幕府の探知する所と爲りて將さに捕へられんとして、唯一人を除くの外は纔に逃れ去りて其踪跡を沒滅したれど、其捕へられたる一人も、幕府の末路にて法令行はれず、幕吏等は藩の鼻息を候うて事を處理するの時なりしかば、遂に金力を以て救出することを得たり。されば商人社會の元氣も大に發揚し、冒險的の事業を營まんと競ひ、因て多少、余等の志業に向つて援助を爲すに至れり。

此頃の事なりき、同志中の二人は長崎に於て學ぶを足れりとせず、曾て歐米諸國を巡回したる人の談話に刺衝せられ、自ら歐洲に赴きて學問を大成し、且各國の實況を視察して他日の用に供せんとの念を起し、豫て相知れる外國商人に依りて帆船に便乗し長崎を脱して英國に至れり。其一人は石丸安世とて今尙ほ存命すれど、他の一人は不幸にして明治十六年に於て異郷の客となりぬ。

當時、余等書生の考慮は粗大にして實情に通せざるもの多かりし。余等は商業を以て非常に利益

商業商人に對する余等の考慮

あるものと誤認し、往々にして「ぬれ手に粟を攫む」如きものあるべしと思へり。左れば、長崎豪商は孰れも必ず數十萬の富を有するなるべし、然るに何故に余等の爲めに否な國家の爲めに僅々數千金を擲つを惜しむやと怪み、以て是を頑冥暗愚是非輕重を辨せざるものと爲したり。然し是れは實に誤想なりし。蓋し、彼等の多くは單に物品の運轉者たるに過ぎず、故に、其手に入るの金銀は巨額なりといへども、實は直に手を離れ出で去るものなるのみならず、假令、商人自ら許多の金銀を有するとも、概ね是を種々の事業に運轉しつゝあるものなれば、其中より數千金にせよ。若しくは數百金にせよ、之を割與することは甚だ困難の事にして、尋常の商人は到底能くし得べき事にあらず。今にして之を思へば、彼等は比較的能く金銀を割與したるものなり。ざるを其當時の余等は、己れの希望を充たすに足らざりしを以て、少しく彼等の無情を怨みたれども、稍々、其實情を知るに及んで、却て余等の非理なるを悟りたり。是に於て余等は彼等のために巨利を得るの道を指示せんと企てたり。蓋し、余等の指示に依りて得たる利益は、彼等必ず喜んで之れを分配すべしと信じたればなり。只余等は誰も其道に經驗なきを以て、固より其の收利の確實を保する能はざれども、其指示したる事は決して妄漫ならざりし。余等は彼等に對して遠く他方に出で、商業を營めば必らず巨利を博すべきを説き、「今江戸、長崎、函館間の物價表を取りて閱すれば、其相違の甚しき實に驚くべき程なり。左れば長崎の物品を積み出して、之を大阪江戸若

商人に對する巨利を博すの道なきを説く

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



くは函館等に送り、商機を計りて其賣買を爲さば、其利益は必ず居ながらの貿易に比して倍蓰するものあるべし。若し夫れ、其力の許すに従ひ、支那、印度等に向はゞ更に巨大の利益を占むるを得ん」といひたり。

船の由ての商賣を爲さんか勸む

余が第一着に是等の商人に向ひ謂ゆる「船に由ての商賣」を爲さんことを勧めたる地は大阪にあらで江戸なりし。蓋し、關東は比年不穩にして米價大に騰貴し、一般の人民は其爲めに非常に困頓したるに、關西は之れに反して年頻りに登り、人皆米價の下落を嘆ずるの時なりしを以て、余等は此機を利用して關西の餘米を以て江戸に輸送し、他の便利を圖るの間に巨利を博すべしと思量したり。從來、九州の物品を江戸に送るには、必ず大阪人の手を經たれば、米穀の如きは概ね大阪に止まりて其以東に及ばず、江戸は關東奥羽の田野よりして其供給を仰ぎしものなり。是を以て、尋常の場合には、斯かる重荷を九州より江戸に送りて其利を得ることは頗る難事なりけれども、當時の如く彼地は痛く飢饉を告げて此地は豊作つゞきし時に在りては、收支上に大利益のあるの事業にてありしなり。

事物に對する經驗を達する手

幸に佐賀の豪商某は余の説を容れ、數艘の巨船を購し、米穀を積んで江戸に輸送することゝ爲せり。余等は此時に於て始めて、事物に對する經驗の甚だ貴重にして、目的を達する手續の甚だ必要なることを知りたり。座して圖れば固より巨大の利あるに相違なし、其實際の結果は全く之れ

に反したる經驗を得たり。航海は意外に遷延したり、漸くにして江戸に達すれば賣捌の途なきに窮したり。商品の取引は其物質に由て各々互に連絡を保つものにて、百川の一河に合て大洋に注ぐが如く、各地より運ぶ物品は一度仲買問屋の手に渡るに非ざれば、之を市内に散布するを得ざるなり。今日となりてこそ各仲買等も競うて遺利を擧ぐるに注意すれども當時に在ては至つて優然たるものにて、苟も從來己の手に向つて注入したる諸國の取引人を除くの外は、自ら進んで他に擴張する策を執るものはなかりし。問屋の地位のみ斯くの如くなりしのみならず、各地よりの荷主も、亦從來提携し來りたるもの、外は、勉めて之を排斥し去らんと欲したり。特に新荷主にして、他より數層廉價なる物品を有する場合に於ては、彼等は直ちに相連合し全力を擧げて其の販路を妨害することを躊躇せざりし。

余等の勸誘に從ひし豪商の失敗

佐賀の豪商某は之が爲めに幾多の妨害を蒙りたり。其の輸送したる物品は、米穀の外には酒なりしが、酒に就きては更に失敗したり。其は九州にて製造する酒は、固より其味を池田、伊丹等の銘酒に比し得べきに非らず。江戸人は窮したりと雖も、猶都人士を以て自から高ぶる。殊に飲酒家は、時の不景氣を酔後の鼻唄に歌うて、其不平と苦痛とを漏らし去らんと欲する者なり。一言以て之を蔽はゞ「武士は喰はねど高楊枝」の虚傲を脱せざるに、如何んぞ價賤ければとて彼に代ふるに此を以てするの卑屈をなさん。夫れ然り故に其の販路を見出す能はず、幾多の時日を徒消し、



幾多の費用を空糜したる後に、已むを得ず、非常の廉價に投げ賣するに至りたれば、其の收支は無論相償ふを得ず。只米の需用者は飲酒者と異なり、成るべくは廉價の米を得て生命を繋ぐと欲する場合にして、關東米と關西米とは其價格に於て非常の差異あるを以て、漸次に其販路の開くるに従ひ、之を需用するもの頗る多く、遂に多少の利益を獲たりと雖も、之を全體に通じて打算すれば、豫期の如き利益は固より獲る能はざりしのみならず、時日の徒消と勞力の空糜と冒險の辛苦とは寧ろ彼をして、損失を蒙らしめたるものにして余等の企業畫策もさして効果を奏する能はざりしなり

江戸の商業は然り、佐賀と函館との商業は、實に今日に始まりしにあらず。彼島義勇等が蝦夷を探檢したる結果は、只一派の藩士をして危激の言論を爲す材料たらしめたるに過ぎざるの觀ありしと雖も、其實は大に然らず。佐賀は之れが爲めに氣力を生じて、爾後は年々其勢力を蝦夷開拓に及ぼし、且函館に對する商業に於ても少からざる利益を占むるを得たり。當時、幕府も蝦夷に向つては頗る注意する所ありて、其警備を嚴にせんと欲せし時なるを以て、佐賀藩士の所爲に關しては寧ろ保護を與へて、相共に開拓を遂げんとするの意ありし。因て余等の同志并に冒險的の商人等彼地に往復するもの少なからず、従つて夙に其主要の産物は、昆布なることを知り、之を採集する場所を占有するは第一の利益なりと思へり。蓋し、昆布は九州に於て需用頗る盛なるの

佐賀と函館の商業

北海に植昆布採集に従事す

みならず、日本全國到る所として之れを用ゐざるはなく、餘りあれば之を支那に輸出しても猶能く十分の利益を得るに足る。是に於て、佐賀藩は其東海岸に於ける釧路邊一帶の地の拂下を求め、此に植民して盛んに昆布類の採集に従事することゝ爲れり。是がために佐賀の商人は函館近傍に出入し、傍らに九州の物品を彼地に賣却するを得て、其利得は少なからず、従つて其商人等は漸次に富豪に赴き、中には一人にて千石以上の船十五六艘を有し、絶えず佐賀と函館との間に往復するものあるに至りたり。

當時蝦夷に移住したるもの、中には、或は多少の財産を儲へて彼地に土着したるものあり、或は失敗して空しく佐賀に歸りたるものあり、榮枯は一ならざりしと雖も、兎も角も、北海には佐賀の移民は少なからず。現に釧路には今に尙ほ移住民の戸口を存し、函館にて武富等が子孫の繁榮するものあり。

航海術の漸く開くるに従ひ、從來の和船は構造不完全にして風波に堪へず、長途の航海に甚だ危険なるを感せしを以て、西洋形帆船に代ふべしとの説起れり。藩廳も其説を賛して、先づ自ら五六艘の帆前船を買ひ求めしより、商人等も漸次に之れに倣うて風波の險難を避くる道を講ずるに至れり。

商業商船の談は姑く舍き、余等が商人を憐愍しても遠く江戸と有無相通せしめ、因て收めたる巨

商船を西洋帆船に代ふ説



利の幾分を割かせて以て英學校を盛にし同志を養ふ目的を達せんと圖りたる結果も亦失敗を免れずして「噫我道茲に窮りぬ」との嘆を爲さしむるに至れり。只夫れ、茲に窮りたるが如くにして、忽ち又他に其道の存するは世途の常なり、苟も時のあらん限り、人のあらん限りは、道の窮るといふ理はなきものなり。

果して自然の趨勢は余等に向つて更に一機會を與へたり。其は他なし、長州征伐に因て馬關の交通を遮斷したることは是なり。馬關は關西に於ける樞要の港灣にして九州と北國并に蝦夷との貨物の往來は必らず此を經由して大阪に至る關門たり。然るに、征長の事起り、長州は戰艦を整へて咽喉を扼するに至りければ、京攝地方の穀類は俄に非常の騰貴をなし、九州の穀類は、頓に販路を失うて大に價格を下落したり。是れ實に失ふ可からざる好機會なれば、余等は即ち之を利用して九州の米穀を大阪に回漕せんと圖りたり。大阪は江戸と異りて、年來佐賀の取引向も少なからざれば、其販路に困む慮りはなかるべく、此回こそは十分に利益を收め得べしと料れり。長州より馬關を遮斷したるは、余等の同志にて彼藩の人と相識れるものより、豫め一封書を致さば、彼等は固より不法の舉には出でざる可し、必ず容易に通過して大阪に到着し、忽ち巨利を獲歸りて余等年來の希望を充たすを得んと期したり。是に於て余等は之を商人に説きしに、彼等は皆巨多の米穀を所持して其の處分に困窮せし時なれば、直ちに喜んで之に應じ、苟も此事にして成功せば、其利益を分割して、必ず余等の目的に供すべしと約せり。因て、余等は船舶の準備と航路の手續とを整へ、數艘の船の一萬俵の米を積みて大阪に向つて出發する準備を畢れり。將さに船の錨を抜かんとする時、藩の監察は此瞬間に於て俄に出帆差止の命を傳へたり。蓋し余等の意を誤解し、米を積んで馬關に向ふは、長州を助けて幕府に抗するの資に充てんとするなり、商人等は余の詭計に陥りて若干の米を損失せんとすとの想像を爲し、先づ商人を説諭し、遂には強迫するに至りたるを以て、商人等大に驚愕して、事全く破れに終れり。

長州征伐に因て馬關の交通を遮斷したるは、余等の同志にて彼藩の人と相識れるものより、豫め一封書を致さば、彼等は固より不法の舉には出でざる可し、必ず容易に通過して大阪に到着し、忽ち巨利を獲歸りて余等年來の希望を充たすを得んと期したり。

米穀回漕の際に差止められたる

山口尙芳は余等と共に長崎に在りて英學の研究に従事してありしが、彼は幼少よりして執政鍋島上總の親愛する所と爲り、其恩遇を受けたると少からざりしを以て、余等は先づ山口をして上總に説かしめ、藩吏等の誤解を指摘して、飽く迄も米穀回漕の目的を達せんと計れり。山口は其意を領し、自ら佐賀に赴き、上總に謁して熱心に藩吏等の誤解を辯じ、且趣旨の存する所を明示して、其援助を假らんとを求めしに、上總は正直にして慷慨なる人なれば、山口の説を聽きて事實の存する所を知り、甚だ憤慨して藩吏等の所爲を非難し、告ぐるに余等の爲めに力を盡すべきことを以てせり。

是に於て、山口も使命の要を得たるを喜び、歸り來りて余等に談判の顛末を告げ、且上總は門閥



佐賀商人の地位

家、有力家なれば、必ず其目的を達すべしと豫言し、相共に之を慶したりしに、全く反對の結果を見たり。蓋し、藩主閑叟は已に數々述べたるごとく、諸事獨斷を以て處理する風ありて、其一且決行したることは容易に動かすことなきの氣質なるを以て、上總も其理否の存する所を知りながら、遂に之を如何ともする能はざりしなり。

田中善右衛門

顧みて佐賀商人の地位は如何といふに、是を全體の上より觀察すれば、疑もなく天下に率先して通商航海の業を開發せしものと謂ふに躊躇せず。薩州の如きも、夙に此點に注目して、其道を擴張せんと勉めざるにはあらざるも、之を佐賀商人の北海に、江戸に、大阪に到處に物品を回漕して、盛んに商業を營みたるに比すれば、恐くは一步を譲る所あるべし。

其然りし所以は、領内に長崎の開港場を控へて外人と交通し、其航海貿易の實況を觀察して、爲めに刺衝せられたるに由るは固より言を待たざれども、之れを實地に舉行するに於て尤も力を盡したるものは田中善右衛門なりとす。彼は余の先輩と言はんよりは、寧ろ余が父執にして、一藩の重望を負ひ、又閑叟の爲めに最も信用せられたり。其風采は他の藩吏と同じからず、資性理財に長ず。是を以て、藩の會計を司り、且閑叟の盛時に於て外交の任に當りしを以て、頗る幕府及び諸藩の事情に通じ、其名は廣く當時の有志間に知られたり。其唱道に係る海防策の如き、將た理財策の如き、みな見るべきもの少しとせず。若し閑叟にして永く當時の英氣を持続し、彼亦

蝦夷探檢の勢も田中の力多し

た其地位を保持したらんには、彼は益々其材幹を逞うし、長州の長井等に比して寧ろ勝るあるの履歷を留めしやも未だ知るべからず。

田中の風を奮起せし商人

田中の風を望んで奮起したる有爲の商人を擧ぐれば、野中某、深川某、武富及び水町某等なり。野中は性質穎敏にしてよく商界の樞機を捉ふるの技倆あり。深川は家に相應の財産を有し、又能く事に當る材幹あり。共に自ら外國に赴きて専ら貿易に従事せしに、野中は不幸にして病を獲て佛國に客死せり。武富、水町等は孰れも田中の企畫に従つて動く所あり、就中、水町の膽氣は、頗る剛勇にして且義氣に富み、同志の爲めに力を盡すこと少なからざりしが、是も亦た壯年にして病死したり。



外國に赴き貿易に從事する者

當時に於て身を挺し外國に赴き、貿易に從事することは、實に容易ならぬ業にてありしなり。然るに彼二三子は率先して之をなす。若し人ありて我國の貿易歴史を編するならば、彼等は其史上に較著たる地位を占むるものなるべし。昊天何ぞ無情なる、是等有爲の人材を早く奪うて我佐賀藩に不幸を重ねしめしぞ。然りと雖も、佐賀の商人は彼等の所爲に感激して奮起したるもの少なからず、冒險の氣象は翕然として起り、其見識は一層の開濶を加ふるに至りたれば、彼等も亦以て地下に瞑すべきか。

商人は藩吏の側に近づく

是よりして彼商人等は藩吏の側よりは寧ろ余等の側に近づくに至りたり。然るに、藩吏等は常に之に對して妨害を試みる事甚だしかりしを以て、余等が彼等に結托して巨利を博し、以て學校を擴張し、同志の便益を圖らんとしたる、直接の目的は失敗に歸したれども、之れが爲めに自他の智識を増し、將來一般の人衆と相提携するの道に向ひては、少なからざる經驗を得たり。是余等が商人と交際したる間接の利益と爲すべし。商人交際の談は此に止めん。

余をして更らに佐賀藩に於ける醫師の地位を語らしめよ。彼等は其醫術の上に於て天下に先鞭を着けたるに止まらず、佐賀藩の人材、否、寧ろ我帝國の人材を養成する上に於ても莫大の裨益を與へたるものなり。大石良英の如きは名醫を以て稱せられ、實に大村益次郎及び澁谷某の教師たり、余の蘭學を學ぶは其澁谷に就て受けしなり。佐野常民も元は醫學に從事せしものなるが、蘭

佐賀藩に於ける醫師の地位

學を修むるに従つて益々識見を廣むると同時に、時勢の必要に催されて遂に其歩を政治界に轉ずるに至りしなり。當時、醫學研究の目的を以て余等と共に長崎に在留せしもの凡そ十餘人、其中には藩主の信任を受けたるもの少なからず。相良某は曾てドクトルボードウキンに就て醫術を學び、卒業したる後、拔擢せられて藩主の侍醫と爲りたるが、其時勢に對する見解の余等と相等しきを以て、互に數々往復して談合する所ありたり。彼は醫學社會に最も功勞ありし人にして、今の橋本、池田等が長崎に留學の際には、實に醫學學校の教頭にてありしなり。我帝國に於て醫學をば蘭科より獨逸主義に變じたるは、全く相良の力に依るものにして、長崎の醫學學校は彼の建議に基きて設立せられたるものなり。彼が君側に侍するが爲めに、數々佐賀に往復せしを以て、其度々に余等の意思を閑叟に傳へ、且閑叟の意思を余等に傳ふる媒介を爲したり。

醫師相良某

只閑叟は年漸く老いて、諸事保守の方針を執るに従ひ、醫師をして國事を談せしむることを喜ばず、彼に諭すに純ら其業務に従事すべきを以てし、且副島大隈等の一派と事を共にす可からざることを告げたりとぞ。閑叟の之をいひしは、必ずしも余等の所爲を咎めたるにあらず、又反對の意見を抱くものを禁遏せんと欲したるにもあらず。故に余等に對しては一言の誠令する所もなく、殆ど爲さんと欲する所に放任して、少しも顧る所なかりしなり。

其後、相良は其志の世と違ふものありしにや、醫術にて世を渡ることを止め、今は東京に在りて



藩制中最も見るべきは、實に醫術に關するもの

殆ど隱遁的に歲月を送りつゝあり。且、彼は支那古代の學問に依て日を消受せんとて、副島等と頻に往復しつゝありと聞く。往年彼の門下に遊びし橋本池田等は彼の爲めに配慮する所あり、貴族院議員に勅任の榮を得せしめんとしたれども當局者中に彼を知るもの少なく、爲めに其事を果すに至らざりしとなん。兎まれ角まれ、我藩制中最も見るべきものは、實に醫術に關することなり。即ち彼のペルリの未だ來らざる前に、早く天下に率先して其研究に従事し、嘉永三年、西洋主義を以て醫學校を設立し、同四年より五ヶ年の期限を以て解剖、藥劑、病理、科學等を教へ、其卒業の後に於て開業免狀を與へ、其免狀を得たるものに非れば診察製藥を爲す能はざること、爲せり。是實に非常の改革にてありしなり。

全藩に令して種痘を行はしむる

閑叟は又令を全藩に傳へて種痘を行はしめたり。此事を施行するに就きては愚民等の應ずるもの少なかるべきに、閑叟は先づ長子(直大)と末弟とに種痘をなさしめ、其種を取りて之を全藩に傳へしめたるを以て、藩主の命令といひ、若殿に習へとのとなれば、忌嫌ふものなきのみか、人々感泣して之に従へり。恰も其比天然痘流行したれど、全藩は爲めに天然痘の憂を免かるゝを得たり。回顧すれば、今より四十年前の往時に於て、此英斷を爲したるもの、獨閑叟あるのみ、獨佐賀藩あるのみ。特舉して稱揚すべき事にあらずや。

安政の末に至り、醫學校の外に更に一大病院を設立せり。醫學校は初め五ヶ年を以て期限と爲し、

洋風の醫術を學ぶもの多きを加ふ

滿期に及んで廢止する豫定なりしも、其期限間に養成したる僅々の醫師を以て、千を以て數ふべき舊來の醫者に代へんは、到底需用と供給とを一致せしむる能はず、竟に民人に容易ならざる不幸を蒙らしむるの恐れありとて、更に其期限を延ばして、數多の子弟を養成することゝ爲したり。而して其學校を卒業して開業免狀を得たる者にあらざれば、醫業を營む能はざる嚴令を出せしにより、佐賀藩は一時醫師の不足を感じ、地方の如きは時に困難する處もありたれど、閑叟は措て之を顧みず、舊來の漢法醫は曾て侍醫の地位に在りし者までも其業を停止せし程なるを以て、一面には洋風の醫術を學ぶもの漸くに多きを加へ、殆ど他に比類なきの勢を以て發達進歩することを得たり。今日より見れば、其術の幼稚は固より言を待たざれども、兎も角も五ヶ年間の學科を通じて其業を卒へたる者、乃ち大體の學理に通曉するを得て、偉大の好果を奏するに至りしは、他藩能く之に比するものなかりしなり。

佐賀藩の改革と言へば、概ね皆な失敗に了りしに拘はらず、獨り醫術のみ能く斯くの如き効果を奏するに至りしは何ぞや。想ふに、他の改革事業の敗れたるは、多くは支那流の智識を以て基礎と爲し、空論臆測を以て事物を支配せんとしたるに由る。彼改革者は多少西洋流の智識なきにはあらざれども、其は多く皮相に止りて、其事物を運轉する精神は依然たる舊精神なれば如何んぞよく好結果を見るを得べき。彼學制の改正の如きは其較著たる證跡と爲すべき者にして、則ち彼



諸般の改革中、獨り成功す

佐賀醫師の地位重し

等は愈々改革を爲して愈々弊害を長じ、遂に有爲の少年を機械的に養成するに終りしなり。獨醫術の上に於ては則ち然らず、彼の大石、大庭、澁谷、島田等の如き夙に洋學を學んで其學理を窮め、其學ぶ所を以て藩主に説きたるにより、藩主の聰明なる、實際上に必ず利益あるべきことを知り、直に之を採用し、彼等と共に其の發達進歩を圖りしなり。夫れ改革には先づ人を要す、其人だにあらば、事を擧ぐることに必ずしも難からざるなり。

而して彼等は只醫師として佐賀藩の裨益を爲したるのみならず、數多の學生に洋學を授けて眼を宇内の廣きに注がしめ、其中より一躍して有名なる政治家と爲り、天下の爲めに諸般の經營を爲したるもの亦た少なからず。夫れ然り、故に佐賀藩に於ける醫師の地位は實に輕々に看過すべからざるなり。

嗚呼、少年の時は春花の如く、老年の時は秋實に似たり。少年の所爲は何事も陽氣に、何事も華麗にして、比較的卑劣、醜惡、陰險、詐欺の術に乏しく、時に危險の感なきにあらずと雖も、其言動は愉快にして擲すべきものなり。彼等は多情なり、多感なり、見るもの、聽くもの又觸るゝもの、悉く皆な之を取り、皆な之を爲さんことを希ふ。其勇氣や尙ぶべく、其の無邪氣や愛すべし。十州を得んと欲するものは一州を得、一州を得んと欲するものは一郡を得、意の存せざる所には道なく、志の存せざる所には結果あるなし。故に多情多感の性行を利用して、諸事諸物に

少年と老人

經歷を加へしむるとは、少年者に於て最も必要の所爲なり。余輩は一種偏僻の學者の如く妄りに禁慾主義を取り彼少年のまだ何くに芳芽を發くにや知るべからざるの素性を壓却するを好まざるなり。少年にして漫に老成人を學ぶ者は、老年に至て純粹の少年と爲るや知るべからず。何となれば、言はず、動かさずしては有用なる經驗と智識とを積む能はざるを以てなり。

且夫れ、人は歲月と共に絶えず異りたる境遇を通過する旅客なり。老年の境遇は固より少年の境遇に異り、今は想像を爲すの時に非ずして實地に働くべきの時なり。其腦は物に接して寧ろ冷かなるを尙び、其眼は事に當つて寧ろ一部に注ぐを要す。彼は事物の爲めに己れを支配せらるゝことを止めて己れの見識を以て事物を支配せざるべからず。壯言大語は老壯の徒に益なし、其思想は一層眞摯にして實際的ならざるべからず。社會の外に道理なく、道理の外に社會なし。故に、事實を外にして徒らに空論臆測をなすものは、哲學者と雖も排斥せざるを得ず。況んや、政治家其他の事業家に於てをや。老者は須らく秋實と爲りて各々其種に従つて其効用を遂げざるべからず。春花、秋實、能く人の一生を爲す。少年の樂は老後の地位を想像するより樂しきはなく、老者の樂は少時の境遇を顧みるより樂しきはなし。

人生は河の水の行路に等し

更らに之れを他の點より觀察する時は、人生は河水の行路に等し。少年の様は源流の如く、老者の體は下流の如し。水の始めて源泉を發するや、障礙に逢へば十丈の懸河と爲り、險途に就けば



驛流と爲り、停れば淵と爲り、放てば瀬と爲り、或は巨巖を裂き、或は大木を壊へ、跳るが如く、奔るが如く、怒るが如く、笑ふが如く、争ふが如く、闘ふが如く、須臾にして分離し、須臾にして結合し、一区域内に於て能く千體萬狀の奇觀を呈す。是れ則ち少年始めて志を立て、世上に突進を試みるの様にあらずや。彼等は實に忙がはしきものなり、彼等に向つては日は月の如く、月は歳の如し。彼等は其の行爲に於て已に忙がはし、其心情に於ては更に一層急がはしきものあり。手を焼かざるまでは火の暑きを知らず、身を溺らさざるまでは水の恐るべきを知らず。唯、彼等の決心と勇氣とは世の剛者をして僻易せしむるに足る者あり。

已にして水の山を離れて溪間を傳へ、流れ来る幾條の水を併せ、漸く平地に出て、漸く海口に近づけば、水は次第に深くして舟楫を行るに足り、又遍く兩岸の田野に灌溉するを得れども、其體は寛漫にして亦昔日山に在りしの時に似ず。今は急がずして急ぐなり、散て又妄りに衝突氾濫の憂を見ず、洋々として自然に従つて流る。河水に幾多の小流を併するは、吾人が幾多の經驗を得るに異ならず。深水は岩石と争はず、經驗あるものは小事を異とせざるなり。經驗なる哉經驗なる哉。經驗は實に人の勞力を和ぐる者なり。經驗なきの人は肩を以て物を擔はざるを得ず、經驗あるの人は汽車を驅つて之れを運ばしむることを得。然り而して余は斯くの如き言を爲すに拘はらず、數々身の少時を顧みて、其日月の甚だ長くして

經驗なる  
哉經驗なる

多端の時  
期に於て  
多端の歴  
史に遺着

心情の甚多端なりしを思ふ。今は閑散の地に在りて數年を経過すること實に一夢の如きを覺ゆと雖も、少時の經歷に就て考慮を運らす時は、今も猶多忙の思を爲すに至る。蓋し少年の時は多端の時なるに相違なし、變化多きの期なるを免かれず。余等は此の多端の時期に於て、我邦に最多端の歴史に遺着したるなり。維新の歴史たる、僅二三十年間に於て、過去數百年間の變遷よりも著大なる變遷を爲したるなり。余等は固より其の勢運に乗じて活潑々地の運動を爲せしものなりとは言はず、已に毎々、陳述したる如く、余の經歷は概ね失敗の經歷のみ。余等は二世三世を通ずるも猶見る能はざる程の活劇を目撃しつゝ、拘束壓制の下に頭を屈して之れを忍びしなり。余等をして時勢に無感覺ならしめば斯くまでに焦心苦慮、失敗の上に失敗を重ねるには至らざりしならん。只夫れ、幸か不幸か、多少、時勢の變遷に注意して、偶然にもせよ、其趨嚮を察知するの地位に立ち、千百異同の事物に刺撃せられ徒に心情の多端を加へ、日月の轉た長きを覺えしを如何せん。

余は今に及んで一生の憾事と爲すものあり、其は何事といへば、彼當時に於て効果なき運動を斷然と止めて専ら心を學事に委ねざりし事是なり。若し余にして其意を決し、政治、經濟及び其他社會上に適切なる學問を専攻し、以て大に之れを必要なるの道に供したらんには、之に因りて國家を利したること、必ず少小にあらざりしならん。只國家多端の際に遭ひ、心を多方に聘せて空

一生の憾  
事



しく數多の歲月を送り、一方に於ては、事業の効果を得るともなく、一方に於ては學術の深奥を極むるに至らずして止みたるは、是余が自ら以て一大失策と爲す所なり。

教育の事に熱心す

然る故を以て余は頗る教育の事に熱心するに至れり。即ち全身の遺憾を擧げて之れを少年子弟の上に周慮を加へたり。曾て大木が文部に相たる時に、余は之れを助けて教育令を發布せしめ、次に余の内閣を退くや、東京専門學校を設立し、以て世の少年子弟をして完全なる教育を受けしめんと圖れり。前の教育令發布に就きては、當時の内閣員中に反對の意見を懐くもの少なからず。現に、井上の如きは力を極めて反對し、遂に其職を辭するに至れり。余と井上とは從來相提携して國務に執掌せしものなるに、此事よりして其後は今日に及ぶまでも復相容るゝ能はざるに至りたるは誠に是非もなき事なり。但し斯くの如きも猶余の持説を譲らず、遂に大木を助けて其發布を斷行せしめたるは、蓋し自己の經歷に於て深く教育の缺乏を感じ、少年子弟をして再び余の覆轍を踏まざらしめんとの情甚だ切なるに由りしなり。

斯くの如く余は自から教育の不完全を悔恨し、及ぶ限りは少年子弟の爲めに意を用ひたりしも、當時の時勢を反顧するに、余等は實に安んじて教育に従事する能はざりき。若し夫れ其時に身を挺して斷然外國に遊學したらば、世事の係累を免かれて、専ら意を學術の上に注ぐを得たるならん。然るに空しく國內に在りて時勢の變遷を斷えず目撃し、數多の同志と相提携して、輒もすれ

身を國事に遠くより意を専ら教育に注ぐ能はず

ば痛談して曉に徹すること多き余に於ては遂に身を國事より遠ざくるを得ず、従つて専ら意を教育に注ぐ能はざりし。夫れ、人は道理と感情とに制せらるゝ動物なり。苟も道理ある事物の其頭腦を刺撃し、感情を衝撞する間は、黙せんと欲しても黙する能はず、姑く忍んで黙すると雖も頓て感動されて黙する能はざるなり。殊に余の如き少壯客氣の士にして、彼極端の衝突を爲したる時期に際會し、身を度外に措き、意を専らにして學問に従事せんことは、殆んど望むべからざるの事なるべし。強ひて之を爲したるならば、學問上の利益は多少是あらん、されど時勢の上に攀登馳驅するに際して、必ず數歩を蹉躓したるは疑ふ可くもあらず。

兎に角余等は社會の變遷甚だ急激にして、千古に比類なき多事の間に呼吸せしものなり。譬へば親の手を假らずして新世帯を持ちたる若者と同じ、總て諸事を一時に整頓せざるを得ぬ必要に迫られしなり。即ち余等は國家に非常の改革を爲さんと企圖すると同時に、一身に向つて新知識を得んとに汲々たりしものなり。不幸にして國事に關しては、失敗に失敗を重ね、失意を加へたるを以て、已むを得ず、姑く閑散の時を利用して英學研究に従事するに至りしも、志望は固より彼にありて更に重大なりしを見るべし。

斯くて、余等は長崎に英學校を建設し、兩三年の間は専ら研究に従事したるも、最後の大勢力を以て打寄せ來りたる時運の潮流は、余等を感動して再び船を政海に漕ぎ出すの已むを得ざるに至

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情

國事に關しては失敗を重ね



再度の長州征伐

らしめたり。謂ゆる最後の潮流とは他なし、幕府が長州再征伐を企てしこと是れなり。長州征伐は已に一たび余等の頭腦を刺衝して奔走する所あらしめたるに、今之を再びせんとするに於ては、余等豈に強忍の緒を截つて奮起する所なきを得んや。以爲らく「今は、國家累卵の危きに處す、再征長の師を起して内亂の端を啓くは、是磐石を扛げて之に臨む者なり、必ず摧碎を免かれず。嗚呼、是ぞ國家存亡の秋にて危機一髮の間に迫る。苟も之を一轉して天下の禍源なる幕府を掃滅し、諸藩をして王政一統の下に屬せしむるにあらざれば、遂に之を拯ふなからん」と決意せり。

余等は再び國事に就きて奔走す

幕府閑叟に力を求めむ

是に於て、余等は再び國事に就きて奔走を始めたなり。先づ閑叟をして幕府と長州との間に立ちて調停を爲さしめ、然る後に進んで天下の表に立ち、徐ろに大事を經營せんと欲したり。是固より爲し難き事にあらず、何となれば、當時幕府の閣老となりて重きを置かれたる小笠原壹岐守は肥前唐津の藩主にして、其領土は佐賀領土の間に介立し、彼曾て佐賀の學校に留學せしこともあり、明山公子と稱して今の長岡護美と共に世に名を知られ、余等の同志中にも互に相往來せしもの少なからず。且長州の長井玄蕃は曾て佐賀の書生と相知るものにして當時大監察の職を奉じたり。而して藩主閑叟は正に天下の重んずる所と爲り、其一言一行は殆んど行はれざるなきの地位に立ちたればなり。故に、幕府は閑叟に向つて數々助力を求め、更に佐賀の事情を知るものをして彼を動かさしめんことを圖るに至りし。

閑叟一呼して大事成らば

薩長と光榮を競ふ能はざる運命の決

余等は之を見て奇貨措くべしと爲し、説て曰く「我藩は宜しく最後の決心を爲して此間に處する所ある可し。征長の舉は固より以て拒むべし。幕府幸に聽くならば之を助くべし。若し聽かざるならば、全力を舉げて長州を助くべし。但し我藩の勢威を以て幕府に臨むならば閣老小笠原の如き必ず他を説きて共に聽従するに至るべし。萬一、彼之を拒むが如きことあらば、其領土は我佐賀領土の間に介立せるもの、兵力を以て其四境を壓して之を強ふるも易々たる事のみ。何れにもせよ、此際に閑叟一呼して起つあらば天下必らず靡然として隨ひ、我佐賀藩は勞せずして較著なる地位を占むるを得ん。否な、此の内亂の危機を轉じて全國の一致結合を圖り以て改革の偉業を大成するを得ん。嗚呼、時運は我藩に幸を與へんとせり、天の與ふるを取らざれば却て其禍を受く、我藩の君民は、如何んぞ座して好機を失ふべけんや」と。今にして之を料るも、余等が此言説は識者の是認する所なり。其當時は、實に佐賀藩の天下に雄飛すべき最後の好時機にてありしなり。然るに此機も空過して又爲すべきなく、閑叟に對するの望は殆んど茲に盡果て、佐賀藩が維新の改革に對して藩長と光榮を競ふ能はざるの運命は全く此に決したり。嗚呼、余等は已みなんか。時勢の變遷と耿々たる忠愛の人心とは、余等をして已む能はざらしむ。男兒は斃れて而して後ち已まんのみ。曩に江藤が脱藩して京師有志の間に奔走畫策したる所も徒勞となり空しく歸りたり。然れども其は往事のみ。今の時は其時と異なり、頗る余等の畫策を施すに適せるを以て副島と共に

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情







せられしが、一日、突然と共に使を遣りて余等を其家に招きけり。

是實に奇異の事なり。蓋し、余等は謹慎中の身にして、且彼等は執政なり、参政なり。容易に席を同うすべきにあらざるに、特に、余等を呼で語る所あらんとするは是恐くは閑叟の意に出でたるものなるが、往て談するに、彼等は意外にも時勢に對する余等の識見を是認し、從來世の事情を誤解して痛く余等に反對したることを陳謝し、且今より藩政の方針を一變して余等の見解に従ふことを約したり。是に於て余等は更に之に告げ「我藩にして果して藩政の方針を一變して、能く余等の意見を用ゐるならば其力を國事に盡すに於て、今も猶ほ後れたりと爲さず。但し内部の改革は必ずしも一日の急を争ふとにあらざれば、宜しく外部に向つて専ら其力を致す可し。先づ兵を京師に出し、且有爲の人士を派して我藩方針の上に立ちて列藩有志の間に交渉を爲す所あらしむべし。尤も必要なるは、閑叟をして速かに京師に上り、朝廷に従うて天下の爲に斡旋する所あらしむる事是れなり。斯くの如くして着々其機を誤らざれば、我藩の地位と聲望とを回復すること決して難事にあらざるなり」といひしに、執政等之を領しぬ。

余等謹慎を許さる

程なく余等は謹慎を許され、再び長崎に向つて出發すると爲れり。當時参政の一人に伊藤（現時廣島縣知事なる鍋島幹の父）といふものあり。藩の會計を司り、外國人等と取引を爲す點に於ては頗る閑叟の信任を受けて、船舶、兵器等買入れの爲め數々長崎に來り、滯在中は余等の同志と

相往來し、且幕府の奉行監察等とも交際したるを以て、頗る萬事の事情を知悉したれど、藩吏の中に於ては寧ろ失意の地に立ち、依つて常に余等同志と氣脈相通じたりし。余が長崎に向つて出發せんとするの當夕に、中野等數人と共に伊藤の家に會し、種々談合する所ありし。折しも余は俄に風邪の心地して惡寒を感じたれども、猶之を忍び、其夜十時頃に彼等に別れ、直に舟に搭じて長崎に向ひしに、舟中にて惡寒益々甚だしく、翌朝、長崎を距る八九里の處なる諫早に着せしに、屢々眩目して殆んど動く能はず。然れども、其地に於て病褥に就くとも治療を請ふべき良醫なきを以て、病を勉めて長崎に向ひしに、途上の籠の中にて氣絶すると數回、漸くにして夕刻長崎に着するや、復人事を辨せず。斯くの如きこと凡そ一週日、吾も人も殆ど不歸の途に就くならんと期せしに、同地は固より良醫に乏しからず、蘭醫、邦醫、交々力を盡して治療を施し、により幸にも九死に一生を得て回復するに至りぬ。然れども、之が爲め貴重なる三四ヶ月の日子をば空しく病褥の中にて送たり。吁、病も亦一の經驗か。

病も亦た一の經驗なり

然り、病も亦一の經驗なり。凡そ天地の間不必要の物はなしとせば、病も亦必要なしとせず。吾人固より自ら求めて疾病に罹るの非なるを知る。又彼無學にして不注意の徒が猥りに衛生を怠りて故さらに病を招くの愚なるを知る。然れども、之れを一方より觀察すれば、天の雨を降すに勤人の田と惰人の田との差なきが如く、病の來るも攝生家と不攝生家とを選ばざることあり。余は

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



溝を跳越して右足を傷く

少年の時に於て身を羸弱に陥れ、二十四五にして四十以上の衰容を呈せりと稱せらる。是固より自己の不注意に由るものなきにあらず、其始め學友等と一間餘りの溝を飛越ゆることを競ひ、足を失して痛く右足を傷けしに、其傷は掌大の潰瘍となりて、肉落ち、骨露はれ、容易に治療を爲す能はず、若し今日ならしめば、醫師は必ず其足を切斷して快速の治療を施したらんも、其時に在りては、未だ是等の手術に熟せる醫師あらざりしを以て、別に詮すべき様もなく、其儘に捨て置きしに、其暫時は痛苦を感ずること甚しく、後年に至るまで左足に比すれば稍々疲瘠したるを覺えたりし。然るに、不思議にも其右足を又ダイナマイトの爲めに傷けられて竟に切斷せざるを得ざる事となり、有名の國手を煩はすに至れり。嗚呼、數十年の前に於て切斷すべかりしもの、能く彼日まで保存し來りたりと思へば、亦遺憾もなき事なり。

足傷後の身體は益々健全ならず

足傷の後余の身體何となく健全ならざる所あり、熱病、麻疹等の疾病流行すれば一ヶ月乃至三四ヶ月の間之に惱まされて褥床の中に呻吟すること多し、書生の常として、病少しく癒れば忽ち學校に出て學事上の競争を爲さんとし、且喫飯、飲酒等すこしも節制を加ふるなく、時には餘多の學友と郭外數里に遠足を試みて故さらに筋力を無用の事に費すなど、兎に角無理押を爲すこと多かりしを以て、いよいよ羸弱なる身體は益々健康を害するに至れり。斯くて、病の爲めに後れたる學科を勉めて、他の學友に追及せんとすれば忽ち復た病を起し、其少しく癒ゆるを待かねて之を回復せんとすれば、更に激疾に冒され、因て心氣益々煩悶し、體軀徒に疲勞を來すこと多かりし。

猖紅熱に罹る

當時、佐賀藩の學校は病氣若くは事故に遭遇して休養の已むべからざるものには、三ケ日の猶豫を與ふ規定なりしも、余は或時殆ど四ヶ月に涉りて病の癒えざる事あり、既に退校者を以て目せられ、再學級の始めより就學せざるべからざるの場合に至らんとせしに、幸に教頭副島某等の余が爲めに盡力するあり、僅に引き續き其學級に在るを得たる事すらありき。就中、最も危難なりしは彼長崎へ赴く行途に於ての疾病なりし。其は猖紅熱と唱へて熱病中に最も其性の暴惡なる者にして、之に罹りしものは概ね死を免れずと云ふ。幸にも當時、長崎には有名なる蘭醫マーセルあり、又醫術養成の襟母とも言ふべき相良は余と同宿し居たるを以て、余は先づ十分なる治療を受くるを得、漸く生命を回復するに至りたるなり。然れども、猖紅熱を病むものは全身の表皮盡く剝脱す、其状宛かも蛙の皮を剥ぎたるに異ならず。故に、十分の攝養を加へざれば餘病を惹き起す虞れあり、醫者は此事を以て數々余を誡めたり。然れども、時勢の切迫と余の鬱勃たる意氣とは靜居休養するを許さず、直ちに起ちて同志と共に運動する所ありしに謂ゆる因果應報なる不注意の結果は忽ち不幸の素因と爲り、春過ぎ夏たけて秋候の漸く冷風を吹き催すの時に及び、激しきリユーマチスに襲はれて、復た非常なる苦痛の中に轉輾するに至れり。



此時に當り佛國巴里に世界大博覽會を舉行せんと準備をなし、佛國政府より幕府に紹介して日本よりの出品を促し、幕府も亦之れを應諾したり。時に、佐賀は藩主を始め一般商人に至る迄殊に外國貿易に心を傾けたるを以て、則ち委員を派して出品を爲すに決し、且豫ねて和蘭に注文したる軍艦の製造恰も其工を竣へたるを以て其受取の用務を兼ねて、數人の書生、士官及び商人等を派遣せんとて佐野常民を选拔して之を率ゐて彼地に向はしむること爲したり。此時余の親戚某は余の身上に就て、深く配慮する所あり、以爲らく「大隈の近狀は頗る其前途を危うするもの多し。彼が交際するものは多く無頼の徒なり、其相圖る所は皆亂暴を免れず。既に、毎々藩主の命に背きて國禁を犯し、敢て危険の道に出入し、遂には其身を亡ぼすに至るを慮らず。今にして之を矯正する法を講せずんば、彼は遂に累代の家名を滅すに至るも測り知るべからず。今、彼をして本心に歸り、正道に就かしめんには、先づ彼無頼の徒より引離さるべからず、是は到底彼を内地に留置きて能くすべき事にあらず。今幸に佐野等は佛國に向はんとす、此機を利用して彼を其一行に加へ、暫く佛國に留學せしめなば、周圍の惡縁と絶ちて専心に學術の研究を爲すに至るべし。是れ彼をして正當の人物とならしめ、而して大隈家を永く將來に繼續する良途なりとす」と申合せたりしと。

某は此意見を君側の人に圖り、因て閑叟に説き、余を佛國に送らんとしたれども、余が性質の頑剛なる屈すべからず、藩命だにも反抗することのあるを知るを以て、之れを公にするの前に、先づ余の意中を問はんとし、慇懃に余に向ひ、閑叟の余を选拔して佛國に留學せしめんと欲する旨意ありと稱して我の應ずるや否やを問へり。某の心情は固より深切ならざるにあらざれども、余の抱負は全く某等の見る所と異れり。幕府再度の征長は果して失敗し、慶喜が將軍と爲るに及んで幕府の運命は方に旦夕に迫れり。此時に當て快刀一揮して能く天下の亂麻を絶つものは果して何人ぞ。社會は實に其人を要するなり。若し不幸にして其人なからんか、封建は分裂して、英雄割據の害毒は三千五百萬の同胞を塗炭の苦に陥れ、蚌蟻の争は遂に漁夫の利と爲り、日本全國を擧げて歐米人の手裡に歸せしむるに至るや料知るべからず。然るに志を當世に有するの男兒にして、此時此際に如何んぞ悠々として外國に歲月を送るを得んや。世人の多くは其身の那邊に立つやを知らず、千歲に遭着すべからざる好時機をば空しく睡夢の間に送却するものなきにあらず。今日には是歴史上の大觀にして、我邦未曾有の變化を來たすの時なるを覺らず。余は固と一介の書生にて、才粗に策乏しといふと雖も、腦裏に自ら一團の壯心を存す。たとへ十分に爲すべき能力に乏しきを知るとも、豈に此時に於て此地を去るべけんや。嗚呼、今は、一身一家の前途を顧みるに遑あらざるなり、心は天下民人の上に向て奔趨しつゝあるなり。自ら其手腕を以て偉業を爲す能はずとするも、一日も國家の安危を度外視するに忍びず、此際に於て外國行を勸むるが如きは、



馬を中原  
に進めて  
鹿を争は  
んと欲す

殆ど時勢を辨せざる俗吏の所爲のみ。

且つ軍艦を受取り、博覽會に出品を爲す事も、必要ならざるにあらざれども、其のために國家焦眉の急を對岸の火災視するが如きことあれば則ち如何。軍艦は何の爲めに製造するぞ、貿易は何の爲めに擴張するぞ。今は天下の將に大亂に陥いらんとするに當り、鯨鯢として偏に一藩の利益を圖らんとするとも到底其の目的を達すべきにあらず。先んずる者は人を制し、後る、者は人に制せらる。余等は當に先づ馬を中原に進めて堂々鹿を争ふの舉に出づべきのみ。徒らに此事と營利に汲々として國家の病根を除くことをなさずば、假令、一時其効果を獲るあるも是姑息の策のみ。是にして姑息と謂はずんば、天下に何事か又姑息なるものあらん。

佐野の性  
行は余と  
相容れず

余が意氣は實に此くの如くなりし。之に加ふるに、其派遣委員の長ともいふべき佐野は、余が胸中の一疑問たりしのみならず、實に余と相容れざりし。彼は前にも述べし如く元と醫學生にして蘭學者なり、大石、大庭、伊藤等に就て一般の蘭書并に醫術を研究し、其道に於て稍々得る所あり且同時に藩の儒家高弟として漢學を修め、朱子學に最も熱心なりとの評あり。彼は余等が朱子學に就て反對の意見を持して辭すると聴き、慫慂に之が説明を爲し、事ありたれど、余等は少年の常として之を蛇蝎視したる折柄なれば、固より胸襟の融和すべくもあらず。一言以て之を評すれば彼が腦髓の半片は支那風にして、半片は西洋風なるものなり。即ち人倫道德の上に關

佐野朱子  
學を重ん  
ず

しては保守主義を取り、物質上の事物に對しては改進主義を取りたるなり。故に其所爲は一般の俗吏と同じからざれど、天下の大勢に對して彼れは如何なる意見を有せしやは、余の知らんと欲して遂に知る能はざる所なり。蓋し彼は當時、我國の西洋諸國に及ばざるを單に物質的の開化に在りと斷定したるものに似たり。是を以て熱心に西洋風に倣うて海軍を擴張し、其諸器械の製造及び商業の上に向つては銳意其の進歩を圖ると雖も、獨り人事の上には、支那、日本の教育を遙に歐洲に勝ると信じ、常に言を爲して「人若し智徳を磨かんと欲せば必らず朱子學に據らざるべからず」といへり。

此の如き性情を具有せるにより、彼は一方に於て藩制に諸種の弊害あることを知らざるに非ざるべしと雖も、君主の命令に對しては毫も違背するなく、而して一方に於ては盛に外國の新事物を輸入して以て、經營する所あり。故に、彼は那の一邊には保守家と相携へて藩の信用を繋ぎ、那の一邊には、改革派と相和して或る人士の希望を繋ぎ、恰も其中間に立ちて事を取るものなり。是頗る奇異なる所行の如しと雖も、當時に處するには寧ろ都合よき處置ならん。

談話稍々錯雜すれども、此に佐野に就て併せ叙すべき一人あり、其名を田中虎六と云ふ。是も漢學者なれども、世に珍らしき才子にてありし。彼は書生より一躍して直に郡の奉行と爲れり。是は佐賀藩に於て類例なきの榮典なり。彼は就職以來、淫祠を毀ち、社寺の制度を嚴にし、其の領



田中不幸にして死す

地を沒收したる等、頗る奇抜の處置をなして人の耳目を驚かしたる事あり。兼ねて泰西の事情に通じ、船舶、大砲、小銃其他諸器械の製造を爲すに、佐野を助けて斡旋したる事少なからず。余等も始めは彼を佐野と同一種の人ならんと思ひしに、其實際は大に異なる所あり。彼は嘗て熊本の澤村、木村、水戸の藤田等と交を訂せしことありしに、彼等も皆彼を以て百里の才に非らずと爲し、且其百里の才にあらざるを以て、當時一般の公衆より容れられざらんことを惜めり。彼の見識は甚だ凡庸ならず、夙に人に對して幕府の滅亡を豫言したることありき。佐野は其田中と事を共にしたる故を以て、裨益を受けたること蓋し少なからざるなり。然るに、田中は閑叟の氣力漸く衰へたるが爲め、其信任は昔日の如くなる能はず、天晴れ有爲の才を懐きながら、其才を運用するの地位を失ひ、怏々として樂まざりしが、不幸、未だ維新の盛運を見るに至らずして早く黃泉の人と爲りたり。

佐野が、海軍の履歷に就ては實に較著なる地位を占めたるものにして、彼勝安房等も同じく長崎に在りて同じ一蘭人より其傳授を受けたるものなり。彼が親しく外人に接し、洋書を解し、併せて進歩的の事業を經營し、且其活潑なる田中等と交際したる點よりすれば、彼は悦んで余等と其主義目的を同うすべきものなるに、實際に於て遂に相提携する能はざりしは、全く彼が朱子學の養成に依て余等と頭腦を異にせしに由るなるべし。彼の一派は比較的に多數にして、其主義は比

佛國に赴くを好まず

較的に余等同志に近きものなりしを以て、余等は勉めて彼を余等の黨與となさんとしたれども、彼は其所見に従つて動く所なく、爲めに其目的を達すること能はざりし。

要するに、余は此くの如き意氣も斯る佐野との關係よりして佛國に赴くを好まず。因て之を以て親戚某の間に答へ、斷然と渡航の意なきを示せり。今にして思へば、當時、寧ろ彼地に赴きて四五年間の歳月を學術專修に送りしならば得策なりならんと反顧すれど、當時社會の大波瀾中に遊泳したる余の心情は勃々として迎もかゝる決斷を容るゝの餘地あらざりしなり。

左は言へど、佐野は他の點より見れば誠に善良の性質にして、事物に對して非常に熱心誠意なる人なり。其の一事一物の上に向つて精密に、持久に、心意を傾注すること恐くは他に其比類を見る能はざるべし。彼は前にも述べたる如く、海軍に就いて心を用ゐたること少なからず、殆んど一身を擧げて其整理と擴張とに従事したれど、如何にせん、我海軍部内には藩閥の勢力甚だ強く、遂に彼をして其効果を收めず、空しく引退するの已むを得ざるに至らしめたり。

彼が赤十字社に對する盡力の如きは、優に彼の性質を見はすに足るものにして、彼が十數年前に始めて其事を主唱するに當つては、天下殆ど一人の耳を之に傾くるものなく、偶々其名を聽くも其何物たるを知らざる程なりしに、彼一旦之れを企畫するや、乃ち誠意に、熱心に、朝野の間に遊説して大に其の規模を擴張し、今日に於ては龐大なる一團を構成し、列國に對して文明の一光

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情

佐野が海軍に對する盡力

佐野が赤十字社に對する盡力



榮を分つに至れり。

又彼の功勞は美術の上に於ても較著なるものあり。彼我國古來の名畫并に珍器等の類に外國に流出するに際し、人の未だ是を意とせざるの時に、早く之を救濟すべきの叫聲を擧げたるものは彼なり。維新の改革以來、人心多くは一方に走りて、偏に實利實益を欲望する際に、若し彼の如く美術上の趣味を解し、而して彼の如き地位に依り、彼の如く盡力するものなかりせば、我國の文明は今日よりも一層偏僻の傾向を助長するに至りしならん。幸にも彼の叫聲は天下の人衆を感動せしめ、爾來は意を斯道に注ぐ者益々多く、今日に至ては一般に美術は文明の裝飾品にして、完全なる邦家を構成するに決して缺く可らざる必要の物なることを知るに至りしは多くは彼れの恩澤なり。彼は政治家としては非難すべき所少なからず。然れども、是等の諸點に於ては誠に世に得易からざるの人物と謂はざるべからず。

是より先き佐賀藩の書生は大概江戸に遊學し、其序を以て水戸に遊歴し、藤田等の門に入りたる者亦少なからざりしが、閑叟の氣風一變するに及で熊本との往來俄に頻繁と爲れり。元來熊本には黨派多く、列藩中に水戸に次で黨派軋轢の弊害を受けたるものは恐くは高知と熊本となるべし。佐賀より熊本に赴くもの多くは陽明學を遵奉せる澤村、木村等の一派と交通せしが中には、朱子學派なる横井小楠、元田永孚等の徒と往來せしものも、亦た少なからず。此の二派の人々の争ふ

美術に對する佐野の熱力

熊本の往來頻繁と爲る

熊本との實際親密を加ふ

所は單に學派の異同に止まりしにあらず、延いて時勢の上に及ぼして勤王佐幕の傾向を異にし陰然又公然、互に其紛争を逞うして殆ど底止する所を知らざる程なりしを以て、熊本に往來したる佐賀の人々は必ず其軋轢の餘弊を受くることならんと想像したれど、實際に於ては毫も斯くの如き事はなかりし。思ふに是彼等は重に閑叟の命に従つて往來を爲し、勉めて兩藩の親密を圖りしに止り、眞に熊本學派の感化を受けたるにはあらざるに由るなるべし。兎も角も、兩藩の往復は漸く頻繁と爲り、而して佐賀藩費の出身者を登庸して藩の權力を握らしむること多かりし閑叟は今も多く熊本に往來したる人を擧げて其側に侍せしめ、且藩の要路に立たしむること、爲したるより熊本との交際は益々親密を加ふるに至りたり。

維新前年の事なりき、閑叟は上洛せんとして佐賀を出發せしが、其道を變じて特に熊本に到り、藩主細川を訪ひ、且今の細川、長岡等に面會して、彼等の人と爲りを知り、併せて諸藩全體の模様を視察したるもの、如し。是より、閑叟は益々意を熊本に注ぎ、遂に彼長岡の兄なる細川の當主護久に其愛女を嫁するに至れり。是實に余等が再び運動を爲すの端緒を啓きしものなり。想ふに熊本藩内には夙に尊王攘夷の説を執りて其名を知られたるものなきに非ざれども、一藩の趨勢は全く佐幕に傾きたるもの、如し。是を以て、謂ゆる、勤王家と稱するものは、其志を藩内に暢ぶること能はず、去て長州に歸したるものあり、彼横井の如きも遂に熊本を出で、松平春嶽の下に

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



熊本と相  
結ばんと  
するの眞  
意如何

仕ふるに至れり。實に熊本は大藩に相違なしと雖も、其藩主は如何、其重なる吏員は如何、其保守頑固にして共に相提携するに足らざるは固より言を待たず。若し閑叟にして先づ熊本を動かしかし然る後ち、共に動く所あらんと欲するならば、熊本人士の之を信用するの深き、必らずしも行はれ難き事にあらざるべし。只、今日、彼が熊本と相結ばんとするの眞意は如何。果して彼と共に動かんとするに在るか、抑亦彼の如く保守の策を取り、日本、否九州に於て唯二藩の安全無事を希圖せんとするにはあらざるか、果して然らば是容易ならざる一大事なり。不幸にして事此に至らば、左なきだに、眠るが如き佐賀人士は一層昏睡するに至らん、有爲の士は猶熊本の如くに永久の脱藩を爲さざるを得ざるに至らん、嗚呼是憂慮すべきの限りなり。蓋し、今日よりして之れを見れば、其事は全く細川、鍋島兩家の私事にして深く意を勞するに足らざるもの、如しと雖も、其當時に在りては決して然らず。乃ち自他の結合を鞏固にせんには婚姻より善きはなく、而して一度此を舉行すれば將來互に相提携すべきは勿論、藩内の諸物に至る迄、互に相倣ふの風あり。況んや佐賀と熊本は境土相隣し、藩士の往復甚だ頻繁なるものあるに於てをや。兎まれ、余等は藩主をして余等が見る所の上に立ちて顯著なる効果を奏せしめんことを希圖し、且我國が危急の地位に陥りたるを知り、之を濟はんためには、如何なる微細の出來事も利用して以て其希圖を全うせんと欲するものなり。然るに、閑叟は今其女を以て是等の希圖を全うする上に

熊本との  
結託は余  
等に抱負  
するに遠  
ざかるも

熊本と聯  
合するは  
幕府と提  
携するの  
初歩

於て、寧ろ反對の側に立てる熊本藩に送る、是取も直さず、余等の抱負に對して益々遠ざかるものなり、安んぞ黙々に附するを得んや。是に於て、余等の同志中急激の徒は、此舉を以て直に兩藩相連合して幕府を助くるものと爲し、痛く激昂するに至れり。蓋し、彼等は熊本人士を罵りて因循姑息と爲し、其地位ある吏員中には一人も時勢に對して共に談するに足るものあるなく、從て將來に望を屬すべきにあらずと爲したれば、曰く「我藩にして婚姻を求めんと欲せば、必ずしも相當の所なきに非らず、假令、差し寄り之れなしとするも、愛女の年齢は未だ結婚を急ぐを要せざるに、今、何を苦んで反對主義を抱きたる熊本藩に向て急に之を嫁することを爲す」と。兎も角も、已に隣藩との婚姻に關する事なるを以て、公然と反對の運動を爲す能はざりしも、陰密の間には非常に盡力する所ありし。蓋し、余等は之れを以て非常の大事と爲せり、殆ど一藩の運命の關する所となせり、熊本と連合するは幕府と提携するの初歩と爲せり。左れば、如何にもして之れを中止せんと欲し、銳意奔走する所ありしも、遂に其効を奏する能はざりし。而して其運動に費したる金員は實に十八萬兩の巨額に上り。當時の十八萬兩は今日の百萬圓に相當す、當時、余等は金力に於て既に疲弊を極めしに、猶此の如き大金を擲ちて奔走する所ありしは、以て如何に余等が其問題を重大視せしかを見るを得べし。



此事に就きては猶言ふべき事もあれど、兩藩の秘密に涉り、之を發摘するは、余の心に潔しとせざる所なれば、只だ其表面の事情をいうて止めんのみ。

閑叟の本意  
閑叟に對する希望

閑叟の熊本と相結ぶに至りし旨意、蓋し相依つて以て佐賀藩の地位を強固にせんと欲せしに由るならん、固より幕府を佐くる意思に出でたるにはあらず。彼の性行已に一變して萬事保守の方針を執りし以來は、自藩の事に意を用ゐる務めて無事を以て旨と爲せり。故に、數々幕府の依頼を受けられども敢て之れに應ぜず。又數々京都に往來したれども敢て其間に較著たる運動を試ることを爲さざりし。思ふに彼は春嶽等の失敗の跡を見て、到底自己の力を以て今日の難局を處する能はざるを知りしものならん。其は固より然り、何人の力を以てするも、當時の形勢は、公武合體等の姑息策に依つて天下の處理を爲し得べきに非らず。然るに、彼の地位はもと公武の間に介立せしものなるに、乃ち進んで其局面に當り、快刀亂麻を絶つ果斷を以て、公武の間を分斷して、純に公を扶けて武を倒すが如きは、彼が君子然たる心情に於て爲すを得ざる所なり。彼は自らこれを知れり、故に、此紛争に當り直接に手を下すことをなさず、退て自藩の獨立安固を圖り、以て徐ろに時運の到るを待たんとせしなり。其熊本に向て愛女を嫁せしが如きも亦此意に基きしものにして、全く兩藩相依つて其基礎の永久を保たんと欲するに過ぎざりしならん。然れども事の此に至つては、余等が閑叟を起して天下の難事に當らしめんとの希望は全く盡き果てたり。是を以

は盡き果てたり

て、余は再び京都に赴き、此度こそは死力を盡して目的を達せんと期し、且過去の經驗に由り藩の意を帶ぶることの必要なるを以て、參政伊藤に依つて閑叟に請ふ所ありたれども、是れも亦許されず。

鍋島直彬の縁で藩の方針を動かさん計る

然れども、志の存する所には、終に道の無くんばあらず。余等は更に鍋島直彬の縁に足るべきことを思ひ出せり。彼は佐賀の末藩なる鹿島の藩主にして、直大の從兄弟に當り、大名の家に生れて猶ほ若年なれども、頗る書生を愛し、又能く士に下るの風あり。彼は有爲の人士と相見る毎に、常に當時の形勢を慨嘆し、藩吏等の所爲を見て頗る不満足の意を見はせり。且熱心なる勤王家なり、談 皇室の事に涉れば書生の言に對しても頭を伏して傾聽するを常とす。故に其時勢の上に対する説は余等の説に契合する所多し。元來、佐賀の制度として末藩は佐賀に屋敷を構へ、事の全藩の利害に關する重大の問題あれば、必らず其諮問を受け、若しくは自ら進んで意見を吐露する權利を有す。余等の同志中には、豫ねて彼と相識るもの少なからざりしを以て、余等は之に縁りて再び藩の方針を動かさんと圖れり。幸に彼は余等の言を容れて熱心に運動する所ありしも、其年輩は余よりも猶若少年なれば、閑叟は之れを兒童視して深く其意を傾けず。藩吏等も亦「足下もか」と言はぬばかりの聲色にて取合はず、而して外貌は敬して遠ざけたるを以て、余等は遂に其目的を達する能はず、百計こゝに盡きて復如何ともする能はざるに至れり。



是に於て、余は先づ江戸に赴き、幕府の地位并に其弊害の伏する所を視察し、再京都に到り、其實跡を擧げて京紳の間に遊説し、然る後に還りて藩吏を動かす、以て素志を貫徹せんと意を起すに至れり。然れども、翻て余の境遇を顧みれば、數年來の奔走に少なからざる資産を擲らしのみならず、引き續きたる大病の爲め巨多の金員を費せしを以て、今は殆ど金策の道なきに至れり。蓋し、余は已に自家の事情を知れり、徒に母に向うて其心を煩はしむべきにもあらず。殊に此回は江戸より京都の間に奔走して爲す所あらんと欲することなれば、逆も小少の金額にて其目的を達すべきにもあらず。之を知己の商人に求めんか、昔日の如き交際あらば或は之を調達し得べきも、已に數々彼等と商事を圖りて數々藩吏等の爲に阻碍せられ、離間せられ、爲に少からざる損失を爲さしめたるのみならず、彼等は巧みに藩吏等の爲に欺かれ、今は多く余等を以て危険の事を企つるものと爲せし程なるを以て、到底其意を達すべからず。然るに、幸に横尾某なるものあり、余が曩きに富國策を唱へ、藩廳より其一部を採用したる當時に、藩の會計に與りたるものにして、曾て書生の生活に馴れ、且相當の學識を有し、氣質至て淡泊なる所あり、數々長崎に來りしを以て余等と相知り、時に時勢に對する意見を闘はせし事すらありたりしが、今は余が金策に苦み居ることを聞知し、若干の金員を調達して余に貸與せり。蓋し、余は我の目的を告げて彼に求めたるにあらず、因つて彼が如何なる意志を以て之を貸與したるやを審にせずと雖も、兎も角、余が

横尾某余  
が爲めに  
金策す

山口尙芳  
東上す

金策の道に苦みつゝあるの時に當り、突然此厚意に接したるは大旱の雲霓も管ならざりしなり。然るに、何ぞ思はん、余のリューマチス未だ全快に至らず、爲めに空しく時日を遷延せんとは。但し、天下の事は日一日より急にして寸時も猶豫すべきにあらず、依て余は同志中に活潑の名ある山口尙芳に語り、彼をして先づ京師に上り、諸藩の有志若しくは京紳に依て閑叟の上京を促さんことを圖らしむ。余は彼の力にて果して其目的を達し得べきや否やを豫測する能はざりしも、兎に角に彼が非常に奮激し死を以て事に當らんとを失ひし程なりしを以て、大に之を頼母しと思ひたりき。暫くして余の病も少しく癒たり、然れども、陸路京都に赴くとは甚だ困難なるを以て心を苦しめつゝある折柄、幸に英國商船の神戸を経て横濱に向ふものあり、因て之れに便船して東上したり。同船中には肥後球摩コウマの人あり、又神戸開港並に江戸築地の居留地を定めし事業に就き長崎より召喚せられたる幕府の通辯某あり。是等は豫て余と相知る所の人々にして、余がリューマチスの爲に船の上下に不自由を感じるや、常に扶けて困難を減せしめたり。此行は、始めは先づ江戸に赴き、幕府の實況を探り、後ち京都に運動する所あらんと欲したれども、病の爲めに時日を遷延し、而して情勢益々切迫したるを以て、其意を翻し、神戸より上陸して直に京都に入り、山口に力を併せんと決せり。然るに如何なる都合なりしにや、英船は神戸に寄港せずして横濱に直航することゝ爲りしより、一旦失望したれども、斯る時には時運を利用するの外なしと思



横濱に到れば容易に上陸せしめず

大隈伯昔日譚

ひ定め、初志に還つて幕府の實情を探らんと欲するに至れり。既にして横濱に着船すれば、此地の警戒嚴になり、時勢後れの攘夷家なるもの所々に徘徊して居留地を襲ひ、外人を虐殺せんとの企を爲すものありと聞え、幕吏は非常に之に備ふるの時なりしを以て、苟も腰に双刀を横ふるものなれば容易に關門を通行するを得ざりしなり。且や、天下一般已に騒然として大變を惹起さんとするの徴見はれ、數多浮浪の徒、幕府の歩兵、及び新徴組の猛卒等、到る處に紛擾を醸したるを以て、横濱の警備は常に倍して嚴重なるものありしなり。事情斯の如くなれば、佐賀の脱藩書生が如何ぞ此關門を通過し得べき。

嗚呼、々々、世は實に微妙なるものなり。爲すべからざるが如き場合に於ても更に爲すべきの道あるなり、自然は眞正の幸運を放つて此間に周旋せしむるなり。余は始め金策に苦みて意外の厚意を受け、次に病の爲に旅行の困難を覺えしも、圖らず同行者の扶助を得、今は又横濱に來りて上陸の道なきを憂へしに、彼通辯人の其間に周旋したるに因て、難なく上陸するを得たるは眞に是れ天幸と謂べし。

斯くて、余は通辯人の厚意に依て無事江戸に着するを得たれども、知己朋友の此地に在留するものは至て少く、因て就て其事情を聽く能はざりしより、已むを得ず、豫て其名を聞知りし勝安房及び他の人々に會して談論する所ありしも、天下の形勢は最早談論の間に其要領を得べきにあら

意外の天幸

幕府は自滅せんのみ

將軍の上を大政返納されし天皇親政とならざる

ず。因て責ては幕府の一部分なりとも余等の意見に従はしめ、以て一般騷擾の度を減却せんと勉めたれども、業已に紛亂の端緒を開きし際に於て、從來交際なき書生が如何に辯説を逞うするも、竟に焦眉の急に應じ得べくもあらず。而して耳目の觸る、所に據て江戸の實況を察するに、幕府は前橋藩の兵を以て市中の警備を爲さしむるも、其威令は殆ど行はれず。歩兵、新徴組等は當るに任せて亂暴し、謂ゆる盜賊白晝に横行するの有様なりき。江戸にして此の如し、天下の事は知るべきのみ。幕府は既に自滅に陥れり、亦何んぞ其吏員と相語るの暇あらん、否、相語るも竟に益なきなり。是に於て、余は直に京都に赴かんと欲し、前の通辯人に依て船便を問ひしに、恰も外國船の神戸に向ふものありしを以て、直に搭乘して神戸に達したれば、山口尙芳は已に京都の勢を察し、寸時も躊躇すべき時にあらずと爲し、余の來着を待たずして急に藩に歸り藩論を動かす所あらんとを期し、歸途に就き、方に神戸に來りしに、恰も余と出會し、是に於て彼よりして京都の情況を聽き、彼に江戸の形勢を告げ、因て歸藩せば直に兩地の實勢を陳じて閑叟を動かし、速に兵を引卒して上京するに至らしめんことを囑したり。是に於て、彼は佐賀に向ひ余は京都に上りしが、リニューマチスの苦惱は猶減却せず、爲に余は殆ど自由の運動を爲す能はざりし。時は慶應三年十二月なりき、將軍慶喜は大政を返上せんとせしに、朝廷忽ち之を嘉納し、爾今天皇陛下親ら萬機を處断せらるゝことゝなりて茲に太政官の設立あり。慶喜は事の意外なるに驚き

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



て少しく躊躇せる際、朝廷は更に斷乎たる政策を執り、會桑二藩の京都守護職を解きて其兵を引  
き上げしめ、代ふるに薩長二藩の兵を以てし、三條以下七卿の官位を復して直に樞機に參せしむ  
るに至れり。慶喜は猶二條城に在りしが、會桑二藩の兵穩かならざる企畫あるを聞て、輦轂の下  
に在りては恐れ多しとの故を以て、突然と大阪に下り、不滿の裡に考慮を碎くの模様ありしより、  
近畿の人心は戰々恟々として恰も鼎の沸くが如くなりし。

事已に茲に至る、今は朝廷の命令を待て始めて起つべきの時にあらざれば、京紳の間に奔走する  
の要を見ず。且つ事變は續々生出し來らんとす、乃ち速かに之に備ふるの策を講せざるべからず。  
是に於て、余は急に京都を發して神戸に至りしに、佐賀藩の汽船恰も其の埠頭に在て將に出發し  
歸らんとするに會せり。は無上の好機なりと直に搭乘せんとせしも、顧みれば背法の脱藩人なり  
此船に乗するは自ら虎口に投ずる者にはあらざるか、さりて他の船便を待たんか、冬季にて風  
強く海荒る、佐賀までは少なくとも二週間を費さん。其間に或は時に後れて天下の大事去るには  
至らざるか。虎穴に入らずんば虎兒を得ず、身は唯自然の成行に任せんのみ。

即意を決して該船に乗込めば、幸にも其船員は絶えず近海を航行して久しく佐賀に歸らざりしも  
のを見え、余が脱藩者たることを知れるものなく、且船長、機關手を始め、其他の乗込員に至る  
迄多くは藩の海軍所に養成せられたるものなれば、余の朋友にして、曾て同窓に在て英學を研究

神戸より  
佐賀藩の  
汽船に投  
じ身を成  
行に任す

したるものなりしを以て、流石は舊知の情として何れも喜んで余を迎へたり。只、彼等は概ね佐  
野常民等の手に依て養成せられたるものなるを以て、航海術と軍事上とは多少の教育と熟練と  
を有するも、國事に對しては寧ろ冷淡の傾ありしなり。

船中の人  
に説く

航海中は人々皆な無聊に苦み、自他の談話を以て時を費さんと欲するものなり。余は親しく江戸  
と京都との實情を視察し來りたれば、胸中固より談柄に乏しからず。且彼等と航海を共にすると  
殆ど數日なりしを以て、則ち諄々として説くに世界の氣運を以てし、諭すに國家の大勢を以てし、  
大義の存する所、士は死を以て之に盡すべきものなるを論じ、且我藩の方向に就き特に論じて曰  
く「天下の大勢は將に旦夕を以て決せん」とす、此機に倒れたるものは則ち無窮に後るゝものなり。  
恰も身は其時に會しながら王政復古の大業に光榮を分つ能はざるものなり。今や 皇室は已に政  
權を收めたりと雖も、天下の大藩にして速に其方向を決せざれば、反對の意見を懷くものをして  
轉た其氣焰を養はしむに至るべし。彼佐幕黨は 天子幼冲にして事に與り給はざる事を揚言し、  
直に薩長を敵として戦端を開くも料り知るべからず。事、此に至らば、天下は二分すべし、否な  
南北朝ならぬ東西朝を生出して世の奸雄をして之れに乗せしむるに至るも亦料り知るべからず。  
嗚呼、是れ國家の大事にあらずや。我藩の如きは速に兵を擧げて京師に至り 天皇陛下の下に屬  
し、幕府をして再び相競ふ心を起さしめず、最先に列藩の模範となりて天下に向ふ所を知らしめざ



るべからず。諸子は皆武を以て世に立つものなれば此時に當りて地歩を選ぶ事なく未曾有の變事に對して若し願望するが如きことあれば、平素鍛鍊したる技倆は、何れの時に、誰が爲めに、用をなさんとするぞ。諸子幸に志を決して我藩の爲に盡力する所あるべきなり。徒らに時日を遷延し、君主をして不忠不義の名を遺さしむること勿れ」との意見を述べたり。

余の船員に諭したる言語は十分ならずと雖も、然れども、余の熱心は遂に彼等を動かしたり。彼等は固より朴直なる武人なり、從來、訓練の素を異にし、器械的に生長せし觀はあれども、實際の事に當りては是非を辨するの明あるなり。且藩内にのみ止りて二十年前の夢をのみ夢みるものとは異にして四方に歴遊したるの故を以て、多少見聞を廣め居るなり。彼等は余の説を熟らゝ聞き終りて誠心に同意を表したるもの、如く、余の出來得るだけは急に佐賀に着せんと希望するを以て彼等は豫定したる馬關の碇泊を見合はせて直に長崎に航し、夫れより直に佐賀に向ふことと爲たり。元來、神戸、馬關の間の航程は通常一晝夜半若しくは二晝夜に達し得べき所なるに、折悪しく風波甚だ高かりしため、今回の航海は實に六日間を費し、且少しく船體に損所を生じたるが爲め、更に長崎に一晝夜の停泊を爲すに至り、意外に日子を費せり。但長崎に於ては同志の士交々尋ね來りて京都の事情を聞き、瞬時も猶豫すべきにあらざるを覺り、余と共に佐賀に歸り、力を戮せて奔走すること、爲りたるより、一晝夜の停泊は寧ろ幸福の事なりし。

余の熱心は彼等を動かせり

山崎景則

面會を原田に請ふ

船の士官山崎景則(今の豫備海軍少將)は、余と親戚の關係あり、且彼は當時、佐賀に於て尤も閑叟の信任を受けたる側年寄原田と近親なるを以て、余は之に縁て先づ原田に説き、因つて親しく閑叟に面會し、余の意見を吐露する便を得んと圖れり。船は夕刻に佐賀川口の上陸場に達し、是より城下迄は三里の行程なれば、余の佐賀に入りたるは恰も夜半なりき。然れども、余の心は急切已むべからざるものありしを以て、山崎を促がして原田を訪はしめ、告ぐるに「今日の事、佐賀藩の爲めに決して黙すべきにあらず、是を以て、脱藩の身を以て敢て即刻直面調を得て天下の大事を訴ふる所あらんとす」る旨を以てせしめたり。流石の原田も近日來の形勢には多少の疑惑を懷きつゝありし折柄なれば、直ちに山崎の言を容れたれども時、已に夜半を過ぎたれば明日未明を待ちて面會せんと答へたり。是に於て、余は約の如くに彼の家を訪へり。

是れより先き、我藩に於ても、時勢の變遷と四方の傳説とを見聞して、稍々疑惑する所あり、因て特に賢達と信する原田を派して京都の實情を視察せしめ、其報告を待つて徐ろに之に應ずるの策を講せんと欲し、原田は明日を以て佐賀を發し京都に向ふことと爲りし際會なり。されば、余は從來、彼と直接の面識なく、従つて親しく言語を交へたる事すらあらざりしも、彼は今、余が新に京都より歸り來りて大事を告げんとするを聞き、心に愕き遽てたれば、余が言説に耳を傾け、聽き終りて始めて時勢推移の急激なるに驚愕したるもの、如し。依て余は更に言を爲して曰く「大

原田余が言語に耳を傾く

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



勢已に決したり。京都より關東を滅すに非れば、關東より必らず京師を壓制するに至らん。此二者の末流に在ては、今已に戰端を開きたるやも知るべからず。此時に當り、天下の重きを以て自ら任じ、且他藩に許されたる佐賀藩にして茫然として向ふ所を定めず、其重臣たる者が漫然と出で、京師を視察せんとする様のことあるならば、天下の具眼者は、吾が佐賀藩を目して夫れ何と可言はん。想ふに我老公は天下に率先して藩政の改革を爲し、内は皇室の爲に力を盡し、外は外國に對して我が國威を發揚せんことを勉め、威名は赫々として久しく列藩諸侯の瞻仰する所と爲りたれば、今此時にして晩節を持し、餘勇を鼓し、以て大に爲す所なくんば、後世の史家は老公の言動を批評して龍頭蛇尾と爲すに至らん。是豈に足下等の罪にはあらざるなきを得んや。今は、老公は年と病との爲めに惱まされて稍々時事に疎なるの觀なきにあらず。只、之を輔けて所謂、掉尾の運動を爲さしめ、以て佐賀藩の面目を保持するは足下等の任務にあらずや。且夫れ、皇室の安危に關し、國家の大難既に目前に迫る、是誠に志士の當さに死を報効すべき時なり。是を爲さずして漠然と京都に入り、京都の事情を視察せんとするは、遲緩も亦甚しからずや。事頗る僭越に屬すと雖も、今日の急は復顧慮するの暇なし、冀くは足下に依て老公に拜謁するの榮を得たし。若し足下が余の意を聽許されずんば、余等の同志は別に決心する所に從つて動くの外はなきに至らん。機は得難くして失ひ易し、猶も徒に時日を遷延しなば大事必ず率然として至りて、

原田に語  
て老公へ  
拜謁を求  
む

天下みな我佐賀を敵とするにも至らん。其不幸と不面目とは果して幾干ぞ。是余が敢て直言して憚らざる所なり、幸に之れを容れよ」と陳じたり。

老公に謁  
見を許さ  
る

若し此言説を數日前に陳じたるならば、彼は憤然として余を咎めて非禮と怒り、急激と嘲り、一喝して復た聽さざりしならん。只時と事實とは彼が膽を破りたりしと見え、毫も斯くの如き言色はなく、余の言説に同意したるには至らざりしならんも、老公への謁見は遂げしめんと欲したる者の如し。但し彼は其事の重大にして急卒の間に決すべきにあざれば、暫く心を靜かにして待つべきよしを諭せしより、余は一瞬に千歳の好機を失はんとを説き、今にも謁見の榮を得んとを迫り、退いて其消息を待ちしに、夕刻に至る迄何等の沙汰なかりしを以て、こらへず更に之に迫りければ、漸くにして明朝、執政、參政列席の上にて謁見を許さるべしとの返辭に接したり。

佐賀藩の慣例として、苟も大事に就きて意見を言上するものあらば、執政、參政、列席の前に之れを聽かしむることゝなりたれど其は何となく儀式的に止まるの感あり、直接に藩主の心を動さんとする場合には望まじきことにあらず。今回余の謁見を求めたるは、親しく閑叟に面接し、左右を遠ざけて十分に所見を吐露し、以て彼の心を動かして直に斷行するに至らしめんと欲せしなり。是を以て、執政、參政列席の場處に於て漫に意見を陳述し、直に退くと云ふが如き儀式的の謁見は甚だ不滿とする所なれども、翻て願れば、身は一介の書生なるに斯く迄主、執政等の

執政參政  
列席にて  
儀式的の  
謁見



意を動かし、遂に列席の前に於て意見を述べることとなりたるは、寧ろ意外の特例なるを以て、謹で其命を承けたり。

翌朝、時刻を計りて出應したれば、藩廳の書記は余に一片の書付を渡して、告ぐるに調印すべきを以てせり。怪んで披き見れば、其文に「拙者儀、藩の法制をも顧みず、妄りに身を脱して京都に出入せしと重々恐入申候。只、衷情の存する所は、天下の爲に藩の利害を思ふに切にして、身の安危を思ふに暇あらず、事こゝに至りたる故に、幾重にも仁恕を仰ぎ奉る」と言ふに在り。余は少しく意外の感を爲したれども、書記等が之を君主の面前に出づるに必要なりとの事を告げたるを以て、其言ふに任せて調印を爲したりしに、彼は之と引換へに「其方儀、脱藩の罪を犯す、事甚だ軽からずと雖も、其衷情を酌量し、今回に限り特別に其罪を許す者なり」との書面を附與したり。封建末路の儀式は笑ふべきが如くなりと雖も、藩制の存する間は是れも亦た止むを得ざりしものなり。

是に於て漸く閑叟の前に出づるを得たり。余の閑叟に於ける、是まで數々謁見を得て、其前に於て講義を爲し、或は從つて京都に到りし事あれども、其直接して談話を交へたるは實に今回を以て嚆矢と爲す。

閑叟と始めて言を交ふ

謁見前の儀式

述ぶるをや。今余の謁見して陳説するは實に破格の特例なりき。嗚呼、余は十數年來閑叟を思へり、閑叟の爲めに働けり、誠意に其爲に働きて其意に忤ひ、失敗に失敗を重ね、不遇に不遇を極めたるもの。今に至り始めて彼に直接して我意衷を吐露するを得たれば、余が満足の意氣は自ら軒昂し、胸中は愉快の念を以て満されたり。

閑叟を説く

是に於て、余は侃々諤々として江戸及び京都の近狀を詳述し、而して幕府の遂に滅亡を免れざる所以、大政の已に統一に歸しつゝある事情を説き、且つ曰く「勢運已に斯くの如し、然れども之を完成すると否とは多く人力に關す。我藩の如く天下の重望を負ふものにして、此際、速に其方向を決するなくんば將さに不測の災を醸さんとす。乃ち薩長二藩の如きは、他の大藩の動かざるを見て、方に世人が想像する如くに、眞に皇室を挾んで覇者の業を成さんと欲するに至るやも測り知るべからず。何となれば、之れを成すと否とは全く周圍の制裁如何に依るものにして、且成し得べき事を成さんと希望するは、實に人の情なればなり。然れども、我藩にして進んで其間に立ち、更に皇室に對して其旗幟を明にするに至らば、是まで勤王と佐幕との間に躊躇せし者も漸く之に倣うて王政の下に歸順するに至るべし。而して幕府も亦自ら其分を顧みて選り所を知るに至らん。果して此の如くば、我國の運命は茲に安全強固を告げて、將來、其國光を發揚するに至るべし。且夫れ、我藩の藩論の如何は、一般有志者の深く注目する所なり。假令今日は多少

吾藩の藩

少壯時代の經歷及佐賀藩の事情



薩長諸藩の失望を買うたる嫌なきにあらざると雖も、若し老公にして蹶然と起ちて國難に當るならば朝廷は勿論、薩長諸藩は必ず喜んで之を迎へん。而して列藩は之を觀て今回の事は、全く大勢の然らしむる所にして、薩長の異志に出でたるにあらざるを知るに至り、且若し、薩長にして果して異志を有すとすも、老公にして儼然として京都に在らば、彼等は決して其形跡を見はずを得ず、却て相共に盡瘁して、皇室の尊榮を計り、國家の基礎を確立するに至るべきなり。然らば、我藩の一舉手一投足は、實に天下の形勢を定むるものにして、且天下の危機を變じて社稷を富岳の安きに置くものと言ふを憚からず。先んずれば人を制し、後るれば人に制せらる。今にして若し一步を誤らば、我藩は遂に永く人後に落ち、從來老公の技倆、功勳、威望、名聲は一朝にして滅却せん。人の一生は終を克くするを大切とす。九仞の功を一簣に缺くが如きとあらば、遺憾千萬にあらずや。嗚呼、吾藩の運命は正に一髮の間に懸れり。今苟も老公にして起たんか、以て憂なかるべし。起たざらんか、忽ち濟ふべからざるに至らん。老公の起否は、實に吾藩の運命に關するのみならず、實に天下の安危に關する者なり。且今日の形勢は竟に肉飛び、血舞ふの慘狀を免かれざるべし。否な、京都に於ては既に其端を啓きしやも知るべからず。是も只、幸にして老公の起つあらば、其激甚に至らざる前にして之を制止するを得べし。事急、事急、一日後るれば天下一日の危難を加へん。嗚呼、曉鐘已に響けり、願くば老公速かに臣が言を容れ、臣等をして

共に旭日の耀々たるを見るの榮を得せしめよ」と。反覆陳辯以て其意を動さんと勉めしも、彼は至つて冷然たる有様にて唯「委細聽置く」との言を漏らせしに過ぎず。嗚呼、此結果は如何に成行くべきか、事機は旦夕を争ふ余の身に向つては實に一方ならざる憂慮を懐かしめたり。

是れより先き、山口尙芳は藩に歸りて、執政鍋島上總に依り、目下の急務を説きて藩論を動かさんとせしも、未だ其目的を達するに至らず。上總は有名なる門閥家なるも、今は閑叟の信用、昔日の如くならず、寧ろ失意の地位に立ちし故に、彼の力を以て閑叟を動かさんとは頗る難事に屬し、なり。此日は彼も余の陳述せし所を聽きたりしが此分にては必らず其目的を達すべしと言へり。然れども、余は猶心に安せざる所あり、更に參政伊藤及び中野等を訪うて説く所ありしに、彼等は孰れも熱心に賛同の意を表せり。蓋し彼等の意見は、從來、余等と相近きものありしのみならず、今は稍々不滿の地位に立ち居りしを以て、切に此行の斷行を望み、而して之に乗じて其勢力を回復せんと欲せしなり。

然れども、藩の爲す所は依然として舊時に異ならず。但だ其後は兵隊並に軍艦等の準備を爲すことなきにあらざりしも、其處置の遲緩なるは、之を以て目下の大事に應せんとする決心なりと思はれず。嗚呼、余が滿腔の熱血を濺ぎて吐露したる言説も遂に採用せられざるか、抑幾分の影響をも與へざりしか、誠にうたての限りなる哉と、焦心苦慮、一日も自ら慰むる能はざりしに、慶



應三年も早や將に暮れんとするに及んで、老公上京の布達は漸く傳へられたり。然れども、其期日は未だ確定せず、不幸にして來年に移るが如きことあらば、俗の謂ゆる新年の儀式等の爲めに必らず遷延する所あるべきを思ひ、如何にもして其年内に出發せしめんと欲し、其二十九日たると三十日たるとを問はず、斷然東上の途に就くべきを主張したれども容れられず。遂に慶應三年も暮れて四年の春を迎ふるに至り、彼等は依然として悠々たる年頭の禮式を舉行し、全く國家の危急を顧慮せざる者の如し。今や、余等の心緒は亂れて殆ど狂せん計りと爲れり。是に於て、頻りに同志と共に奔走し、此上にも時日を遷延するが如き形跡あらば、余等は閑叟に先ちて京師に入らんと志せり。果然、彼等は遷延せり、是に於て、余等は遂に決心する所あらんとす。

島義勇は元來短氣の人なり。此の事情を見て憤慨禁する能はず、過激の説を以て藩に迫りて曰く「吾藩にして遷延する此の如くなれば、是遂に頼むに足らず。余等は既に志を決する所あり、不日將に斷然と藩を棄て、京都の急に上らん」といひし。此言説に驚かされて藩吏等は大に狼狽し、爾後は余等の運動に就て嚴に監察する所あり、爲めに少なからざる迷惑を感ずるに至れり。後に聞く所に據れば此時閑叟も藩吏等の所爲に就て大に憤激したりとなり。蓋し彼は老年病衰の故を以て、成るべく閑靜の日月を送らんとを期し、京都、關東等の形勢に就ては、一に他の報告を待ちて心に思慮する所あり、彼自らも早晩に時勢の大變革を來すべく、而して到底幕府は永く

閑叟藩吏等の所爲を憤る

其位地を保つと能はざるべしと豫想し居しも、報告者は概ね其實を以てせざりしなり。彼等吏員は薩長のみを幕府の敵と爲し、ひたすらに幕吏等の言を信じて、幕府の基礎は依然堅固なるものとなし、従つて幕府に不利なるの説は全く薩長の構造に出づるものと爲し、一々之を報告するに至らず。之を要するに藩吏等は其先天頑愚の性質を以て君主の聰明を蔽ひしものなり。世人或は閑叟を評して偏に薩長を嫌ふの餘、國事に對して冷淡なりしものなりしと爲す者あるも、是其實を誤りたるものなり。

ソハ姑く之を措き、余の談論は漸く進んで明治維新の境界に達しぬ。是迄は余が書生としての經歷、是より以後は余が實際國事に干りての運動なり。乃ち余の一生も維新の改革と共に改革せしなり。従て其談論の上に於ても亦一區域を爲さざるを得ず。然り、其區域を爲して維新前の小歴史を結ぶに當り、尙茲に一二の言ふべき事あり。余等は當時の一般人士と同じく基督教を以て國家に危害あるものと思へり。然るに、余等先きに英書を學ぶに當り、毎々良師を缺きしを以て、已むを得ず、基督教の宣教師と稱せられたるウキリアム、并にフルベッキ等に就て英書の質問をなし、且其講義を聽きしとありしが、少年者の好奇心として、側ら基督教の事をも研究せんと思立ちたり。當時基督教は猶嚴禁なりしも、學理上より研究するは毫も不可なるなしと信じたるを以て、余は副島と共に凡そ一ヶ年半の間之が研究を爲せり。然れども彼等の言ふ所は、大概淺薄

余の一生も維新と共に革新す



にして、恰も怪談奇話を聴くが如く、學識あるものに向つては格別の價値なしと思へり。只、余等は其ために又多少發明したる所なきにあらず。即ち基督教は是まで世人の目したるが如く邪説魔法の分子を含むものにあらずして、等しく社會の人心に向つて道德を保持するを目的とするものなることを知りしなり。簡短に言へば、基督教なる者の大體を知り得たりしなり。

之れに就き、一の奇談あり。即ち佐賀に於て、副島と余とフルベツキ等の家に入出して基督教を研究することを聞知したるもの、流言して「副島と大隈とは表面尊王攘夷の美説を唱ふるも、實は心氣已に腐敗して今は専ら邪宗引入れに従事するものなり」といへり。彼等の無識なる、實と信仰との異同を問はず、單に余等がフルベツキ等の家に入出するの事實を以て、邪宗を引き入るゝものと認定したるに似たり。

其後凡そ二年を経て諸外國に對する宗教の問題起るに及んで、余は自ら其局に當り各國公使との談判を爲したる事ありしが、彼のフルベツキよりして學び得たる基督教の智識は其時、余に向つて少なからざる利益を興へたり。余にして若し其智識なかりせば、或は漫に基督教は邪宗なり、魔法なりとの言語を以て反對を試み、彼等各國公使をして日本政治家の無學無智を嘲笑せしめしやも知るべからず。然るにさはなくて、多少、相當理由を開陳して彼等が批拒を試むることを得、彼等をして日本の外交官も一通りは基督教の教義を研究したるものなりとの感念を懐かしめし

の蓋し全く經驗の餘澤と云ふべきなり。

余は又フルベツキに就て算術を學べり。即ち學べりと言ふも、其實は唯其初歩を學びしに過ぎず、今日の小學科を卒へしものども比すべからざりし。然りと雖も是まで算盤をつゝくは士君子の耻づる事といふ諺のまだ脱却せぬ當時に在りては、他に一人の之れを知るものなくして、余は實に唯一の算學者にてありしなり。而して、余は之が爲めに利益を得たること少なからず、後日に余が自ら財政の衝に當りて、多少の規畫を爲し得たるも、職として之れに由來せずんばあらざるなり。

## 第二章 幕府列藩の形勢及維新改革の原動力

維新の鴻業は何に由りて完成せられたるか、語を換へて言へば、彼江戸城と共に石礎石壁を以て無窮に傳へんと築造せられたる觀ありたる徳川幕府が一朝にして廢滅に歸し、飛鳥をも落し河水をも逆流せしむるといふ程の勢力を把持したる征夷大將軍が魔術師の魔鬼に離れたる如く、常人の行ふ事だも行ふ能はざるに至りたるは抑何の由なるぞ。花は櫻木、人は武士と、時を得顔に咲き盛りたる全國大小數百の櫻花が、左したる風雨にも逢はず、「大政奉還」てふ一封の奇文字に由りて落花狼藉となり泥土に委したるは如何なる事ぞ。是世人の共に知らんと欲する所なる可し、



幕府列藩  
が權力を  
失ひたる  
に由る

余少しく其理由を解かん。

大隈伯昔日譚

維新の改革は世界の大勢より刺衝せられたるは今茲に言ふを須るす、封建の破れたるは其破るべき理由の較著として存す、他なし、幕府及び全國諸藩が其權力を失ひたる、否な、其權力を滅したること是なり。世人は或は幕府及び諸藩が儼然として其形貌の存するを見て、猶爛熳たる櫻花と眺めしもの少なからざりしも、是は畢竟其幻影を見て真相を誤りたる者にして、其實は根幹業に已に腐朽して微風にだも勝へざる有様と爲りたりしを知らざるに由るのみ。左は言へど其は今日に於て視察し得べき事なるのみ。當時の實地に在つての志士の心情は固より一様ならざるものありしなり。

顧るに幕府の十一代將軍家齊の治世には、我國開關以來、實に未曾有の奢侈淫逸を極めたるの時なりき。家齊は凡庸の君にあらず、其初に於ては、銳意以て國政を調理したるも、中年以後は、二百年來打續きたる太平に慣れ、大に驕奢を恣にし、遊逸度なく、絃歌の聲は日夜絶えず、天下靡然として風をなし、士氣頹廢、武備懈怠、祖宗の遺訓たる勤儉質朴の氣風は漸く地を拂ひ、藏帑耗竭、財政紊亂を極めたと、名狀す可からざるの形勢に陥れり。若し、此隙に乘じ一大藩の蹶然として叛旗を翻すか、或は草莽に豪傑の臂を揮うて大呼するあらば徳川幕府は此時に傾覆したるやも知るべからず。然れども士氣の頹敗は獨り徳川幕府に止まらず、各藩各州皆これに同化

天下を擧  
げて怯弱  
に陥る極  
腐敗の極

し、集會は大抵之を妓樓に開き、甚しきは城中に於て公然と骨牌を弄し、博奕をなすも怪むものなく、賄賂公行私謁憚るなく、天下を擧げて蕩然として怯弱腐敗の極に陥れり。但し文學美術は此際に發達したるものあらんも、却て之が爲めに文弱の弊習を増長し、殆んど收拾すべからざる形勢を呈するに至れり。勢、窮すれば茲に變ず。此の如き景況に陥りては、なごか一大反動の起らざらん。果して然り英邁果斷の資に富たる水野越前守は此際に奮然と蹶起し、當時に稀なる手腕を揮つて弊政改革の衝に當れり。一方には、政費を節減し、冗員を淘汰し、一方には、淫逸怯弱の風習を嚴制し、芝居、妓樓の如き士氣を腐敗するものを制限し、少も假せず。其改革は、恰も嚴霜烈日の如く、峻厲を極めしかば、多年、安逸怯弱に浸潤したる群小の徒は囂々として非難し、如何にもして水野を陥れんとしたり。

特に列藩及び士大夫の負債山積し、之を如何ともする能はざるに至りしを憂ひ、乃ち、一種社會主義に近き政畧を斷行し、是迄の貸借に關する訴訟は總て之れを聽斷せざること爲したり。有司は之を稱して徳政といひたれども、實は天下多數の士を苦めて、以て一部の少數者を利するに過ぎざりし。故を以て、一般人民の非難攻撃は益々激甚なりし。然れども、彼は毅然として其難局に當り、敢往勇進して毫も避くる所なく、封建の末路に於ける掉尾の運動を爲したりき。

河東の深川に廣大なる庭園を造り、其中に東海道五十三驛に擬して種々奇巧を盡したる華美の樓

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力

水野越前  
守の弊政  
改革



觀園地を設け、遊樂に供したる某藩主が、之を聞いて驚惶し、俄かに之を取毀ち、且數千金を抛ちて製作したる石燈籠及び其他の玩好に供したる珍器を邸内の池中に投じて埋めたりと言ふにて、當時の人が水野の政畧に驚惶狼狽したる如何を想見するに足らん。彼は此の如き改革をなして一時は殆ど其の功を奏するに至らんとしたるも、大厦の傾く一木の支ふる所にあらず。且彼は専ら幕府の威力に據りて遂行せんとしたるに因り、忽ち其反動を被りて、半途にして失敗するに至れり。

斯くて、彼は幕府の犠牲と爲り畢れり。天下の多數は彼を蛇蝎視せり。然れ共、經世濟民の士は彼の改革に向ひ竊かに賛同の意を表し、且時勢を察したる藩々は一大改革を斷行するの已むべからざるを曉り、銳意畫策する所あり、其舊體の刷新に於て共に成功せしもの、如し。但し、是等の諸藩は幕府及び其他の諸藩に比すれば、其素に於て異なる所ありし、否な、少くも自ら責任を負うて改革を決行する人物を有せし者なり。即ち彼薩藩の如き、長藩の如き土藩の如き、將た水戸、越前、尾張、紀州、其他の二三藩の如き、上に英明の君あり、下に有爲の臣あり、上能く下を容れ、臣能く君を佐けて以て至難の業を成すを得たりしなり。現に長藩の如きは、一時非常に懦弱に陥り、一人の敢て天下の安危を談じ、民人の休戚を慮るものなきに至りしに、幸に、當代の藩主温厚にして(時勢の真相を看破するの眼識はなかりしも)能く人を容れたるを以て、有爲の

改革を成  
就したる  
藩々は他  
と其素を  
異にす

士輩出して其用を爲さんことを樂み、與に士氣を養ひ、國力を豊かにし、以て能く其積弊を一洗することを努めたりき。

佐賀藩亦  
分外の驕  
奢を爲す

我佐賀藩の如きも、社會の風潮に連れて分外の驕奢を爲したるに因り、財政痛く紊亂し、江戸の藩邸に除夜の燈火をも點する能はざるに至れり。除夜の燈火とは、大晦日に各室に數多の蠟燭を點する事なり。困窮の極は斯の如し、一大改革を爲すの必要に迫りたり。此時に當りて閑叟は家督を相續し、例に依りて一旦國に就いて藩政を視んと、豫じめ時日を定めて、發程の準備を爲さしめ、其日に至り午前六時、行列堂々鹵簿整々、已に其準備を畢りたれども、七時を過ぎ、八時を越え、九時に至るも、更に出發の模様あらざるにより、閑叟は怪んで頻に促せしに、何ぞ料らん、是實に已むを得ざる事情に由らんとは。事情とは、道中の旅費未だ調達せざりしなり。主任の吏員は、閑叟の督促を受けるの急なる、窮迫して出る所を知らず、遂に其實を吐露して告白したれば、閑叟は大に其不都合を叱責したるも、熟々、其實況を察して慨歎を發し、潜然として涙を揮て單騎にて出發せんとするに至れり。雄藩の君主にして、始めて家督を相續したる晴れの首途に於て、其旅費に窮する此の如き、以て當時の情勢を推知すべきなり。是時、閑叟の落涙は心腸に徹し、其國に就くや、直ちに數百年來の弊習を打破し、官制を改革し、財政を整理し、民業を勵まし、士氣を振はし、老朽用に堪へざるの官吏を免黜して、少壯活潑にして有爲なる書生に代



へ、躬ら率先して封内を巡回し、民の疾苦を問ひ、竹笠茅鞋、僻村山谷を跋渉して、以て富強の道を開けり。又、淫祠を毀ち、社寺領の土地を沒收するなど、疾風迅雷の勢を以て藩政の改革に着手したり。是等の諸改革は、みな閑叟の胸臆より出でたる者にして、左右の人物は惟命を受けて局部に奔走したるに過ぎざりき。

藩内の百姓にして田畠を有する者は其作する分を五町歩に限り、其餘は盡く小作人に貸與し、十年間は小作料を惠施すべしと命令せり。夫れ直ちに田畠を沒收すと云はずして、只其土地を貸與し、小作料を惠施す可しといひしは、以て封建制度の當時に於て、已に人民の權利は侵害すべからざるを覺知したるを見るべし。但し、此令の爲めに小作人は俄かに榮えて、地主は俄かに零落し、歡喜の聲は悲泣の聲と相和し、其紛擾實に一方ならざりき。斯くて、十年の期限に至りたれば更に十年の延期を命じ、又其期限満しかば、更に十年の延期を令し、殆ど其窮極する所を知らず。而して明治元年は正に其均田實施より。三十ヶ年目に當り、遂に明治政府の一問題となりたり。此事は、實に社會主義論者の爲に實地の例證を與へたる者にして大に攻究すべき價值ある者なりとす。

之を聞く閑叟嘗て薩の島津齊彬と相見え、其談、財政に及びしに、齊彬語りて曰く「我薩藩に於ては十數年來の經營と苦心とを以て漸く一百萬兩の貯蓄を爲し得たり」と。閑叟、深く其儉徳を

我藩と薩  
藩との貯  
蓄比較

他藩の君  
主

稱し、且、余も亦節約と方策とを以て藩の富殖を圖りしも、從來の負債多かりし爲めにや、貴藩に比すれば僅に三分の一の貯蓄を爲し得たるに過ぎず」と答へたることありしと。思ふに、我藩は薩藩に比すれば始めより其財政は、非常に困難なるものありき。故に其貯蓄高の多少を以て、直ちに其苦心經營の度を律するに足らず。現に、閑叟は、殆ど他に比類なき銳意と熱心とを以て事に従ひたりと雖も、餘多困難なる事情は彼をして僅にかゝる些少の貯蓄を爲さしめたるに過ぎざりし。若し夫れ、他の諸藩に至りては、其君主、何れも菽麥を辯せざるの痴兒なりし。否な、寧ろ金銀は自然に庫中より湧出づるものなりと思へる放蕩息子なりしを以て、到底自ら其紊亂したる財政を整理する能はず、一に之を其臣僚に委ねたりしも、所謂弱將の下に強卒なきと一般にて、其臣僚とても、多くは暗愚頑迷にして、能く之を整理する方法を知らず、漫に献金若くは御用金等の名義を以て管下の人民より、之を徵發したりければ、左なきだに其負擔の重きに苦みし人民は、益々困弊に陥り、紛々囂々、怨言途に滿ち、天下の危機漸く熟するに至れり。开は姑く之を舍き、薩、長、土、肥及び其他の四五藩が汲々として國力の富殖及び武備の整頓に心力を注ぎたる要旨は如何。是必らず確然たる目的の存するあらん。若し目的なくんば、則ち是等の諸藩も亦他の諸藩と其末路を同うせんのみ。然り、彼等は確然たる目的を把持せしなり。彼等は先づ泰西の風潮に刺撃せられたり。彼等の慧眼なる、彼軍艦を見、彼武器を觀、其富強の狀

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力



薩長土肥  
等藩政  
改革の  
目的を  
大なる

を察し、其智識の度を探り、以て我の能く彼に較せざることを知れり。既に之を知れり。是を以て、彼等は先づ民力を休養し、財政を豊富にし、士氣の振興を圖り、國防の整備を努めて、以て尊王攘夷の大目的を完うせんことを期せしなり。今日より之を考ふれば、彼等の目的は猶空漠たるを免れず。蓋し當時に在て我の彼より長ずる所は、唯軍艦武器等の精且大なるに在りと爲し、我苟も之れを得て以て其使用を習はさば、直に彼外人に敵すべしと思想したるなり。抑彼の長を使用し、彼の術を師となして以て、彼に當らんとは、誠に至難の望みと言はざる可からず。然れども、こは惟道理上の推定のみ、當時に在て其最後の目的は那邊に存したるやを問はず、先づ此の如くせざるべからざるの必要ありしなり。何れにせよ、天下滔々として皆一日の苟安を貪る時に於て、是等の諸藩が率先して外難の衝に當らんと、敢て國家の重きを以て自ら任せしは、誠に稱賛すべきの事にして、此の氣力こそ我が帝國を支持して以て今日に至らしめしものならん。

此間に幕府も亦改革を爲さざりしにあらず。海陸の軍備を擴張し、横須賀に造船場を設け、疊書調所其他の學校を興して英佛等の書を讀ましめ、以て頻に規模する所ありしと雖も、是幕府に柱梁の士ありて自ら任じ、自ら圖り、以て此を爲したるものにあらず。多くは、各々の建言などの風潮に従つて左顧右眄の間に起したるに過ぎず。蓋し、當時の將軍は深殿幽園の内に人と爲りたるものにて、固より以て天下の大勢を遠觀する明智もなく、而して其閣老とても、水野先づ去り、

幕府も亦  
改革を  
爲さざり  
しにあらず

井伊次で斃れ、今は一人の剛骨男兒あるなし。嗚呼、家貧にして賢妻を思ひ、國亂れて能臣を思ふ、人傑は夫れ眞に必要なる哉。

余は思ふ、若し此時に於て、幕府に傑出の一丈夫あり、夙に一大勢の赴く所を察して、豫め是に我應ずるの策を取り、其地位に據て嚴然と天下に呼號し、且天下に率先して以て覇府たるの義務を全うしたるならば、徳川幕府は尙ほ數年若くは十數年の命運を保つを得たらんに、惜哉、遂に斯る偉丈夫なき故に、其形體上に於ては稍々進歩したるが如くなりしも、其精神は依然として舊に依りて變ずるなく、且毫も一般吏員を駕御統一するものなければ、人々個々に相衝突し、其の吏員は、大概、守舊頑愚の徒にあらざれば宴安逸樂の輩にして、互に其情意の欲する所を逞うして放縱淫濫、毫も節制する所なく、従つて志氣益々衰へ、財政愈々困難し、吏員は其困迫に堪へず、徒らに事に託して其難を避けんとし、敢て挺身して之れを矯濟せんとするものあるなし。斯る脆弱のものに重任を負擔せしめんが如きは天も亦た無情と感せしなるべし。

然るに、或る五六の藩々は前にも述べし如く、兎まれ角まれ、藩政改革の目的を達し、不完全ながらも新思想にて養はれたる士氣は稍々發揚し、新智識に依りて導かれたる軍備は頗る整頓し、之を幕府に比すれば殆ど正反對の傾向を生じ、即ち一は昇り、他は降り。一は老衰したる病者の如く、進行する所は唯だ墓所あるのみ。他は少壯なる男兒の如く、希望は將來に滿々たり。彼は

五六の藩  
は改革の  
目的を達  
せり



水の低きに就くが如く次第に地下に入り、是は氣の蒸騰するが如く次第に青空に向ふ。始めは幕府を恐るゝと鬼神の如くなりしもの、今は其外交の難局に遭ふて、謂ゆる『ドシ／＼廻り』を爲すを見て、其厄弱にして且無定見なるに驚き、斯くては、國家の事、竟に自己の手腕を要せざるべからざるを思へり。

社會は活潑なる競争場なり、歲月は優勝劣敗の事跡を送迎するものなり、徳川の祖先が、何程に堅固なる幕府の基礎を築き、其幕吏が如何様に無限の權力を利用し得る地位に立つとも、今時勢の變遷に際しては、遂に實力競争の通則を免るゝ能はず。説きて此に至れば、必ず一事の注意すべきあり。其は他にあらず、藩政改革の原動力、否な寧ろ維新改革の原動力は果して那邊に在るやを審かにすることは是なり。余は明かに斷言す、其謂ゆる原動力は、偏に有爲なる藩士の手に在りて存せしと。

思ふに、水戸の烈公、土の容堂、薩の齊彬、及び吾藩の閑叟の如き、何れも當時屈指の藩主にして、共に英邁活達を以て稱せられたりと雖も、是必ずしも彼際に於て獨立獨行し、泰然として、萬難を排する技倆を有せしにあらず、多くは皆二三藩士の力を假りて以て其大を致し、其榮を加へたるものなり。

境遇は能く人物を造る。文化文政以來、時勢の必要は幾多の英雄をして輩出せしめたり。但し眞の

英雄は、何國、何時に於ても、微賤より起りたるものもあり、百千回水火の際に投入して其身と其心を鍛錬したるものもあり。然るにあらざれば、能く盤根錯節を決斷して、能く其目的を達するなし。薩、長、土、肥を始め、此際に頭角を顯はしたる藩々は必ず其藩士中に二三乃至五六の人傑ありて其藩の光榮を保ち、其藩主をして能く賢明ならしめたるべし。蓋し、君主專制の世に在りては、人傑も藩主の容るゝ所とならざれば、何事をも爲す能はざるの事情なるを以て、能く之れを登用したるの藩主は、藩政改革、否寧ろ維新改革の上に偉大の力を用ゐたると固より論を俟たざれども、其實際の原動力は則ち有爲なる藩士の手に在りて存せしなり。之を反言すれば、藩は則ち名にして、二三乃至四五の藩士の實に依りて成功せられたるなり。只、其謂ゆる、名は當時甚だ貴重なりしものにして、苟も其聲を擧げて之を天下に徹せしめんと欲せば、必ず其名の下に於て之を發せざる可からざりしなり。

此の如く是等數藩の藩士は、共に維新改革の原動力を發揮したるものなりと雖も、其當時の境遇は、實に憐むべく、悲むべく、又嘆すべきものなりき。蓋し、彼等をして其言はんと欲する所を言ひ、行はんと欲する所を行ひ、臨機應變の處置に出るを得せしめたらんには、彼等は能く愉快に、且比較的迅速に天下を掃蕩するに至りしならんも、其地位は實に十重廿重に取巻たる壓制拘束の牢獄に座して以て遙に世上の談話を爲すもの、如くなりし。現に我藩の如きは、已に一方に



於ては、他に率先して舊來の弊風を打破しつゝ、あれども、一方に於ては、尙ほ依然として奇怪の制度を存したり。即ち藩士は、一定の年齢に達すれば、毎月朔望に藩主へ謁見を爲すを例となしたれども、其時藩主の謁を賜ふに、まだ着席せざるに同座に在るもの數百人皆平身低頭して、藩主の顔を見るを得ず、見れば失禮の罪をうく、去るに及んで始めて漸く頭を擡げたり。是名は謁見と稱すれども、實は言容に接するを得ざりしなり。且藩士の間には更に士大將(隊長の如き者)なるものあり、藩の門閥家より其任に當り、一般の藩士は皆な其下に就きて其命令を聽奉し、一舉一動盡く儀式を以て拘束せられ、文武兩道に關することは勿論、冠婚喪祭并に旅行に關する事等に至る迄、一々に皆其嚴格なる干涉を受けざるを得ず。

而して領地外の旅行の如きは、殆ど禁止せられたるに等しく、若し、私に之を爲すものあれば、忽ち切腹の嚴命を受くるに至れり。是を以て藩士等の僅に領地外に出づるを得るの途は、町用向、文武の修行、選抜旅行若くは廻國武術修行の類にして、其場合には必らず免許狀(即ち施行券)を特與せらるゝを例とせり。免許狀は至貴至重の効力を有するものにして、之れを與へられたるものは、鄭重に薄板の間に挟み、更に油紙を以て包み、己の肌に着けて片時も離すを得ず。是を以て、假令、破船、火災等人力の避け得べからざる災厄に遭うて、若し之を失ふことあるとも、其人終に其生命を免るゝ能はず、只之を損じ、之を汚すも、猶重き罰金に處せらる。免許狀は生命

と同一の價値を有するものなりしなり。

聞く、曾て一の僧侶あり、或地に旅行したる際に、其免許狀を遺失したるを以て、再び藩に歸る能はず、止むを得ず、京師に赴き、或る公卿の力に由りて漸く一寺を領するに至りたりしに、事遂に發覺して、藩吏に捕はれて死刑に處せられたる事ありしと。是はまだしもの事なり、彼天下の有無を通ずるを職業と爲す商人すらも亦容易に旅行を爲す能はざりしなり。其偶々京阪に赴き、若くは長崎に出で、商業を營まんと欲するものもあるも、實に一葉の旅行免許狀に其生命を賭せざる可からざりしなり。他藩の商人の我藩内に入るものも亦同じ。其長崎に通ずる道路の如きは、數多の關門を設けて、一々往復の人々を誰何せしめたり。

其他、他藩人と婚姻を許さざりしが如き、老少男女を問はず他藩へ移住を嚴禁したるが如き、脱藩者は必ず極刑の死に致せしが如き、之を今日より見れば實に恐るべく驚くべきの制度にして、人身の自由を束縛すると蜘蛛網を以て隈なく四肢を纏ふに異ならず。彼等人民は誠に凡てに於て『愚蒙なれ』てふ命令の下に立ちしなり。夫れ、智識は競争に由て發達し、見聞は旅行に由て擴充す、然るに、盡く是等の方途を杜絶し、而して其國其藩の富榮を圖らんとするは、亦難いかな。

我藩の制度は、蓋し他の諸藩に比して大に酷烈なるものあり。現に、薩藩の如きは我藩に比すれば頗る寛祐なりしと云ふと雖も、兎も角も、當時の志士が能く其間に處し、陪臣の身を以て天下



の樞機を握るに至りしものは、其の決心山の如く、技倆水の如く、千艱千勇を生じ、萬難萬策を出し、益々窮境に陥りて愈々生路を開くの智謀膽勇ありしに由らずんばならず。

藩士及農商の地位

更に、藩士及び農商の地位に就て考ふるに、固と農を以て國の本と爲せしを以て、商人より農家に轉ずるは許したれども、農民より商估と爲るとは之を嚴禁し、而して士族は農商何れにも關係することを得ず。只、其の地方に在りて小祿家計を立つるに困しむ者は、土着して傍に農業を營むことを許し、之に向つては藩廳より保護奨勵を與ふる所ありし。殊に、閑叟が新たに國に就きてより奢侈を禁じ、淫逸を戒むる法度益々嚴重に赴き、毎月二回乃ち朔望の外は音曲の類を弄するを禁じ、且其日にても、午後十二時後に及ぶを許さず。藝娼妓の如きは、藩内を通じて一切之を禁じ、藩士にして苟くも酒樓に登るの形跡あれば、其同僚より痛く之を指彈し、漸くにして與に相伍する者なきに至れり。衣服もすべて絹布を用ゐるを禁じ、藩主自ら非常の節約を爲し、平素は木綿の衣服を着用したる程なり、是固より美事なり、此くの如きの事實の我藩内に存するは斯道の爲めに大に喜ぶべきに似たり。但し深く其實際を觀察すれば、人々眞に道義上より之れを慎みたるにはあらで、畢竟、極端の拘束法に制せられ、心ならずも之を遵守したるもの、如し。是を以て之を見れば、今日眞に自由平等の權利を敬重するの徒は、必ずしも容易に之を賛成する能はざらんか。されども、事の此に至りたるは必然の結果なり、又彼水野越前守が幕府の沈靜なる濁

水野越前守が濁水に投じたる石を餘波

水中に一巨石を投じたる餘波なりと謂はざるべからず。而して我佐賀藩は、其餘波を受けて最も能く成功したるもの、一なるは固より言ふ迄もなし、全國大小の藩々も亦之が爲め刺衝されて少しなりとも革新する所ありたるが如し。

此の如く幕府及び有爲の諸藩は何れも悔過遷善の傾向を見はし、財政は豊に、軍備は整ひ、封建の勢再び回復して、俄に之を動かす可からざるの形情を呈したるが如くなりしに拘はらず、爾後、忽ち其方嚮を變じて、潰然土崩瓦解して復收拾すべからざる奇觀を現出するに至りし所以のものは抑も何ぞや。

嗚呼、六國を亡ぼすものは六國なり、秦にあらざるなり。幕府及び列藩を滅亡せしめしものは幕府及び列藩なり、他にあらざるなり。彼等或は自ら多少の改革を爲し得たりと信せしならん。然れども、是眞の改革を爲し得たるにあらず、只皮相の改革のみ、形體上の革新のみ。其組織は依然たり。其精神は依然たり。大厦の將に頽れんとするに徒らに其の障壁を修繕し、其牖戸を綱繆するも、殆ど益なきなり。彼等が其末路に於て改革革新を爲す所あり、稍々其氣焰を吐きしが如きも、其實は燈火の將に消えんとして而して其光芒を放つが如きに過ぎざるのみ。

且夫れ、事物の改革を爲さんと欲せば、其局に當るもの、其弊害の由て來る所を審かにし、之れが目的を定め、方針を立て、以て其規畫する所に従つて着々歩を進め、其腦力と手腕とを以て、

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力

眞正に改革を爲さざれば其出路



頻々遭着し來る所の障害を排除して敢往勇進するにあらざれば到底其功を奏する能はず。此の如くしてさへ、猶事、志と違ひ志、世と違ふこと多きに、漫に他者の考慮を仰ぎ助力を待ち、一時熱心之に従ふも、忽ちにして許多の困難に驚き、忽ちにして目的の達し難きに屈し、終に冷然之を放棄するが如くんば、百の頭顱を集め、千の歳月を重ねるも何の結果か望まん、其初志は只水泡に歸せんのみ。

蒙愚養成所

門閥世襲の弊は人をして、愚ならしめ、蒙ならしめ、不具ならしむ。吁其弊は誠に二百數十年の歲月間に、英雄豪傑の子孫をして殆ど皆闇弱ならしめたり。列藩の祖先及び其家老は共に自ら干戈を執て死生の巷に出入し、而して相當の學識才能を有したり。然るに、其子孫は完全なる偉丈夫たるべき身を以て、全く婦人女子と其伍を同うするに至り、彼雲を凌ぎ寒を犯し終に棟梁の材と爲るべき松柏の材幹も、徒に庭除の姫小松に安んじたり。されば徳川幕府の下に封建したる大小數百の藩は、蒙愚を養成する所と爲り、其養成の方法も亦至れり、盡せり、一事一物も缺く所なしと謂ふべかりし。

藩の實力は藩士の手に移る

故に其形式上の關係は如何なるにもせよ、其實力は藩主より先づ家老の手に移れり。藩主は「殿様」とて神聖なるものとなして奥殿に封錮し、藩内の事務は盡く家老の手にて處斷したり。其家老なる者も、始めは大概有爲の人材にして、銳意に主家の爲に畫策する所ありし者なり。然れど

も、是も亦久しからずして蒙愚養成所に入學するに至れり。而して又家老の外に猶若干の階級ありて、亦皆其門閥を世襲し、頓て愚蒙者の伍に入るに至れり。此時に當りて通常の感覺を有し、多少の智識を有したる者は唯藩士あるのみ、然かも中等以下の藩士あるのみ。是に於て乎、藩の實力は一轉再轉して漸く藩士の手に移るに至れり。但し其藩士の境遇は已に前述したるが如く、甚だ窮屈にして殆ど一種の牢獄中に座するが如くなるに、夫れを如何にして其實力を發揮し得るに至りし乎。

藩主は藩士の敏腕を頼めり

之を藩政改革の上に見るに、其藩主は、大概暗庸頑愚にして親ら藩政を視るを得ず。假令へ然らざるも獨處獨斷して其改革を遂ぐるを得ざるを以て識見ある藩士の言議に従うて専ら其敏捷なる手腕を頼みしなり。故に其藩士たるものは萬般の藩政に關して其意見を開陳し、以て能く其弊竇を排除するを得たりしも、如何にせん、彼等は祖先以來の憲法に對しては毫も容喙するを得ず、從て階級を打破し、門閥の廢黜を爲すことを得ず。之を反言すれば、繁多なる舊來の儀式は猶ほ依然として存し、正に藩政の改革を爲さんとしつゝある藩士の心身を束縛したり。例へば、茲に軍制を改革するの言議は幸に採用せらるゝとも、其神聖にして動すべからざる祖先の法制に撞着する條件は、たとへ其改革の骨子精神なることも決して之を改革するを得ず。假りに其陳論に依りて和洋折衷(寧ろ不具異様)なる軍制の實施を見るに至らしむとも、其大將たり、副將たり、隊長

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力



たり、伍長たるものは、彼蒙愚養成所に入學したる馬鹿ものなれば、すは戦争となれば、謂ゆる風聲鶴唳に駭擾して其爲す所を知らざるの徒のみ。此の如き軍隊を率ゐて整々堂々たる強敵に當らんとするとも、其戦は敵を見ずして自ら敗るゝを見るばかりならんのみ。

志士苦心の結果は貯蓄のみ

此の如き事情なるを以て、全國の藩を通じて十數年來疾呼狂號したる『藩政改革、藩政改革』の聲は至て高く、而して其間に奔走馳驅したる志士仁人の苦心焦慮は、甚だ多かりしにも拘はらず、其結果のやゝ見るに足るものは、各藩に多少の貯蓄を爲し得たりしに過ぎずと謂ふも失言にあらざるべし。

兎も角も、各藩の識見ある人士は此頃よりして姑く彼尊王攘夷の措き、各々先づ其藩政を根柢より改革する道あるや否やを講究するに至れり。蓋し彼等は邇きよりして遠きに及ぼす原則に據らんとせり。空談を棄て、實際に就けり。改革の順序は宜しく此くの如くならざる可からず。否な、是各人立脚の地歩を占定するなり。苟も、此地歩を占定するにあらざれば、何れの方面に向つても遂に何事をも爲す能はざるなり。

長藩は意外の幸運に際會せり

此點の一方より言へば、長藩は意外の幸運に際會せり。其は他なし、幕府と開戦したると是なり。其時の観容と實況とは今之を説くを要せず、且其演劇は四方觀客の意を満足せしむるに至らずして已に和を乞ひ、幕府も亦た喜んで之を諾し、茲に一たび戦局を結ぶに至りしと雖も、兎も角も、

長藩の士族黨を壓倒す

長藩は之れが爲めに戦を習へり。座して百千の兵法を講ずるよりは大なる實地の利益を得たり。士氣は是にて發揚せり、幕府の實力を計り得て私に希望を懷きて奮起するに至れり。而して其結果にて更に内亂を見るに至れり。是は其際に於て免がる可からざる者にて毫も憂ふべしと爲さず、如何となれば、階級と平等との戦なればなり、門閥黨と士族黨との争なればなり。乃ち彼等は實權を争ふに實力を以てし、士族黨は遂に能く門閥黨を退けて其實權を掌握するを得、從て其意志のまゝに藩政を改革して大概、之を完成するを得たり。是に於て乎、從來、痛く腐敗したる舊習は殆ど掃蕩し、苟くも技倆あるものは續々班を越えて相當の地位を占め、以て其才を伸ばすを得るに至れり。是則ち高杉、木戸、廣澤、大村、山縣等の諸士が一躍して天下の舞臺に立ちて、能く戊辰の天地に大功を奏するを得たる所以なり。

薩閥も亦た殆ど之と同一の機會に遭遇せり。彼等は先づ長薩と京師に戦うて戦を爲すの法を悟り、英國の軍艦を薩摩灣に逆撃して偉大なる軍事上の經驗を得たり。此に奇と謂べきは、明治文明の先導を爲したりと稱せらるゝ薩長二藩は共に其始め外人を惡む尤も甚だしく、因て共に外艦と戦争を試みしものなり。彼等は疑もなく之れが爲めに外人の手腕を知るとを得て、從つて精銳なる武器の力を假るに非ざれば、竟に彼と抗争する能はざるを知れり。是よりして二藩の面目大に革まり、大久保、西郷等の人士は其實力を以て自由に藩政を改革するを得るに至り、以て將に來ら

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力



んとする維新の中原に於て鹿を逐ふの準備を爲したり。

藩の權力漸く士族の手に移る

其他の諸藩に至りては、未だ其頭上の雲霧を一掃するに至らざれども、亦藩の權力は漸く士族の手に移る傾きを生じ、封建の制度は益々其主腦を死了し、天下の志士は其遺骸を葬らんと、頗る多忙を極むるに至りぬ。英人某曾て言へるとあり、曰く「君等は英國々家の脊梁骨は果して那邊に横はるかを知るか、商業の繁榮なるに在るか、工業の盛大なるに在るか、屬國の多きに在るか、將た航海の盛なるに在るか。否な是等は皆形體上の事のみ。然らば、王侯の手に存するか、將た貴族の間に存するか。否々是等は共に脊梁骨を爲すに足らず。其眞に脊梁骨と爲すべきは、中等社會の人士と爲す。彼等は眞に活動せる人士なり一朝、國家に事あるに際して先づ逃散するものは世襲貴族ならん、次に叫號するものは貧民ならん、且愚民ならん。此際に當りて挺身能く大難に當り、毅然として狂瀾を制するものは、中等社會の人士を措きて又他あるなし。君等、若し之を疑ふあらば、請ふ英國史を繕きて閱すべし、數百年來、無智蒙昧の疆域より十九世紀の文明を導き來り、以て能く紛擾場裡に國家の大權を抱持し、遂に今日の富強を致せしもの一として彼等の手腕を待たざるものやある」と。嗚呼、是唯英國のみならず、滿天下に何の國か然らざらん。我維新の際に於ても、天下の掃蕩は、重に中等社會なる士族の手腕に成りしこと固より怪むに足らず。

翻て思ふに凡そ一國の體面を維持せんには、必ずや儀式もなかるべからず、且習慣も棄つるべからず。徒に個々隨意の方向と趨好とに因て公共的の事物を處理せんとは、到底爲し能はざる事なり。然りと雖も、其儀式と習慣とは、又必ず時の情勢と人心とに適するものならざるべからず。語を換へて言へば、其儀式と習慣とに對する精神なかるべからず。蓋し、儀式と習慣とは存在するも、其精神さへ滅却すれば、是恰も彼屍體に異ならずして、時日の經過と共に空しく臭氣を發出し、種々の害毒を社會に散布するに至らんのみ。

之を聽く、羅馬舊教の精神を滅却して徒に舊來の儀式と習慣とを弄するに至るや、其法皇が歐洲諸國に與へたる害毒は鮮少に非ず。彼宗祖基督が孤杖飄然と世界に立て博愛慈善の福音を散布するに當ては、其心意は誠且實に、眞且純なるものなりし。誠實の心は能く人を誠實に化し、眞純の意は能く人を眞純に化す。是を以て、彼に従ふものは盡く誠實眞純の士のみなりしなり。然るに、彼は能く紛亂腐敗したる世に於て模標と成り、鑑戒となり、且光明となり、以て史上に稀有なる偉蹟を傳へしも、時移り、星變りて世界の大都なる羅馬は長へに法皇の椅子を暖め、歐洲の帝王は盡く之れに屈するに至るや、基督の傳へたる福音の精神は漸次に滅却して、法皇及び其管下無數の僧侶は、日に徒に舊來の儀式習慣を弄ぶとをのみ是事とし、終には是にも慊たらずして、神の名の下に惡魔の行爲を爲すに至れり。彼等は自由權利を重んずるの士を拘束する爲めに土牢

神の名の下に惡魔の行爲を爲す

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力



石窟を發明したり。獨立の運動を爲す者の手足を挫かんが爲めに跌踏拷問の器具を發明したり。「己れの意に協はず」との理由の下に帝王は窘逐せられたり。幾萬無辜の人衆は殺戮せられたり。絶えず各國の平和を破り、孤兒寡婦をして生きながら地獄の底に沈ましめしものは則ち此羅馬の魔王なりき。則ち務て世人を救助せんが爲めに設けたる儀式習慣は、今は世人を殺戮する具と爲るは、抑も如何なる現象ぞや。

我徳川幕府の儀式習慣に於けるも亦之れに異ならず。彼家康が經國緯世の技倆を以て、國家の秩序を整理したるの精神と時代とは、其去るや已に遠くして、今は屍體に異ならざる形軀のみの儀式習慣と爲り、數多奸黠の徒をして之を恃みて種々の罪惡を行ふの器械となさしめ、維新の改革に迫るに及んで、世の益々澆季に陥りたれば、吏員は益々儀式的束縛の繩を引締め、一文半錢の價值なき習慣の『理由』に由て、無理不法を事とするに至りたり。

已に此の如し、是を以て固より十分なる改革の其間に行はるべきにあらず。夫然り、幕府若くは全國の諸藩が十分の改革を爲す能はざりしは、嘗に其君主吏員に賢明活達の人物なかりしに由るのみならず、假令、之あるとも、自家の導き來りたる大弊害は到底自家の力を以て矯正する能はざるの情理の存するに由るなり。余は古來未だ曾て同臭味の中より出で、同臭味を掃蕩せしの人あるを聞かず。例へば、今日の政府に於て、薩長藩閥の勢を養成し來りたる其同一の人物が薩長

自家の導き來りたる大弊害は到底自家の力を以て矯正する能はざる

藩閥の弊害を除くべしとは、久しく口には公言しつゝあるも、竟に其効果を衆に示す能はざると同じ情理なり。故に、當時の幕府が自ら其腐敗したる幕府を掃蕩して其の弊害の根を絶ち、新鮮の幕府に革面せんとは到底望むべからざるの事なり。宗教改革の功は、獨逸林間の樸訥兒ルーザーの手を仰がざるべからず。維新改革、王政復古の偉業は、必ず我中等以下の國民なる士族の手を待たざるを得ざりしなり。即ち維新改革の原動力は、我國士族の手に在りて存せしなり。而して其士族の手に歸せしは、之に歸すべき理由のあるものなれば、猶親子の間に於ける財産授受の如く、容易に讓承し得たらんとの感を爲すものあらんも、改革主動者の困難は其局に當りたるものにあざれば、恐くは十分に解知する能はざらん。余が是迄の談話に由りて志士處世の難き、其當時の如きは甚だ稀なることを知了せしならん。

更に一步を進めて維新改革の原動力たりし士族とは果して如何なるものなりやを説明せん。單に士族と言へば其數は至て多く、盡く維新改革の原動力を以て目す可からず。然らば則ち其眞に原動力たりしものは、果して何れの階級に屬するものなるや、如何なる種類に分ち得べきや、自ら權力を振ひて藩政に當り、以て藩内の諸事を處理する重役なるか、將た其下に屬して其願使に任じ下情を通達すると稱せし吏員なるか、抑も諸國の武術修行に未だ對手の假劍を受けずして自ら天下無双と誇りし勇士なりしか。否々、彼にもあらず、是にてもあらず、其天下に卒先して改革

士族とは如何なるものなるや



第一種の書生

の聲を擧げ、始終其聲を續けて以て雲霧を一掃するに至りしものは、皆一介の書生なりし。而して其聲を同うし力を戮せて、以て困難に當りたる書生の中にも、亦種々の種類あり。其第一種は支那學(所謂儒道)に由て養成せられたるものなり。是は家康以來幕府の爲めに一部の生氣を繋ぎ來りし教育を受けし者にて。彼等は幕府のために獎勵せられ、因て其下に職を奉せしもの多かりしにも拘はらず、其學ぶ所は皆 王家の尙ぶべく僭越の憎むべく、忠義の爲めには死すべく、逆徒は必ず討たざるべからざることを論究せしを以て、如何に曲學阿世の徒なるとも、口にくそ幕府を稱賛するなれ、其心裡には幕吏の專横を積んで今日に至り 皇室を殆ど一個の偶像たらしめたる事を知らざるなく、其之れを知るものは竊かに之を悲憤慷慨せざるものはなかりし。思ひ回せば、彼家康が人衆服従の一策として儒道を獎勵したる、二百數十年の後に至ては、我子孫を殺すの具にてありしなり。家康の靈、若し地下に知るあらば、夫れ悔恨極りて慟哭せんか。

第二種の書生

第二種の書生は國學派に屬するものなり。否な、單に國學と言はんより寧ろ漢學より導かれたる國學と言ふを適當と爲さん。即ち水戸藩の獎勵したるものにして、彼大日本史の如きは其結果として世に出づるに至れり。彼等は我國體を明かにし、大義名分の重んずべきを揚言し、以て大に其徒を全國に擴むるを得たり。彼源光圀が楠正成を以て我國第一の忠臣と爲し、夫れまでは人、皆、

第三種の書生

正成の事を忘却して湊河の畔に草の茫々たるを見しに、彼能く挺身自ら碑を建て、其偉蹟を千古に表明したるが如きは、疑もなく天下の志士をして其向ふ所を知らしめたるものありしなり。第三種は神道派に屬するものなり。此神道派と國學者との間には亦多少相違あり。彼の平田篤胤の如きは國學を経世的に應用したるものにして當時の社會に改革の原動力を分泌せしこと少なからず。要するに、此種の書生は神代以下日本帝國の歴史を以て基礎とし、其神聖なる 天孫に對して國家の爲めに身を致すの義務あることを知るものなかりしかば、是も又素より幕府の味方と爲るべきものにはあらざりしなり。

而して此三種の書生は、凡て相互に其目的の爲めには一致せり。彼等は敢て區々學派の異同を争ふことを爲さず、三方より聲を等うして共に尊王の大義を説き、因て人々をして愛國自重の心を發揚せしめたり。

此時に當り、恰も外交の事起りしは、是改革の火炎に油を注ぎしものにて、彼等の心は一層の氣焰を以て燃ゆるに至り、尊王の問題に加ふるに攘夷の旗幟を以てしたり。少焉して米使ペルリの來朝するあり。彼等は痛く之に刺衝せられて其愛國心、否な寧ろ敵愾心は益々激昂するに至れり。彼等は當時、外人を目するに夷狄禽獸を以てし、一步も我神州の土を踏ましむべからずとの意見を懷きしものなれば、其攘夷の念は尊王の情に比して更に甚しきものありしならん。否な、彼等



は尊王倒幕の議論よりは寧ろ攘夷説に向て全國多數の人士と共に聲を併するをば更に大に便益ありとなせしならん。斯くて、彼等の勢力は益々其強盛を加ふるに至りしと雖も何事も秘密にせざるを得ぬ時なれば、其潜勢力の如何なる程度まで騰上したりしやは、容易に他人の知了するを得ざる所なりし。

幕府に於ては三百年來基礎を固めたる覇業が、かゝる『虫ケラ』同然たる貧書生の手には仆滅せらるべしとは夢想にもあらざりしなり。井伊大老は新たに職に上れり。彼は當時に在て疑もなく、第一流の人材なりしなり。幕府は勿論、之に服せし所の諸藩は、彼に依て封建の基礎を堅めて天下横議の書生を處断し得べしと信じたり。井伊も之れを以て自ら任せり、必らず其難關を排開して再覇業の基を富岳の如くならしめんと希圖せり。局外より之を視れば、是誠に望みなき事にあらず。幕府の權力に加ふるに彼の技倆を以てすれば、盤石を以て累卵を壓するの思ひをなしたらん。然るに、其實際は大に之に反し、水戸、越前の如き幕府の支族にして、而も當時一部の輿望を負ひたる強藩は、何れも書生を助けて幕府に抗し、頻に尊王攘夷の聲に唱和して共に幕府に迫れり。幕府は是等に對して尊王の政策を全うするを得ざりしのみならず、攘夷の點に於ても亦全く依違し、一時開港を爲すの止むを得ざるに至れり。是に於て乎、我國未曾有の軋轢は最早や避くべからざることゝ爲りぬ。

井伊大老  
新たに職  
に上る

書生黨の  
望しむ  
望の藩々

此時に當りて天下の望を繋ぎたるものは水戸なり、越前なり、尾張なり、將た宇和島なり。書生黨は皆之れを仰ぎて幕府に當らんと欲したり。但だ其書生黨は果して是等諸藩の君主をば賢明にして事に堪ふるものと信じたるや否やは且之を舍き、苟も尊王攘夷を主義と爲し方針と爲したるものは、皆是等の藩主に向つて望を屬したるなり。即ち彼等は彼等の力を以て井伊等の幕府黨を排斥し去り、一橋慶喜をして將軍の職に就かしめ、水戸若くは越前をして之を補佐せしめば、天下は忽ち靜平に歸し、且能く彼等の目的を達し得べしと思惟したるに似たり。蓋し、天下平和の時には、大概當局者は賢明にして局外者は暗愚なるが如くなれど、國家多端の時に際しては全く之れに反し、當局者は皆な暗愚にして却て局外者のみ賢明なるが如くに見ゆるものなり。況んや、其己れに屬する所の黨派心を以て之を見るに於てをや。

果して井伊は刺客の手に斃れ、之が爲めに幕府の勢力は頓に傾きて、佐幕黨は皆な失望したり。今は、挺身し能く幕府の地位を保持せんとするものなし。此に於て當時天下の重望を負うたる尊王攘夷黨の主領は幕府に入て政權を握るに至り、慶喜は攝政職と爲り、春嶽は總裁職に就きたれば、天下は是より果して靜平に歸すべきか、彼等は能く書生の心を満足せしむるに至りし乎。否々、彼等は遂に何事をも爲す能はず、只空しく手を束ねて非難の衝に當りぬ。春嶽は其職に堪へずして遂に之れを辭し、慶喜は困難の境遇に陥りて、自ら二百數拾年の盛榮を極めたる幕府引渡

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力

慶喜春嶽  
何事をも  
爲す能はず



しの役目を務めざるを得ざるに至れり。

是に於て乎、天下の人心は迷ひたり。三千萬衆を載せて波濤の上に漕ぎ出でたる一大船舶は二様の方針に向つて進航を試むと雖も、兩ながら目的の地に達すると能はずして今は全く方針を失ひ、船舶は逆風に遭うて如何ともすべからざる觀を呈したり。維新改革の原動力と爲り、將來に其目的を達すべき書生は流石に炯眼なり。此時に於て機を見、微を察することを誤らず。明かに幕府に力なく、又諸藩に力なきを覺れり。彼等は已に藩主の力、否な、假令、賢明の藩主ありとも、其力を以て能く天下の難局を處理するに足らざるを知れり。慶喜、春嶽は已に自ら其爲すなきの實を示したり。此時に當て祖公は已に逝き、齊彬も亦逝く。而して我藩の閑叟は熱病に罹りしより殆ど政治を顧みざるに至り、敢て藩主に能く天下の重望を負うて挺身して困難に當るに足るべきものはなきに至りぬ。

去ながら、其炯眼なる書生黨が此間の境遇は果して如何なりしといへば、運命の助くる所と爲りて漸次に其地歩を社會の表面に見はずに至りしも、其地位の困難は殆ど言筆の能く盡し得べき所にあらず。彼等の黨與にして其言説の爲めに囚はれ殺されたるもの其の幾何なるを知らず。言ふ「虎穴に入らば虎子を獲ず」と。彼等は幾度虎穴に入らせしやを知らず、實に其生命を賭して以て事業の經營に任せり。然も亦幾度か失敗して虎子を獲るに至らず。率直に言へば、幾度か猜

書生黨の  
境遇の困

疑に觸たれども、彼等は剛毅なる人士の模範にして、百千度の苦難之を惱すも、其志氣を屈することなく國家の爲めに改革の呼號を續けたり。

兎角する間に、時は漸く變遷し、社會は新智識と眞技倆との必要を促し、事物は日に頻繁を加へて益々錯雜になり、老朽無識のものは到底自ら其の任に堪へざるを知るに至りしを以て、謂ゆる、時勢の必要は、彼書生を活劇場に招かんとす。彼等は素より千難萬苦を排して時機の來るを待ちたれば、其智識と技倆とは皆老人輩の及ぶべきにあらず。今や必要に擁せられ、公然と天下に其頭角を見はすの端に就けり。

夫れ、闇黒の夜には、一基の燭光も、衆目を矚するに足る。錯亂の社會には、一片の見識も稠人の仰ぐ所と爲る。之れを無限の暗黒に比すれば、燭光の照す所は幾尺ぞ。無窮の空想に比すれば、吾人の見る所は幾許ぞ。世に「英雄の眼力は能く千古を達觀す」といへど是は虚妄のみ、事故に經驗なき空説のみ。夫れ世運の將に一大變革に遷らんとして、諸事の紛亂に紛亂を重ねるに際しては如何なる人も迷津の嘆を免るゝ能はず。其經驗に鑑み學識に照し、判じて必ず斯くあるべしと料定する所のものも、風潮の遽に一變すれば、其見解は全く畫餅となるものなり。かゝる場合に在ては、たとへ第一流の頭腦を有する人にも、其の見る所は尙尺寸の間を出でざるべし。

見よ、當時我國の有様は針盤を失うたる船舶の如く、志士は盡く迷へり、天下の民衆は皆惶惑せり。

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力

英雄の眼  
力千古を  
達觀すこ  
は虚妄



開黒紛亂の社會

尊王攘夷の意味一變す

前に述べたる如く、慶喜、春嶽等の政治は、井伊等が處断せし時よりも、尙一層激烈なる輿論の反對を蒙り、曾て自ら井伊等を攻撃せし同一の論鋒にて、今は其身に攻撃を加へられたり。左は言へども實は甚だ困難なる地位に立たるなり。外國の交際の如き、公武の關係の如き、其曾て局外に在て觀察したる所とは大に實趣を異にし、如何なる強剛手段を取るも之を如何ともする能はざるの事情に陥り居たりしなり。春嶽、慶喜等は之れを察せず、漠然、茫然として天下の難局に當り、忽ち其非常の困難に驚惑し、彼に出でんとして此に躓き、此を行はんとして彼に遮ぎられ、輒もすれば、論難攻撃の圍に陥れり。比較的にも爲し易きの處に横はれる公武合體の問題すら遂行する能はず、益々睽離反目を加へ、薪を負うて火を救ふの痴狀を演ずるに至れり。

斯くて天下は全く開黒紛亂の社會と爲果たり。前途の遠き、僅に一片の光明に歩武を導かれたる旅客も、夜半に在りて全く其光明を失ひたれば、彼に出でんか、此に行かんか、惘然として其望を失へり。嗚呼、其失望は誠に惘察すべし。然りと雖も、眞の事業家が事業を建るの基は、實に此時に於て起立されたり。余は曾て謂ふ、常人も爲し得べき事は、誰も之れを爲し得べし。惟、英雄の事業は、常人の爲し得ざるの時に於て、能く之れを爲すとを得と。當時、多數の人士は皆爲し能はざるに苦しみ、殆ど處理の道なきに窮したり。此時に當りて、一部の志士は、斷然と幕府を廢滅する企畫を爲し、尊王攘夷の意旨は一變したり。世は一層眞摯なる狀況に進みたり。皆是

まで尊王を主張したるものも、必ずしも幕府を倒すの意ありしにはあらず、彼等は惟幕府をして列藩諸侯を率ゐて 皇室に敬意を致さしめんと希圖したるに止りしが如し。

是まで幕府の 皇室に對する狀是一支親に對するにも及ばず、 皇室を長へに式微の中に在らしめ、 天皇は一天萬乘の尊を以て、まゝ、宮殿の雨漏り壁落つるを忍ばざるを得ぬ有様なるを悲み、共に聲を擧げて幕府に相當の力を致さしめんとを求めたるなり。必ずしも、政權を朝廷に返上すべきことを主張したるにあらず、惟、國家重要の問題は 皇室の批准を経て而して後に奉行すべしと論じたるのみ。是を以て、先づ公武の合體を圖り、三百諸藩の結合を圖り、天下心力を一にして外國に當らんとの希圖をなしたるものなり。當時、彼等は國體の上、且大義名分の上より、既に覇業の非なるを知らざるにあざれども、始めよりして幕府を倒さんとの考へを懷きしものはなかりし。然れども、幕府と諸藩とが着々失敗したる事跡より、漸次に天下の志士をして其力の深淺を測量せしむるの因由と爲り、此の如く脆弱なるものに向つて天下の統一を望むの非なるを覺らしむるには至れり。

是に於て、卓識ある志士は、謂へらく「倒すに如かず、倒すに如かず、幕府を倒して其政權を擧げて 皇室に歸せしむるに如かず。否らざれば紛亂騷擾して國家百年の大計を誤り、其命脈の亡滅に瀕するやも測り知るべからず」とて尊王の義は茲に倒幕の意を含むに至れり。但し斯の如き

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力

幕府を倒し皇室に歸せしむるの論起る



は、當時の志士中に僅に其一部の人士の唱道したるに過ぎず。因て志士の間にも、亦議論の分裂を來すに至れり。

各藩の藩主間に於ては、固より一人の倒幕の念を懐くものあらず。彼等は自己の藩を全うせんには、必らず幕府を全うせざる可からず。若し幕府倒るれば諸藩も亦従つて倒れざるを得ず、是封建制の上に於て必然の結果なればなり。世には薩長の二強藩主は、敢て自ら代らんと意氣を有し、始めより一定の企圖を抱きて、尊王討幕の目的に向ひて力を戮せたるやに言ふものあれど、是は斷じて真相を窺ひ得たるものにあらず。彼等の進退は常なく、彼等の離合は時と理由とを顧みざりしならずや。勿論此二藩中には、卓識有爲の士頗る多かりしを以て、平生企畫する所ありて藩の方向を左右したるには相違なきも、藩主は偏に自家の利害のみを思ひ、謂ゆる、國家の問題に至ては殆ど何等の意見も有せざりしなるべし。其事情の如何は且之れを舍くも、兩藩主は國家多端の時に於て互に仇敵の地位に立てり。猶他の志士が其見識の變じたるに因て、互に同志擊を爲したる如くに、藩主の間にも亦同志擊を始めたり。即ち薩長二藩は先づ京師に於て戰へり、其原因は甚だ些細の事なりき、當時、薩藩は幕府に心を寄せ居たり。見よ、幕府の爪牙たる會津と共に長藩を撃ちしに非ずや、其後には幕府の軍に加はりて長州征伐を爲したるにあらずや。察するに彼は當時の法度に照らして、必らず毛利大膳大夫父子の首を獲て甘心せんと期せしなるべし。

薩長兩藩  
互に仇敵  
の地位に  
立つ

然るに、其結果は殆ど曖昧の中に没しければ、彼等は何事も其期したる事は成し遂げざれば止まずとの精神を有したるにはあらず。長藩とても亦た然り。幕府と開戦せざるに至りては、痛く驚惶せしならん、過失を悔悟せしならん。自家をさへ全うするを得ば、如何なる命令の下にも服従する條件を備へて和を請へり。是に由つて之を見れば、長藩主は幕府に抗敵して一戰を試みんと云ふ氣力は毫頭なかりしと言ふを憚からず。其偶々之を爲すに至りたるは、全く他の藩士の行爲に基きたるもののみ。

倒幕の説  
寧ろ過激  
突飛の論  
なり

事情此の如きを以て、當時、倒幕の説は寧ろ過激突飛の論として多數の非難を受け、後に齊しく國家改革の衝に當りたる志士の間にも、其論に應ずるものは至つて尠なかりしなり。彼等の意見は、其學派の異なるが如くに又主眼とする所を異にせり。從來、尊王攘夷に向て其聲を并せたるものは、其聲は等しいへど、實は其重きを置く點を異にせり。眞に幕府の皇室を冷遇するを憤激して尊王の説を唱へたる者あらん。或は偏へに外夷てふ目的物に對して神州の爲めに奮起せしものも多く、此種の人は、其目的物の爲めに尊王を心付たりと言ふべき程のものなれば、固より倒幕の意志のあるべき様なし。左れば是等の人々は政治家といはんよりは寧ろ憂國家と稱するを適當とせん。

其は何れにもせよ、「幕府を改革し、各藩を調和して、公武の合體を圖るべし」との議は一時志士

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力







却て説く、支那風の歴史は、大抵皆な想像的小説的の筆を以て記述したるもの、如し、彼等歴史家は自ら事實を尙び、考證を重んずと稱すれども、其之れを尙び、之れを重んずる所は、僅に系統、年月、場處等の些末なるものに過ぎずして、其歴史上の骨子たる主人公を寫すには、殆ど小説的架空的の筆を弄したるに相違なし。彼等は好んで英雄を先天に定めんとし。英雄の生るゝに當ては、成るべく吉徴あらんとを望み、「日輪懷に入ると夢みて孕み、異香室に満ちて産る」と書せざれば甘心せざるもの、如し。其漸く生成するに至れば、謂ゆる神童を以て目し、一を聽て十を知るといはんよりも、成るべくは生れながらにして知らしめんと欲す。英雄の社會に立つ識見は神明の如く、豫言者の如く、今年明年の事は論なし、千百歳の遠きをも洞見するに至り、其行為は一舉一動盡く道理に合し、法理に協ひ、着々に歩を進めて震天動地の偉業を爲すと稱す。是等の歴史家は常に此の如く同一の筆を揮つて古來の豪傑を描寫せんとを勉め、一も其真相を見はすを得ざるの結果となれり。余の始めて支那風の歴史を讀むに當てや、英雄豪傑は人力の企て及ぶ所に非らずと思ひたり。實に其不可思議なる所爲は宗教家の奇蹟に異らずして、常に靈物の保護するもの、如く、手足を動かさずして世途の險難を涉りたる人物に見ゆ。彼は天に朝し地に入る神通あるに似たり。豪傑の眼には涙あるべからず、心には憂あるべからず。恐れもあるべからず、突進して顧みる所あるべからずと規定せり。是は竟に肉體と神經とを具したる人類の爲し得べき事に非ず。是全く歴史家の見識の不明なるの然らしむる所なるのみ。夫れ大人の境遇は大人に非れば知る能はず、英雄の心事は英雄に非れば明かにする能はず。思ふに、支那風の學者は、單純の學者のみ多かりしなり。即ち書を讀んで事實を蒐輯するに過ぎずして、英雄の境遇を觀察し得べき經驗を有せず。盲人の象を評する批判に出で、社會活動の歴史を汚すに至りしものなるのみ。

支那風歴史の描ける英雄

維新の際には先天的英雄もなし

余は我經歷と觀察とに由て確信す、古代は且舍き、維新改革の際に於ては、支那風の學者が想像するが如き先天の英雄豪傑は一人もなかりしと。余は種々の事實を擧げて、維新改革の原動力は書生の手には養はれ、書生の力にて發育したるを斷言したり。更に一步を進めて、其書生等は當時果して國家に對し、如何なる所説を有し如何なる技倆を施せしやを説くは、必要のことならん。

夫れ支那流學者の考を以てすれば、是等の書生は皆英雄豪傑にして、生れながらにして日本の運命を知悉したりとの見解を下すならん、然れども、其實際を視察すれば、彼等は、確に感情的の動物たりしなり。思ふに其中には比較的卓見家と稱すべきものもありしならん。但し、其見る所とて甚だ遠きにあらず。當初に在ては、何人も三百年來の幕府、否な源賴朝以來七百年の歲月に涉りて繁茂したる封建の大木が、僅々の年月間に枯槁朽仆して又其影をだに見ること能はざる

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力







りしも我が國民は此を察せず、惟に英國が殘虐を逞うせしのみと思考せり。支那と英佛との戦は、最も我人心を刺衝せり。支那は比較的到我國なり、國民の支那人を見るとは他の歐洲人を見るに異なれば、斯かる場合に於ては支那に同情の感を懐くものなり。因て支那の敗るゝを聞き、我國民は外人を恐るゝの念を増長せしと同時に、又深く之れを惡むの心を加ふるに至れり。之に加ふるに露國は已に西比利亞を併せ、將に我北門を壓せんとする等の事實は、我國民をして益々奮激の念を起さしめつゝありし。かゝる折柄、外人等は近く我横須賀に來りて、謂ゆる『奪掠』の第一歩なる通商貿易を要求、否な、寧ろ強請するに至れり。是を如何んぞ志士の心を衝激せざらんや。皆曰く、「夷狄果して來れり、國家の安危は此に迫れり、一死を以て將來の爲めに企畫する所なかるべからず」と。彼等は意を決して起てり。斯道の爲めに、神州の爲に、又子孫の爲めに、斷じて攘夷を爲さんとす。彼等は誤謬の中に立てりと雖も、其志は稱賛すべし、當時に在ては苟も憂國の士たるもの皆然らざるを得ざる風潮となれり。

然るに、幕府は躊躇しつゝも開港の方針を執るに至りしを以て彼等は痛く激怒し、切齒扼腕、悲憤慷慨、涙を揮うて諸方に奔走し、斯くては神州の陸沈遠からず、日本刀の光は遂に鏽朽せんかと思はしめたり。此に至りて先入の誤謬は如何に巨大の勢力を逞うして人身を駕御使役するかを見る。若し局外より酷評すれば彼等は猶天魔の魅入る所と爲り、殆ど其心を狂亂し、危険より危険

彼等の誠意と盡力とを徒に屬せず

に其身を投せんとするもの、如し。然れども、彼等は竟に維新改革の原動力たりしに相違なし。其誠意と盡力とは決して徒爾に屬せず。少くも、他山の石と爲りて我國民の心氣を磨きたるなり。

此の如き事情なりしを以て、彼等の中には、外人に對して多少の經驗を有し、且其事情に通ずる者も、世界の氣勢に對しては猶五里霧中に望むを免れず。惟其視察は表面に見得たるものに止まり、他に適當の推想を爲すに至らず。其言に「外夷等は最も工業、商業、航海の術に熟し、陸海軍の組織頗る整頓せるが如くなるも、道德風教政治等に至ては一も操守なく、準據なく、夷狄の通性として眼中に、唯、利あるのみ。君臣の義なく、父子の親なく、兄弟朋友の情誼もなし。我神州の如き君子國の國體に、敢て比すべきものにあらず。若し彼等と交際を開きて、永く之れを存續するならば、我も必ず彼等に魔化せられて、禽獸の群に陥るに至るべし。故に今に於て必ず攘夷を斷行せざるべからず」と。

此に於て乎海防論は起れり。曰く砲臺を築かざる可らず、曰く大砲を鑄造せざるべからずと。此間に書生間の議論は頗る面白き談も少なからず。支那人某の著述中に「洋人は海戰に慣れ、日人は陸戰に長ず。故に、將來事あるに際しては、日人を防ぐには宜く海上に於てすべし。洋人と戦ふには宜く陸上に於てすべし」との言ありと。是を以て、或る部分の書生は得意に其説を假説して

海防論起る



曰く「我國民は全く陸戦に長せり。織田、豊臣以來、鍛ひに鍛へたる日本刀は、徳川三百年の治平に由て少し錆を生じたりと雖も、我土に於て、我嶮に據て外人等に對せば、決して敗るの憂なし。且彼等は幸に陸戦に長せず、殆ど海上に於て生活するものなり。是を以て海上の諸器械は能く整頓し、到底我の抗爭する能はざる所なれども、先づ之れを陸上に誘ひ、進退自由ならざるの地に立たしめ、我軍をして神出鬼没之に乗せしめば、彼の銃砲は岡陵谿谷樹木等に阻隔されて、十分の利用を爲す能はず、遂に我日本刀の下に其頭を授くるに至るべきなり。若し彼等四方より襲撃し來るあらば、我全國人民は皆起て刀を執り、同一の方法に由て塵殺すべし。彼等は元來利を以て目的とすれば、戦に臨み、敢往忍苦の士氣なし、いかで我士民に敵するを得ん。最後の勝利は必ず正義者、忍苦者に歸す。我國民一たび發憤して起つときは、外夷は必ず我國を遠く去り、再神州に向つて鼎の輕重を問ふことなかるべし」と。

や、適當なる考慮を抱く者は曰く「凡そ戰の勝敗は武器の精否に因ること多し。彼は軍艦を有し、火器を有す。苟も彼と技倆を角せんとならば、我も亦た此種の精銳を有せざるべからず。彼等若し已に上陸するならば或は大事ならん。即ち、彼等は武器彈藥を以て我都府を打壞するに至るやも知るべからず。故に、彼等を攘はんと欲せば、必ず海防策を講せざるべからず」と。此の議論は前の大膽にして單純に過ぐる方策に比ぶれば、數層の勢力を得るに至りたり、其は實地に行ひ易

稍々適當なる考慮

きを以てなり。爾後之れに關する献白は各地の有志者より續々として呈出せられ、幕府及び諸藩も共に此方針を執るに至り、因て樞要の地には砲臺を築く企畫を爲し、兵器彈藥を製造し、其極は遂に蘭人を雇うて海軍の操練を爲し、諸事、歐洲の兵制に則りて以て習熟せんとを希圖するに至れり。此方法に由て攘夷を斷行せんとするは、盜賊を捕へて繩を縛ふよりも猶迂濶にして、寧ろ盜賊を捕へて繩縛ひの稽古を爲すが如きものなれども、當時に在つては、是ぞ最も賢明なる人士の頭腦を支配する議論にてありき。

斯くて幕府及び諸藩は其方針に由つて進みしが、いと困頓疲弊したる當時の財政に、砲臺建築、兵器製造等巨多の經費を要し、益々困弊を告げられて、折角の企望も半途にして水泡に屬せんとす。此に於て富國策を唱ふるもの起り、亦海防論と同じく種々の献白を爲すに至れり。其中には棒腹に堪へざるもの尠からず。三國史或は水滸傳の策士等が論じたるが如き事を捉へて無上の策となすものあり。或は經費を省略せんが爲めに反て銃砲彈藥を廢し、日本固有の弓矢を以て代ふべしと主張するものあり。或は單に道德主義を説きて此危急の時に儉約自ら持して痛く奢侈の物品を斥けて諸人に之を倣はしむれば、國は自ら富強なるを得べしとの説教をなすものあり。諸説紛々として更に要領を得るなし。されど外人は此間に毫も猶豫を與へず。米國の談判調へば、英國繼で來り、佛國來り、其他の諸國續々として來り、同様の請求を爲し、同様の承認を得んと迫

富國策を唱ふる



る。是に於て今までは從來、支那、和蘭の外に他の國民あるを知らざりし我國民も、今は十餘ヶ國と交通の條約を結ばざるを得ざるに至り、各國よりの公使、領事及び商人等は相率ゐて用捨なく開港場の居留地に其居宅を構ふるに至れり。

金銀の變動忽ち起る

茲に金銀貨の變動は忽ち起れり。一兩の金小判は俄に通貨の三兩一分二朱（三倍十六分六）を價するに至りしかば、物價は從つて三四倍の騰貴を來し、細民は愈々困難を極めたり。是に於て一般の人民は有志の言を果して當れりと思へり。皆以爲らく、「外人は果して惟利を是れ貪り、強欲にして飽く所を知らざる徒なり。彼等が來りてより未だ數年ならざるに、其影響する所は已に此くの如く、金銀貨の位は忽ち亂れ、物價の濫騰は殆ど止る所を知らず。かくて歲月を経るに至らば、我國の彼等が手の裏に落るは火を賭るよりも明かなり。彼等が貿易を『第一手段』として他國を奪掠すとは之を言ふなり。速に攘夷を斷行せざれば、我等は遂に生を聊するなきに至らん」と。

疾疫災厄累りに來る

かゝる中に、コレラ病始めて我國に傳播し來り、其勢甚だ猖獗にして江戸の市中のみにても殆ど十萬餘人を斃せしといへば、全國には恐くは四十萬の多きに上りたるならん。此くの如きと二年次で麻疹流行し來り、是も亦激烈にして戸毎に其患に罹らざるものなく、爲に死せしもの又甚だ夥しかりし。其他安政の大地震にて江戸を始めとして諸所に破壊を逞うし、因て大火事起り、大

大變革の場合には常に天災地變の力を數す

風吹き、大雷の人畜を撃ちしと非常に多く、次で彗星現はれて其尾は半天を拂ふに至り、いと々遽忽の人心となり、總て災厄の累ね來るは國に大變の起る徴ならんと國民の膽を寒うしたり。

余はかゝる自然の災厄が如何なれば社會變革の際に必ず伴ふものなるや、其理由を知る能はずと雖も古來各國の歴史に徴するに、變革の際には常に天災地變の力を戮するを見るなり。又、余の一生に徴して災厄の來る時には必ず他の災厄の累至し、俚言の謂ゆる「一度あるものは二度あり、二度あるものは三度あり」てふことの信なるを覺ふ。幸福も亦然り、一の幸運に際すれば又他の幸運を迎ふあり。因て、余等は時には頻々災厄の底に陥りて復起つ能はざるかと憂ひ、時には頻に幸運の助くる所と爲りて、天地の安樂を感じたることあるなり。今日に至りては、人皆な天變地異の何故なるを知り、コレラは一種のバクテリアの飛動繁殖するによるを知り、地震は火山作用に由て水脈の火層を犯すに起るを知れば、誰も敢て之に對して異議を懐くものなからん。但し天災地變が社會變革の際に伴うて起る事實に至ては、天則の規定に出づるには非るかを疑ふのみ。苟も、自然の大勢が能く人力を助くるものとすれば、天變地異も亦公衆に力を戮す者と言ふとも不可なからん。自然の經濟は成るべく總て事を有益に他に向つて用ゐるものなり。されば天變地異は社會變革の際に起らしむるを最も有益の効多しと爲すべし。

是等の出來事は全

其理由の如何は且含き、是等の出來事は大に全國人民の心を震懾せしめ、盡く之を外人の害毒に

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力



國の人心  
を震撼せしむ

大隈伯昔日譚

歸せり。コレヲ病は固より外夷の輸し來りしものなり。天災地震には六十餘州の神人の共に交も怒るの兆となりとなし、百姓、町人、女婦人、小兒に至る迄、頓て頭上に落ち來る災厄と困難とは、盡く之を外夷の所爲なりと思へり。此の如く輿論は囂々と外夷を惡めり、三千萬中に十の八九は之に雷同したり。因て我國民の眼には外人を惡魔の如くに映射するに至れり。夫れ此現象は甚だ喜ふべきにはあらず。但し其結果より考ふれば我全國の民は之が爲に三千年來の長夢を攪破するを得たり。是迄國中は眠り居たり、殊に近く二三百年間は熟睡し居たり。何事をも思はず、何事をも問はず、全身の機能は惰りて蠢々たる蛆虫の如くなりし。然るに今は外人の刺衝を受け、而して天災地變に驚愕され、奮起して其向ふ所を定むるに至りしは、彼等が將來に新文明を作出する一階梯たりしに相違なきなり。余は甚だ無事を惡む。無事は人を睡眠せしむ。故に人は無事ならんよりは寧ろ災厄を迎ふるの勝れるに如かざるなり。却説、書生間に於ける尊王攘夷の議論に就ては已に略陳述したるが如し。爾後は其議論漸々其數を加へ、種々の枝葉を生じたり。皇室は已に式微の極に達し、一般の國人は御公儀あるを知りて禁裏様の何たるを知らず。稍々之を知るも、或は一の神社の如く、或は山城の領主となすものすらあり。是に於て、一種の尊王論は幕府をして朝廷に對し猶春秋時代の覇者の如くに諸侯を率ゐて天子に朝せしめんと欲したり。即ち將軍は皇室に忠順なるべし、王命に従うて征夷の任

書生間に於ける尊王攘夷論の第一種

を全うせざるべからずと論せり。

同第二種

第二種の尊王論は公武合體の説にして、其結果は政治的の婚姻と爲り、幕府の権力は次第に衰へて皇室の威嚴は一層盛んなるに至れり。蓋し、尊王論者の勸告に従うて公武合體を圖らんには、其勢ひ、最上の權を王家に譲らざるを得ず。事此に至れば、幕府は以前の幕府に非ざるなり。其覆滅に傾きたるは、此時に始まると謂ふも過當にあらざるなり。

同第三種

其他の諸説

第三種の尊王論は更に數歩を進めて、將軍は文武の大權を解き、左右大臣の如きものに任命せられ、諸藩は之を朝廷に直隸せしめ、大事に關るとは總て勅裁に出づべしと主張せるものなり。其他の諸説は深く時務を考ふる所なくして、徒らに形體形式の上に眼を注ぎ、當時禁裏御料僅に十萬石に過ぎず、之れに奉仕する公卿等は、多く赤貧にして生活に困るの有様なるに、幕府のみ百萬石の多きを領するは不法の至なり、宜しく其領地を割きて朝廷に奉じ、朝廷并に公卿をして其威嚴を高むるを得せしむべしと言ひ、或は自藩の利益を主として皇室の尊榮を圖ると共に自藩の地位を高めんと圖るものあり。或は又攘夷を目的とするよりして最早や幕府と結托するの効なきを知り皇室に由て攘夷を斷行せんと欲し、因て尊王論をなすものあり。長藩の如きも其一なり。

長藩は皇室に依り

長藩は始終根強く攘夷論を主張したり。藩の志士は挺身して京都に奔走し、又能く門を開いて世

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力



の攘夷家を容れしを以て、其結果は猶更に有力なる一藩を構成したり。彼は京都に於て信用せられ、天下大多數の攘夷家に重望を屬せらる。此點には薩藩も、土藩も、固より之に及ばざりし。蓋し、薩藩は、時に尊王佐幕の間に彷徨し、攘夷の點に於ても鹿兒島灣の戰爭以來は輒く腰を折るに至り、長藩の如く始終に亘りて一徹なるを得ざりき。土藩も亦た然り。藩の方針常に確一なるに能はず、且藩内に内亂起り、其尊王攘夷黨の一派の書生は其地位に安んずる能はず、脱藩して長藩に依りしもの少なからざりき。

然れど時勢は竟に抑ふべからず。三冬已に盡きて一陽の來復せんとするや、天は雪を降し霰を飛ばすと雖も、這は一時の變象に過ぎずして、地上の草木をして其芽を發生せしむるを妨げざるなり。攘夷派は此くの如く大多數を占め、長藩を始めとして全國幾萬の志士は皆等しく攘夷鎖港を希圖したり。此際に於て其殆ど鐵石に似たる頑迷心をば如何なる作用を以て融和するに至りしや、余は明らかに之を叙述する能はずと雖も、十九世紀世界文明の潮流は恰も陽氣の發する所金石も皆な透るの力を以て我國民の心を感化するに至りたるが如し。未だ外人に接せざるの徒は吾苟も外人に會はゞ直に之を斬殺せんとの意氣を有したるも、其實際に會見するに至ては、漫に抗せざる敵を虐殺さるゝものならず。稍沈靜して其舉動を視其風采を察すれば豫想したる如き禽獸夷狄にはあらず、却て感服すべき所もありて、頗る疑惑する所あり、一轉して其實際の事情を取調

べんとの念を起し、即ち横濱或は長崎に赴き、蘭人若しくは英人に就て其學術を研究し、兵制を講習するものあるに至れり。

凡そ交際は總ての偏執を和らぐるに足る、況んや我に於て全く誤解したる事實あるに於てをや。曾て攘夷の目的を達せざれば再び家に歸らじと誓ひたる壯丈夫も、彼の學術を研究し、彼の兵制を講習して外國の真相を知り、外人の性行を明にするに至りては、諸事の視察は公平となり、從つて彼の通商貿易は必ずしも我國に害なきのみならず、却つて有無相通するは自他の利益なることを覺れり。且外人にして苟も平和に我國に滞在せば、我より妄漫の舉に出で、窘むるの不法なるを辨へ、之を憂へ、之を憚ると同時に、攘夷の精神は大に融和して疾視反目の念は頓に減ずるに至れり。是は實に幕府の爲めに都合よき傾向にてありし、何となれば、幕府從來の政策を是認するものなればなり。因て之を謂へば、我國に開港鎖港の論の分れしは、外人に接すると否とによりて來るもの、如し。即ち局に當りて外交の衝に當りしものは、道理の爲めに、其心を感化せられて開港を承認するの已むを得ざるに至り、外人を見ず、外人に接する機會のなきものは、先入の誤想に依て外夷を幻象し、因て頑固なる反對を爲したるなり。獨長藩の外人に對し經驗を有したるに拘らず、始終一徹、攘夷を主張したるは異例なりと雖も、是には他に疑問の有ることなり、或は長藩策士の一策たりしやも未だ知るべからず。



書生は多  
く絶對的  
攘夷を唱  
ふ

然れども、書生の多數は絶對的攘夷を主張し、苟くも時を失はば、千載雪ぐべからざる汚辱を受  
けんと憂憤したるを以て、前述の如き實際説を唱ふるものあれば、目するに賣國奴を以てし、直  
ちに之れを殺傷するに至り、爲に非命の死を遂げたるもの頗る多し。

説いて此に至れば、當時國家の爲に正確なる意見は、如何に纖縷の如き命脈を繋ぎしやを知るべ  
し。文武の大權を解きて將軍を一文官と爲し、諸藩を朝廷に直隸せしめて、一統の下に歸せしめ  
んとの議論は、當時に於て、疑もなく最も進歩したる見解なりと雖も、此は幕吏は勿論、藩吏の  
間にも容れられざりしなり。是と正に同例に、攘夷は今日に於てすべからず、其準備の整ふを待  
つて大に爲すべしとの説は、事情に照らし甚だ適當なる説なりと雖も、這は多數の書生の心を翻  
すに至らずして、却て非常なる反動を蒙りしなり。今、若し人あり、此正當なる兩説を懷抱せば、  
一説の爲には幕府の行爲を賛して書生の言論を責め、他の一説の爲めには、書生の言説を助けて  
幕府の行爲を非難せざるを得ず。此の逆流と逆流との衝突する中間に、孤舟に棹して安穩に彼岸  
に達せんことは、其危険果して如何ぞや。

進歩せる  
適當の説  
は用おら  
れず

更に歩を進めて、彼等書生の議論を其心情より解剖すれば、各々區々に異様なる邊に於て根據を  
有したるなり。彼等が立脚の地は依然として藩なり。藩の習慣の中に人と爲り、藩に因て衣食す  
るものなり。假令へ、十年來の奔走に由て其垢を洗ひ去りしとはいへども、未だ全く藩癖を脱却

忠てふ文  
字に對す  
る解釋

するに至らず、自ら藩に重きを置かざるを得ず、藩の爲に力を盡さざるを得ず。假令ば、今「忠」  
てふ文字に對して解釋を下さんに、彼は藩の爲に忠ならざるべからず。従つて幕府にも忠ならざ  
るべからず。又、其尊王論の旨に従つて 皇室に忠ならざるべからず。此三つに向つて忠を致す  
は、固より可なり。但し其利害の衝突する場合に於ては、如何にせん、彼等は忽ち其所説を左右  
せざるを得ず。斯くの如き場合に於て、眞に國家の爲に盡さんと欲するものは、身を忘れ家を忘  
れて、藩の上に、幕府の上に、確と其見解を置くものならざるべからず。彼等の見識は已に學派  
に由て異同をなし、又藩々に由つて異同をなす。固より事務に適切なるの計を策する能はざるな  
り。

或は徒に慷慨悲憤、切齒扼腕、涙を揮つて國家の危急を嘆ずれども、胸中に一の經綸を有せざる  
ものあり。是等は婦女子の執念に近し。或は徒に他の嘲弄罵詈を事とし、曰く幕府の處置は因循  
姑息なり、何藩の處置は一も見るに足らず、彼藩は國家の逆賊にして狐狸にだも比べがたし、神  
州の運命は旦夕に迫る、何ぞ一英雄の出で、此妖雲を一掃せざると。是みな碌々人に依て事をな  
すのみと謂ふべし。

攘夷の問題に關しては、進歩主義の書生は其意見を發表するに窮して、一時の策畧に朝鮮征伐を  
主張するに至れり。其言に曰く「吾人は坐ながらにして攘夷を爲さんとす、是實勢に於ては窮策た

進歩主義  
の策畧に  
朝鮮征伐  
を主張す

幕府列藩の形勢及維新改革の原動力